怪談

—民俗学の立場から—

今野圓輔著

現代教養文庫 175

怪談

—民俗学の立場から—

今野圓輔著

現代教養文庫 175

怪談　民俗学の立場から　今野圓輔著　教養文庫　一七五

著者・今野圓輔

今野圓輔（こんのえんすけ）（本名円助）は大正三年、福島県の太平洋岸、相馬郡八幡村の小地主の次男として生れた。相馬中学から東京開成中学に転じたが、乗馬に凝って肋膜にかかり四年修了のまま帰郷、農業を見習う。一度他郷に出て後、三年近い農民生活を過したことは、郷里を客観視させる機会となり、他日民俗学を専攻する下地となった。昭和十年慶応義塾大学予科に入学、同十六年、同大学文学部国文学科を卒業。翌十七年毎日新聞に入社、社会・学芸・東日文化・「毎日情報」編集など各部をへて、現在、学生新聞編集部勤務。

慶大在学中、昭和十三年以後佐藤信彦、折口信夫両先生から民俗学の薫陶を受けるとともに、柳田国男先生に師事してオシラ神信仰を専攻。民俗学研究所理事、同代議員を歴任、現在は日本民俗学会評議員。また、昭和二一年から文部省迷信調査協議会委員となり、三一年まで生活慣習資料の蒐集、整理に参加俗信一般および霊魂信仰部門を担当、その改組により現在迷信調査会幹事。

一方、昭和二八年から渋沢敬三先生を中心として牧田茂、池田弥三郎、和歌森太郎、飯泉六郎、塚崎進氏らと「日本人」の綜合研究グループを結び、その成果の一部は、目下「日本人の生活全集」の形で世に送り出されている。

著書に「桧枝岐民俗誌」、「馬娘婚姻譚」、共編「日本人の生活と迷信」などあり。

¥ 120

社会思想研究会出版部刊

「幽霊って、ほんとうに出るものだろうか」「狐や狸は、じっさいに化けたり化かしたりするだろうか」——こうした素朴な疑問に、私たちは、理屈では否定しながらなにかわりきれぬ実感を持つにちがいない。本書は、豊富な実例と著者の民俗学的立場から、興味深く、これらの疑問を解き明かしていく。

カバーの絵は「番町皿屋敷」お菊の幽霊

怪談 民俗学の立場から

今野圓輔著

現代教養文庫

175

社会思想社刊

怪談 民俗学の立場から

今野圓輔著

175

★

現代教養文庫

175

怪　　　談

民俗学の立場から

今野圓輔著

社　会　思　想　社　刊

目次

I　幽霊・妖怪の登場

一、怪談はなぜもてはやされるか

夏の夜の寵児

「怪談を、こんなにむつかしく言わなくたって……」と叱られそうだが、考古学で発掘された古い道具だとか、宗教上の仏像とか、建造物のようなものばかりが、いわゆる文化遺産の代表のようにいわれるのはおかしいことで、ここでとりあげる怪談なども、じつは、われわれの文化遺産の一つというべきだろうと思う。

現在のように文化文明が高度になり、生活が非常に科学化されているといわれる時に、怪談のようなものが、なぜに、もてはやされるのか。このようなことは、きわめて素朴、低級なる疑問として、しばしば、一笑に付されてしまいがちなのだが、適当な解答が与えられないならば、やはり、学者には答える責任があろうというものである。

国民の教養が低ければ低いほど、いろいろな不思議や、解釈のつかないことは、これを神のせいにしたり、あるいはまた、たんに神秘的な現象として、解釈のつかないままに、おそれかしこんだりするのが、ふつうである。

だが、少くとも大和民族に関するかぎり、教養は高く、科学も進歩しているにもかかわらず、毎年のように、夏になればいわゆる怪談なるものが流行し、映画、芝居、講談、落語にいたるまで、怪談の上演されない年はないのが現状である。また、このごろのように、ラジオやテレビが

発達すると、その普及にともなってさらに盛行し、新聞、雑誌にも、かならずといっても言いすぎではないほどに怪談が登場している。そういう本書もまた、その一種なわけだが、このような一つの流行、眼前の国民大衆の趣好というものを、いったい、どう解釈し、どう考えるべきなのであろうか。科学の最尖端にも興味はあるけれども、このような八千万同胞身辺の未解決の問題にも近代科学のスポット・ライトはあてたいものである。

怪談映画の流行（怪談牡丹灯籠　<東映作品>）

四つの特性

実在しないはずだとは言いながらも、今なお、おびただしいばかりの怪談めいた経験談が、国民大衆のあいだには、伝えられ

てきている。これらの今まで伝えられた妖怪談とみられるものを整理して、柳田國男先生は、これをつぎの四つに分けていられる。

その第一は、ただ恐怖のあまり、ワッといって逃げ帰った経験。

第二には、相手が妖怪であることを承認、もしくは半信半疑ではあるが、おちついて、冷静な態度で観察し、自分の置かれた環境を考えることによって妖怪の正体を見破るといった経験。

第三は、はじめから、人間の側が、妖怪の存在を否定しているために、そうした環境に遭遇しても、進んで、その正体を暴露せんとし、反抗し、たたかわんとして、そうした相手のまったく存在しなかった事実を確認した経験、もしくは人間の側の精神的あるいは五感の迷いを起さしめた原因をつきとめた経験など。

第一の場合は、初めから妖怪の存在を信じている人か、もしくは、とっさに信じさせられた人たちが、経験することとである。

第二の場合は、妖怪めいたものは存在するはずはないが、そうした人間の経験談を数多く見聞していて知識があるために、そんな環境に置かれると、これだな、と意識するが、半信半疑なので、いくぶんの心のゆとりがあって、路傍の石に腰をおろして考えこんだり、タバコに火をつけて心をおちつけようと試みたりすることによって、妖怪めいた影響から自然に脱することができる経験である。

さらに、第四の場合として、あるいは第三の例外といってもよい経験は、まったく信じていない場合でも、いろいろの錯覚、または錯覚かどうかさえ確認しえないさまざまの経験もある。

妖怪談は、聞くものをして深浅の程度の差はあるが、大なり小なり、恐怖心を起させ、気味悪るがらせ、なんらかの精神的不安動揺をひき起させるのが一般の現状であるが、こうした人間の側の状態が存続するかぎり、かれらのなんらかの存在の余地があるわけである。

もともと、妖怪めいたものは、かれらの側に立って考えてみれば、現在語られ、見聞されるほどに人間を恐怖させるようなものでなかったのであって、妖怪はたんに、その存在なり、その威力なりを人間に認めさせようとするだけのものであった。

このことは、さまざまな人間の側の経験をとおして考察していくことによって証明されるのである。

すなわち、はじめからこれを信じている者にとっては妖怪による災害は少く、またそうした経験もかえって少い事実、これに反して、妖怪を否定せんとする者にはかえって災害が多くなっている。もちろん、徹底的にこれを否定する者に向っては、かれらの威力はおよばないわけである。

そして、このような信仰の衰退とともに、一般の科学知識の普及と、近代科学文化の水準が向上したために、かれらの威力は、しだいに衰えていきつつあることは当然なことである。

いずれにしても、これが人間の側の経験であるために、人間社会が変遷し、人の心や知識や環境が変るにしたがって、それらの反映としての妖怪社会は、当然に人間社会とその変遷過程を同じくしている。かれらもまた、人間生活とまったく同様に時代により、環境によって変遷し、消長のあることが明白に立証せられる。

その栄枯盛衰　幽霊にも妖怪変化にも、だんだんと歴史的な変遷がある。このことは、これからだんだんと、くわしくのべるつもりであるが、このごろ、もっとも人気のある幽霊は、生きのこったこの世の人に対する執念や恨みのひどいものばかりである。

物理的に考えればありえないものを、リアリスティックに描き出そうとすれば、そんな近代感覚・知識などとの矛盾を克服して、なおその出現の必然性を納得させなければならないのだから、どうしても、誇張されてくるわけである。それがものすごいほど、幽霊を見たい聞きたい人びとの要求にはかなうことになるのだから、戯作者なりシナリオ・ライターたちは、いや応なしに強調していく。そこで、双方が力を貸しあって、ものすごい、おそろしい一方の、いわゆる怪談物ができあがっていくことになる。

さらに、もともと、執念ぶかいのは男性よりも女性だというような国民感情も影響しているにちがいないが、女性が圧倒的に多いことも否定できない。それも醜い老婆や、よちよち歩きの少女の幽霊ではなしに、思春期もすぎた娘の盛り、女ざかりの、女の執念の一番盛んな年ごろの幽霊が人気を博しているようである。

いっぽう、ことに戦後にはなばなしく復活したのは河童である。河童がもてはやされるのと反対にバケモノとしての狐のほうは、もうほとんど人気をなくして、草深い田舎にだけ、ようやくその余勢をとどめているといってよかろうと思う。しかし同じ狐でも、ばける狐やばかす狐の勢力は衰えたが、憑く狐のほうは、いまなおしばしば話題になっているようで、徳島県あたりでも、この二、三年来、犬神つきをめぐって人権擁護局に提訴されたとか、あるいは徳島大学の心理学

の先生に、ご出張を願って説得してもらったというような生なましい例が、いくつとなく地元新聞などに報道されている。また、東北の三本木あたりでも、ある人に狐を憑けたという嫌疑を受けた某家では、青年団などからひどい共同制裁を加えられて社会問題化し、ラジオの、現地録音によって全国に放送されるなど、憑きもの現象だけは、気楽な寄席や映画の怪談ばなしとは別に、深刻な社会問題として認識されはじめている。

しかしながら、一般のバケモノのほうは、すでに今は小学校の児童たちすら、本気になってこわがったりはしなくなっている。親に「鬼が来るぞ」とか「天狗にさらわれるぞ」などといっておどかされても、笑ってほんきにしない程度にまで、その真実性をうしなってしまいつつある。

すでに昔ばなし、童話の世界、もしくは笑

人気の集中する河童展

いばなしの世界に堕落していきつつあるといっても言いすぎではないほど、妖怪変化の世界からいえば、零落した姿が現段階であろう。

怪談は、理外の理なるが故にもてはやされ、たんに奇を好む国民性が、これを今なお支持しているのにすぎないのか、身近なスリラーものとして探偵、推理好みを満足させているのだろうか。観たり聞いたりするたびにゾッとして肌寒くなるから冷房装置や扇風機の代用になるといえば駄洒落になる。

信仰に生き、やたらに疑ることを知らなかった素直な前代の人びとの霊魂観を、いまなお捨てきれないにもかかわらず、近代の合理化、科学化の傾向と民間信仰の衰退とが裏はらにミックスされて、不合理だが、非科学的だが、どうもまるっきりは否定しきれないといった現状をもたらしているのではなかろうか。

人間に精神作用、心があることは認めても、一たび霊とか魂とかいわれると「そんなものが」と言いたいのが、ふつうである。しかも肉親の入棺や埋葬の時、手を合わせ、冥福を祈らない人は、はたして何人いるだろうか。この人たちは何に手を合わせ、何を対象に祈るのであろうか。

ともかくも過去何百年か、さまざまな霊魂現象によって培養されてきているわれわれの知識を、なかなか忘れ去ることができないところへ、生理上の経験として、怪談とは関係なしにもゾッとしたり、総毛立ったり、鳥肌がたったりする機会はなかなかに多い。また極端に人工を生かして不自然になった大都会には前代人の経験できなかったようなあらたなる無気味さを感じさせる機会も少くはない。

この本には、霊魂という語があまりにもしばしば散見して、若い人には何か抵抗を感じさせるかもしれないが、こんなことを思いながら、現代における怪談のありようを考えてみたい。

二、怪談の主人公たち

幽霊　幽霊と妖怪変化とが、ごっちゃになって、両方いっしょというよりはむしろ、大都会では、妖怪変化のほうはもうほとんど人気がなくなって、もっぱらオバケとよばれる幽霊ばかりが人気の対象になっているのが現状である。そんなわけで現在〝怪談話〟といわれて講釈師や落語家がしゃべるものや、オバケ映画や芝居のだしものにしても、それらは、ほとんど幽霊の話であって、妖怪変化の人気は都会では、おとろえるいっぽうである。

わずかに鍋島の猫騒動とか、金毛九尾の狐というような一連の代表的なものが、妖怪変化が、もとのままのバケモノとして取り扱われているぐらいのものである。鍋島の猫騒動のようなものは、実際にあった生活資料をもとにしたというよりは、創作品を根拠にしているものであるが、それが、いつまでも民衆によってもてはやされるのは、猫という動物は、たとえば、犬とは違って、魔性のものだという、われわれの感じ方が、これをバック・アップしているからにほかならないとみるべきであろう。

しかし、幽霊のほうは、人間の——死んだ人の魂——なにか、この世に伝えたいことがあるた

めに出てくるという形であって、その正体も、原則としては近親者、もしくは、なにかの縁のある人の前に幻の姿を現わす霊魂である。その幽霊の正体なるものは、じつは枯尾花であるきづかいはないものだった。

たとえば、終戦後の幽霊をみても、われわれの記憶に、いまだに残っている二三の例をあげると、まず東京都文京区の八百屋お七の幽霊が出るというさわぎがあった。

これはNHKあたりでも録音放送をするといって、有名なアナウンサー・藤倉修一氏らが、徹夜で現場に張込んだりまでして、ジャーナリズムをさわがせたことがあった。しかし黒山のような人だかりのためか、さすが、お七の幽霊も恐れをなしたとみえて、とうとうあらわれなかったという茶番劇。

幽霊送り提燈（歌川国輝筆）

あるいは、終戦直後の酒不足時代、メチール・アルコールで中毒死する人が多かったころには、

そのメチールで死んだというモダンな幽霊が同じ東京都中野区のアパートにあらわれたり、東京銀座のデパート松屋の何階かにも幽霊が出るといわれて新聞にも大きく取り扱われて人気をよんだこともあった。

東京のような大都会でさえ、こんなありさまだから、農村では戦後の幽霊ばなしをかぞえあげただけでも、いったいどれほど多くの幽霊——あたかも実際にあらわれたかのような話題として語り伝えられているもの——が出ているかは、ちょっと数えきれないくらいだろうと思う。しかし、これらの幽霊ばなしに共通していることの一つは、そのうちの一つだって、人間の霊魂でないものはないということである。これをオバケというのは、言葉は同じでも内容がいつのまにか変遷してきて、幽霊を妖怪の中に取り込んできたからにほかならない。

妖怪変化　ところが、いわゆる妖怪変化なるものの正体は、このような人間の霊魂、あの世からの霊魂のあらわれではない。たとえば、山の中にいると伝えられる天狗とか、鬼とか、あるいは山童とか、山姥とか、そういうものが、古風な信仰の残留している農村に行けば行くほど多く信じられているし、海でいえば名前こそ幽霊だが幻の船である船幽霊とか、人魚、海坊主とか、あるいは海岸に濡髪のままでさまよう濡れ女とか、磯姫というものも漁村ではいまだに信じられている。

また、平地に出現すると信じられているものでは、あの原を通ると狐にだまされるとか、あの木の下を通ると狸に砂をかけられるとか、あるいはまた、あの橋を通る時にだまされるとかがあ

る。このように一定の場所をかぎって、そこと接触をもてばバケモノに出あうという例は、少しもめずらしいことではない。これらは、いずれも人外のものであって、人間の霊魂ではないのである。

ついでにいえば、妖怪変化といわれるものは、だいたい、その出現する場所によって一応の分類をしてみることが整理上、便利である。

その場所を山、平地、道路上、それから水に関係ある妖怪変化だと川、池、沼、海、海岸というようにわけることもできるし、家を中心として屋内、屋外というように家に纏綿するものも考えられる。つまり妖怪変化には、ある土地に定着しているという特性が認められるのである。

だが、幽霊のほうは、ふつうは、ある一定の場所に固定されず、空間を超越しているのが、特色である。瞬時にして何百キロでも飛行できる飛行性があって、大阪の幽霊が東京へ出ることができ、九州の幽霊が北海道へ出ることも、けっして意外ではないのである。これに反して妖怪変化のほうは、青森の狐が四国へ出るとか、九州まで出張して化けて出たということは、いわゆる田舎わたらいのほかは、日本人の生活経験としてはなかったことである。

そうはいっても、幽霊の仲間のうちには、たとえば○○病院、××寮の「あかずの便所」の怪だとか、△△旅館の何号室、幽霊長屋のように、一定の部屋、建物に入ると出るとかいうものもある。これらは、その場所で、非業の最後をとげた……というように、出現する必然性がついてまわっている幽霊で、「魂魄ここに止まりて……」といった霊魂の土着とでもいうべき種類のものである。

水辺に住む代表的な化物としてのカッパは、どういうものか最近、妖怪変化界の寵児であって、単行本も出ており、詩や歌にもよまれ、小川芋銭以来いわゆる河童の図というものが多くあるし、商品として図案化されているものもたくさんできている。

河童にちなんだいろいろなおもちゃや、直接には、なんら信仰と縁のない河童祭までがつくられている。

化猫（月岡芳年筆）

そのほか、もっと伝統ある由緒の正しい妖怪変化めいたものには、家に纏綿するものがかなり重要視される。たとえば、東北の岩手県あたりで信じられているザシキワラシというおかしなものがある。これは、いわば、子供の形をしている神様である。

ふだんは、ぜんぜん姿を見せないまま神棚にまつられているわけだが、退屈し

たようなとき——おそらく、そうだろうと人間が想像するだけだが——食事中に家人のおぜんを中空に浮かしたり、茶碗をひっくりかえしたりするようないたずらをするものと信じられている。田植の手不足には子供の姿をして手伝いに出たとか、あるいは農繁期に姿をあらわした、というような例もあって、別にのべるように神様と妖怪変化との中間をしめる存在というべきものである。このほかにも納戸婆、倉婆、灰婆、倉ボッコなどとよばれる、屋敷内のバケモノのようなものも信じられている。

また、季節によってあらわれるモノとしては、雪の降る時にあらわれる雪女郎とか、和歌山県あたりに出る——これは、おそらく巨人伝説にも関係あろうと思うが——大男の雪の怪〝一本足〟などもあげることができよう。雪のバケモノとして、雪女郎だけが非常に有名になっているが、たとえば、青森県でミゾレの降る晩に甘酒を売り歩くまぼろしの甘酒婆なども、季節による日本の妖怪変化であろう。

関東多摩川流域で、いまだに信じられているミカエリ婆さんとよばれる老女のバケモノとか、あるいは神奈川県相模川の両岸あたりで時を定めて家々をのぞいて回るという一目小僧のようなものもある。

そのほか、東京に住む者なら誰でも知っていたというオイテケボリのように、そこを通ると、なにか声を出してさけんだり通行人によびかけるというような一連のバケモノも昔から信じられている。

もっとも例の多いのは、そこを通ると小豆をとぐようなザック、ザックという音をたてるとい

うアズキアライとかアズキトギだとか、そこを通ると「おぶってくれ、おぶってくれ」とよびかけるバリヨンとよばれるバケモノ、それから少し性質が違ってスネコスリとか、ヤカンコロガシのように、その坂を歩く人の足にからみつこうとするようなものなど……。このように、一口に妖怪変化とはいっても、じつは、いろいろな種類のモノが、われわれ日本人の間には、昔から信じられてきていたわけである。

憑きもの　最後に、ひろい意味の妖怪変化、もしくは、いま使われているようなオバケとは、少し性質は違うが、人間の身体の中に入り込み、とりついて、人間をなやますものにツキモノとよばれているものがある。

「憑く」は「モノに憑かれたような顔で……」などという使われ方でいまも残っているが、なにものかの魂、あるいは意志が、人間の体内にもぐりこんで、その人間の意志に反しても、いろいろな現象をきたさせる、あるいは、いわゆる憑依現象を起させる対象で、これには、昔から、狐が有力なスターとしてもてはやされてきた。

狐憑きという言葉は、ほとんど全国しらない人はないだろうと思うが、これも最近では、東北関東あたりより山陰地方などが非常に盛んで、社会教育や保健衛生の大きな問題だとして、いつも迷信打破運動、生活改善運動などの重要な項目に取り上げられている一つである。

人間の体にとりつく憑きものの種類には、この狐のほかにも、たとえば、四国の犬神とか、ごく小さい蛇のようなものと信じられている蛇神、トウビョウなどというのがある。

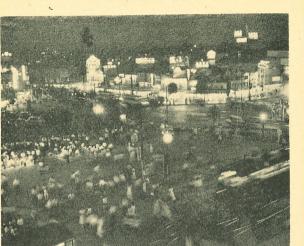
三、幽霊・妖怪出現の背景

雑音にひしめく都会　今までのべてきた怪談の主人公たち――幽霊、妖怪および憑きもの――は、それではいったい、いかなる社会環境を背景として出現するものであろうか。

それらの存在――すると信じられ、経験される――のしかたは、昔と今、都会と田舎、また経験する人間の教養・知識・環境などによってちがいがあり、おのおのの型を持っていることは当然である。

ここで、妖怪現象についての正確な実証科学的基礎知識をえるために、都会の人びとに対して地方の生活環境を、また地方の人びとで、都会の環境をよく知っていないといった人びとのためには都会の環境を、改めて考えてもらうために、その双方を概観しておくことはけっして無駄なことではあるまい。

こうした生活経験の基盤となっている背景を理解することによって、はじめてわれわれは、この後に書かれているところのさまざまな現象をまじめな問題として考えることができるだろうし、同時にまた、ある環境だけでは説明のしにくいようなことも、ほかの異なった環境においては、なんの不思議もない、当然な現象であることを了解することができるだろうと思う。

すなわち、われわれは、都会に住む人びととの生活というものが、地方に比較して、どんなふう

お化けも顔まけする明かるい大都会の夜景

に変っているか、そこに住む人たちは、いかなる育ち方をするものであるかを、改めて考えてみなければならず、同時に、同じ都会でも百年以前と現在、五百年昔と今のあり方、その変遷の各段階を考えてみようというわけである。

現在の都会の子供たちは、幼い頃から近代機械文明の産物であるところの汽車や電車、飛行機などの絵本や模型をもてあそび、早くからこれらの実物を見聞し利用し、そうしたものにとりまかれながら生れ育ち、同時にまた数学や物理・化学のような自然科学の理論と知識を、地方生活に比してずっと多く日常生活の中ででも身につけながら成人していくのである。そうした都会人は、家庭

にあってもガスや電気コンロで食物を調理し、暖をとり、電話を使って見えざる人びとと話をとりかわしている。

交通機関としては各種の汽車、電車、自動車などを朝に夕に利用し、小学生ですら飛行機に乗ることも、それほどには珍らしくない。サラリーマンでなくても映画館やデパートなど鉄筋コンクリートの高層建築に出入りし、白昼すら光々たる電灯をもってビル内の暗さを補っている。また何十万何百万という人間同志が、わずか数キロのせまい一地域に密集して暮している。四通八達しているあらゆる道路には街灯がともされ、ふつうには、都会にすむ人は真の闇を経験する機会はいたって少いのである。あらためて申すまでもなく、これが大都会の現代生活である。

こうして機械文明の騒音に囲繞せられ、昼をあざむく人工照明と、人間の雑踏するといった都会の環境の中においては、妖怪の存在する余地は極めて乏しくなったと同時に、けっして昔からこうした都会があったわけではなく、また現在なお全国がこうした都会ばかりではない。

ランプにかすむ田舎　ひるがえって現在の地方の生活を考えてみれば、一般的にはこれほど交通が発達したとはいえ、日本全土の大部分を占める多くの村むらでは、汽車とも電車ともいたって縁が薄く、自動車さえもまだまだ珍らしがられ、人びとは、飛行機の空飛ぶごとに、大して変ったものの飛んでいないことをよく承知の上ながら、やはり小手をかざして見上げ、または屋外に走り出るような生活にあけくれているのである。

そこには機械の騒音もなく、一生一度も電話を使わぬ人の数は、どれほど多いか知れない。電

灯も何十年か前までのランプに幾倍もあかるくないボンヤリとしか照さぬ弱いものであり、その電灯すら知らぬ村人は想像以上に日本には多い現状である。

その上、都会と大いに異る第二の点は、都会ではおたがいに見知らぬ人びとが何十万、何百万と同居しているに反して、村に住む人びとは、おたがいに知人であり、年長者は、若い者が赤ん坊の時から成長した今日までのことを大小となく知り抜いているばかりか、その親も爺婆までも知っており、話だけは先祖代々のことまで相互に知りぬいている知り合い同志だけが、同じ土地に暮しているのである。

このような村の道路というものは、一本一本ごとにその道を通る人が、ほぼきまっていて、ある路上で、ふつうにはそこを通るはずのない人が通るのを見かければ、かならずどこへ行くのか、なんのために行くのかを、不審がって問うのが常である。

こんなふうに、いわば、よけいなおせっかい、失礼な質問を受けても、村の人びとは、けっして失敬だとも、よけいなお世話とも感じない。このように通うべき通路も、また通る時刻すらも地方の村むらでは、ほぼ自然なる定刻がある。村人以外の来訪者が道路を歩けば、村の人びとはかならず異常なる関心をいだいて注目するわけである。

地方の村には、おたがいに見知らぬ、どこの誰だか、路上であってもわからぬという人は一人もいないのがふつうである。異風、異態にして素性のわからぬモノの通行がふつうなのならバケモノとただの通行人の区別はつけにくい。

また、都会の人びとはいたずらに気ぜわしくなってしまって、ほうっとして周囲の自然現象を

眺めるようなゆとりも少く、人工の照明はあまりにも明かるいので、月の光りや星のまたたき、雨でも降ってこないかぎりは空の晴曇のわずかなちがいを見上げて気づく機会はほとんどなくなった。天然の明暗は地上の照明のためにはね返され、荒々しい騒音は自然の微妙なる音を圧してしまっている。

しかし前代の小さな日本の都会、および現在でも大都会以外の広範なる地方においては、太陽の光線のかすかな明暗、微妙に移り変って行く自然の景色をこまやかに観察する明け暮れが続けられている。そうした人びとはまた、そのような微妙な変化を、きわめて注意深く見守っていることが、村の生活の安全と幸福のためには、ぜひとも必要だったのである。

カワタレ時(どき)・逢魔(おうま)が時(どき)　近ごろの都会人にとっては、「カワタレ時」とか「タソカレ時」または「逢魔が時」などという言葉は、たんなる文学語にしかすぎなくなり、一種の詩にすぎなくなってしまって、ラッシュ・アワーなどという言葉がその時分の代表語になってしまったが、現在の都会人の夕方のラッシュ・アワーのころは、じつは前代および現代のものさびしい地方に住むという百鬼夜行族の午後のラッシュ・アワーではあったのである。

真暗な夜の闇が、だんだんに薄れて、気がつかぬほどずつ夜が白みかけてくる時分、まだ、すっかり夜が明けきらぬころを——昔の人は、こんな、かすかな明暗の差にも繊細な深い観察の目をもっていた。そうして勤勉な田舎の人たちは、こんな時分から朝の営みをはじめていたためでもあるが——たとえば、アカツキ（アカトキ）ヤミなどといっていた。その一時の暁闇がすぎれ

ば、すなわち、夜はすっかり明けきって、朝になるのである。

ちょうどその時分がカワタレドキである。むこうから来る人の容貌が、はっきり見定められない「彼は誰だろう」、見覚えはあるが、誰だかわからないといった明暗の時刻である。

万葉集の巻廿に、

暁の　かはたれ時に島陰を
漕ぎにし船のたづき知らずも

という防人(さきもり)の歌のあるカワタレである。

また夕方になって、やがてトップリと日がくれるちょっと前、昼の残光が一時強くなったような感じで、あたりがパーッと目のさめるように鮮かに見える刻限がある。ほんのわずかの間であるが、この時間がすぎると、もうあとはどんどん夕闇が濃くなっていく、そしてほんとうの夜になってしまう間に、何も彼もが、どうしてもはっきり見定められない時刻がある。このころが「誰(タ)ソ彼(カレ)時」だった。

目の視覚からくる不安定は、心の不安を当然にともなうから、この時刻を「逢魔刻(おうまがどき)」という言葉があるように、悪い時刻、いろいろなあやしげなモノどもが、はびこり、歩きまわる時分だと一様に感じられたわけである。

だから子供たちが、こんな時分まで屋外で遊びほうけていると、天狗にさらわれたり、隠し神様にかくされたりもするのを親たちは非常に警戒もし、事実またそうした現象はしばしばくり返されもしたわけだった。山梨県の西八代あたりでは、そんな晩方をマジマジゴロといい、三河の

北設楽ではメソメソジブンといっており、そのほかウソウソとかケソケソとかいっているのは、みなこのころのことである。東北地方でオモアンドキというのも、アマノジャクの出て歩く時刻だというから「思わぬ時」であったらしい。

歌や語り物によく使われるタマグレのマグレも同じ心持で、関東では今でもヒグレマグレ、対馬の北部ではマグレヒグレという語がある。

佐渡の諺に「あとの子は狢の子」というのがあるが、夕方に子供を誘って行く怪物を多くの地方ではカクシ神といい、沖縄ではモノマヨイ、栃木県の鹿沼地方ではカクシンボ、秋田の雄勝郡ではカクレジョッコ、神戸市ではカクレババ、島根県ではコトリゾとよぶ。そのほか、東北のアブラトリ、東京のヒトサライ、長野県埴科地方のフクロカツギなど、いずれもこの時分に徘徊して子供たちをさらって行くと信じられていた妖怪めいたモノである。

こんなわけで、この時分に、途中で行きあった人間同志は、かならず挨拶をかわして、おたがいに誤解されないように心がけるのが大切な礼儀であり、また、そんなものでないことを、たしかめようとするふうは、一般になお行われている。（柳田國男先生「妖怪談義」）

それが、都会では、誰一人挨拶もせずに行きすぎるようになり、生身の人間のおびただしい追いはぎ、ギャングの類のみが徘徊するようになったのだから、もはや日本在来の、間の抜けた素朴なるバケモノや、隠し神様たちの活躍する余地はほとんどなくなってしまったのである。

ことに怪しいとみればすなわち、懐中電灯などをパッとつきつけられたりするのでは、彼らはもはや手も足も出ずに敬して遠ざかる以外には、ほどこすすべもなくなった。ともかくも、こう

した環境の違いというものが、妖怪社会にとって非常な影響を与えるものであり、人間の側についていえば、やはり彼らを経験するにふさわしい環境がなければならぬことを知っておかねばならない。

つまりは、彼らは、人間の信仰上の、そうした知識にもとづくところの感覚上の産物にすぎないのであるから、人間の生活が改まって、淋しい不安な気持が少なくなるとともに、自然科学の知識が進んで、それが人間の側から出ていることを知るようになれば、したがってそれだけ、そうした現象もまた、少なくなるのは自然のなり行きなのである。

ネオンに挑む幽霊　こうした点、幽霊の方は、いまだによほど条件は有利である。幽霊は真夜中の丑満刻に出ると定っておって、都会でも一番ひっそりした人びとの寝静った時分、多くは百ワット、六十ワットの電灯の消されている時刻に出ることになっており、人びとは夜半の寝覚めに、フッと心の空虚さに気づいたり、夢さめては古い時代からの枕神の信仰などに思いあたるような精神のたゆたう瞬間に出るわけなのであるから、一九五七年の東京、大阪にも、まだその存在を都会の人びとに告げ知らせることができるのである。

こうした現実の生活環境が、妖怪幽霊現象を成立せしめる基盤の一つであるが、さらに根本的基盤は、この国に生成、変遷し、歴史永くかつわれわれの日常生活に強力な影響を与えている民間信仰である。

妖怪にせよ、憑きものにせよ、また霊魂信仰そのものとしての幽霊はもちろん、これらの諸現

象は一つとして、その発生がわれわれの信仰にもとづかぬものはない。

彼らはいずれも、もともとは正常にして敬虔なる、わが国、民間信仰の対象の零落した末期現象にすぎないのである。

II　幽霊の歴史性

一、夏芝居・盆興行と幽霊

盛況の幽霊ばなし　五月、六月の声を聞く頃になると、毎年のように、どこかの雑誌社から怪談――幽霊ばなし――の執筆依頼がある。そうなると、書く方では「もう今年も怪談を頼みに来たよ」と、夏の近きをしのばせられるわけだが、ことほどさように、夏と幽霊は因縁が深くなっている。

観客動員数のもっとも多い映画のお盆興行をみると、夏芝居における幽霊よりもいっそうその縁の深い――ということは、大衆の要求にこたえようとしている――ことがわかる。

〝週刊新潮〟の見出しによると「オバケ映画まかり通る――この道は消えてゆく道――」（昭和三二年六月一七日号）とあるが、はたして消えてゆく大衆の趣好であるかどうか。もっとも、ここで「消えてゆく道」といっている内容は「オバケ映画」そのものではなくて、オバケ映画に出演するスターは女優生活の最後だから、「女優の消えてゆく道」なのだという意味で入江たか子や相馬千恵子などの、そうしたコースをたどった名をあげている。そんなことを言われるのも、なにか因縁話めくけれども、ともかく昭和三一年のお盆映画には、おきまりの四谷怪談をはじめ怨霊佐倉大騒動（新東宝）、怪猫五十三次（大映）、怪猫乱舞（東映）などが人気に投じ、昭和三二年夏には、怪猫夜泣き沼（大映）、怪談累が淵、本所七不思議（いずれも新東宝）、番町皿屋敷（東

映）、怪談色ざんげ狂恋女師匠（松竹）など、ぞくぞく銀幕に登場という盛況である。

ハリウッドあたりではどうか詳しいことはわからないが、怪談、幽霊映画の海外作品だって輸入され上映される時期は、やはり夏が多いように思われる。フランケンシュタインばりのものや、ひところ流行した透明人間などの映画ばかりでなく、たとえば、火星人ものとか「大アマゾンの半魚人」「海底二万哩の大怪物」、昔流行語にまでなったキング・コング、アメリカでたいそう受けたという和製の怪物ゴジラ映画など、いずれも怪奇、怪談物の人気に投ずることは、あながち日本だけのことではなさそうである。

現実逃避の傾向だとか、暑い夏のさかりに氷水一杯のんだ程度の涼味が味わえるから……などと新聞雑誌には、よく解説が出るが、夏――お盆のころに、このような幽霊物がしきりに上演されるのには、それだけの、かくれたる根深くかつ歴史的なものが底にあるからである。

もう一つ例をあげてから、この問題を考えることにしよう。日本教育新聞の「夏の科学」という読物欄の前おきにつぎのような記事をのせ、筆者のエッセイなどを引用して、大いに怪談を「科学する」といった一文があった。

「あれっ六年前に死んだ男、戸の隙間から毎夜の訪問」という四段ぬきの大見出しで、東京芝白金三光町白禅寺境内小池政治郎さん方の霊魂騒ぎ（毎日新聞七月二九日付）だの、国電信濃町駅前森田屋果物店に、一時間前に息を引き取ったはずの男があらわれ、黒リボンつきの果物かごを注文して消えた話（東京新聞七月二九日付）だの、天下の大新聞が、このところオバケ・ニュー

ズのせりあい。

むろん、そういう噂さがあり、評判が立っているという、そのこと自体は事実なのだから、これを報道することは、いっこうさしつかえはないわけだが、問題は一九五一年の夏に、しかも大東京の真中で、そういう噂や評判の立つ余地が、まだあるという人心のエヤ・ポケットの存在することなのだ。

今迄夏芝居は、歌舞伎座も明治座も四谷怪談、牡丹燈籠、玉菊燈籠、高座でも一竜斉貞山の怪談ばなしは大入満員と、水銀柱の上昇とともに、まことに夏はオバケの天下。だが、これが芝居や文芸の世界だけを守っていてくれるうちはよいが、現実に新聞社の自動車が飛び出すようになると、世道人心まことにおだやかではなくなる……」（昭和二六年八月四日付）

お盆と幽霊の因縁　「世道人心まことにおだやかならず」は鉛筆の余勢にすぎず、むしろ夏の宵に幽霊ばなしを楽しむ生活は、おだやかなる世の中というべきだろうが、話をもとにもどして考えてみると、とにかく、夏芝居、お盆興行に幽霊が多く扱われるのは、盆の精霊祭の時期の前後だからにちがいない。奥座敷や廊下に盆ちょうちんが、あかあかとともり、庭前の竿の上に高燈籠がかかげられる時期はすなわち、祖先の霊魂が大挙して、この現世に招きおろされ、供養される時にほかならない。そして、この時期には「招かれざる精霊たち」もまたゾロゾロとやってくることを、この国土に生れ育った者ならば、長い間意識して暮してきたのであった。

祀るべき子孫のいまは絶えてしまったモノ（精霊）、結ぶべき縁のない無縁ボトケ、亡者などを

はじめとして、天地に満ち満ちるような無気味さを感じさせるまでに、ありとあらゆるデモン、スピリットのたぐいまでが、お盆をよすがとしてやってくるかもしれない。仏徒は施餓鬼を行い、民家では村の境、道の辻もしくは庭前、縁側などに無縁棚、餓鬼棚を臨時にしつらえて、これらの亡者たちにそなえ、舞台ではすなわち怪談物を上演する。

身の毛のよだつ？ 牡丹燈籠（東映作品）

芝居にせよ能にせよ、ともかくも浮かばれざる霊魂が、その怨念なり所存なりを訴えて出現する、それを舞台の上で解消させてやるとそれをまざまざと実演してみせるこ

怪談ばなしの専売・貞山師匠（読売グラフ所載）

（シャク台の中に装置したライトを自由に点滅させて，話はいっそうすごみが出る）

とによって、ほかのもろもろの精霊たちも、その舞台の上の幽霊が、たとえばうらみをはらしたり、成仏するありさまを見ると、それに感染して、この世の人間にたたったり、とり憑いたりしないで帰ってしまうものと、われわれは信じて安心するのである。観劇しながらホトケの供養をしているようなものだともいえるかもしれない。

もちろん今の人たちは、いちいち、そんなことを意識して観劇に出かけたりはしないのだが、夏芝居なり、お盆興行にオバケ映画が盛んに上演されるのが恒例になってきた理由は、こうしたところに歴史的な原因があったのである。

もともと、こんな理由以上の、より切実な要求があったのだが、ともかくも夏になると幽霊を上演しいしいしているうちに、それが固定化し、くせになって、夏になると、幽霊物を上演しないと、なんだかものたりないような気がしてくる。しいて言えば、そうしないではいられないような衝動に駆られてくるというのも、われわれだけの固有なる民族性みたいなものかもしれない。

怨霊ものの一つで、佐倉宗吾などの怪談から思いあたることに、芝居や狂言における曽我物の人気の異常さがある。

曽我兄弟は五月の二八日に富士の裾野で仇討本懐をとげて死んでいるが、田植をひかえた五月は、農民にとっては、一年中でもっとも厳重な物忌みを必要とする時であって、少しでも怨霊めいたモノ――人や作物などにタタリをする可能性のあるもの――は、じゅうぶんに弔ってその霊をなぐさめておかなければ安心できない人びとが、昔は今よりもずっと多かった。

五月五日の節供はまた御霊会にも関係があったらしく、五月の御霊は、また特別な関心を払わねばならないと信じられていたおそるべきモノでもあった。佐倉の宗五郎などもそうであったろうが、曽我の五郎や鎌倉権五郎、大人弥五郎など、御霊と五郎の似たような名称から転訛されて、その頃になると、若くして死んだ曽我兄弟ことに五郎を思いださないわけにはいかなかった（折口信夫先生「芸能民習」）らしい。

御霊信仰はわが国の民間信仰では太い一本の幹をなして今になおその名残りを、農村における実盛送り、虫送り行事などに留めているものである。御霊信仰というのは「怨霊の活動によって疾病が流行するとて怖れられた信仰形態で、都市的生活が進んでくると集団生活のために、思い

がけぬ災厄が発生するようになるが、これを怨霊の活動に帰して考える傾向があった。ことに奈良時代の末から平安時代にかけて貴族の対立抗争のために失脚した権力者の霊魂が祟ると信じられ、その最初の例は貞観五年（八六三年）五月二〇日の神泉苑の御霊会であった。その後、祇園、北野、天神、今宮などが現われ、上御霊、下御霊の両社が七、八月にまたがって、にぎやかな祭礼を営むようになり、こうした都の御霊信仰が、しだいに地方に及んでいった……」（民俗学辞典）。

ある学者の意見　折口信夫先生は「夏の歌舞伎の舞台出入りの単純にして、ものさびしさ。こうした心の奥に待ち迎えるものがあって、単純にして爽快に、幽暗であって寂寥な夏狂言を呼び起したのだ」という考えには「そうした心の底の印象だけでは、人は動いてはいなかった」と反対され、また「〃鯉つかみ〃のような水芸に近い狂言、〃山帰り〃のような身軽な季節の所作事の一団があるのだから〃四谷怪談〃だの〃累物語〃だの〃木幡小平次〃〃皿屋敷〃だの〃笠森おせん〃なり、新しい所では〃敷島譚〃なり〃乳房榎〃なり〃牡丹燈籠〃なり、皆身軽で、経費が少くて、水のふんだんに使われる場面があるのだもの。何もかも脱ぎ棄てたいという苦しい気持を救うために、怪談物が行われるのも不思議はない。五月興行から盆狂言へと飛ぶ、小屋のあそんでいる間に、廉価の芝居を打ったのが起りだ」という意見にも「それは結果であって、夏芝居に怪談物の出る理由にはならないようだ」と反対されている。

そして、「怪談物の題材としては木幡小平次や累などは、江戸狂言に古くからとり上げられて来たものだが、今あるその流れの作物は皆順送りに書き直した同類の物の遥か末の作品である。

いちいち年表にとっても見ないから、無条件賛成を得るほど、明快なことは言えないが――夏芝居が怪談物をとりあげるようになったのは、そんなに近代にはじまりがあるわけではなさそうだ。まして松緑松助や梅寿菊五郎あたりの近代の役者に、その初めを求めるのは、間違いというてもよいようである」と、その起源、下地の古く遠いことを説いていられる。この、折口先生の怪談物にふれられた「夏芝居」＝全集第一八巻＝を読んで、要約しておくことは、怪談と夏の芸能についての正しい常識を身につける上に非常に役に立つと思う。

○村むらに残る演劇――地狂言――は農閑期に行われるのがふつうだが、それらは盂蘭盆にも行われた。

○歌舞伎踊りが固定して歌舞伎狂言ができる筋道に大きな影響を与えた念仏踊りおよびそれの脇芸としてつけ加わっていったもの――因縁譚ともいうべき踊り狂言などが、その性質上、盂蘭盆前後に、成仏せぬ多くの魂をなごめる形のあったこと。

○能楽の修羅物の類が、亡霊の前世と今の修羅道の苦しみとを前後のシテが役として演じることになっていたが、こういう精神が念仏を通して念仏狂言となった。

○農村には盆前から虫送りという作物の病虫害をはらう行事があるが、その送られる虫の代表のように感じられていたものの一種に、死にぎわの一念が長く禍いするものとして恐れられていた人たちがいる。斉藤実盛、佐倉宗五郎、宇和島騒動の山家清兵衛、曽我の五郎などは夏から秋口にかけて稲虫や流行病というと、かならず思い浮べられた人びとだった。

○昔の都会は田舎の生活から切り放されていなかったから、真夏の芝居も、やはり農村的な何

かの意義がふくまれていたはずであり、作物の害虫に縁のある怨霊の事はやはり念仏関係の詞章や演劇類似のものに多く伝えられたから、夏の舞台はどうしても陰惨さや残虐味を多く持ってくる。

○さらにそれがひき続いた初秋の盆狂言――精霊にかかりあったとなると、どうしても幽霊や怨霊、妖怪変化を題材にとるようになる。

○怪物、怨霊、悪鬼、亡魂などの神変不思議を説く本地物を土台とする人形芝居は、人外の恐しいものを登場させるばかりか、その為掛物が夏芝居にからんでくる。歌舞伎が水をふんだんに使って涼しがらせる工夫は、この人形芝居からとりこんだものだが、ここにも――怪談と水芸――夏芝居の力強い傍因は備っている。

○江戸の町の作者などが、こんなに水に深い由緒のある伝説を題材にとったのは、時期からいって水神祭が近かったからとも思われる。

二、幽霊あ・ら・か・る・と

足のある幽霊・ない幽霊　舞台に幽霊が出ると、近頃は、こわがるどころか、ゲラゲラ笑いだす人さえいる（山本二郎氏「幽霊の芝居」）そうだが、そんな若い人たちでも「幽霊に足がなくなったのは、新しいことなんだよ」というと一様に真顔になって「へえ、そうですか?」と、こっ

ちの怪談に身を入れてくるのがふつうである。

ことほど左様に、しかけ芝居の足の末細りになった近代的な幽霊ばかりが、今では全国の若い人たちに普及してしまっている。

芝居にはいたって暗く、自信のあるもの言いはできないけれども、このほうの強みは、民俗資料とは違って、一の狂言が、いつ誰によって書かれ上演されたかが、年代記ふうな記録によってはっきりわかっていることである。ともかくも現代の幽霊の姿形というものは、幽霊劇によって定形化したことは、まちがいない。

しかけ物、ケレンによって考案がつみかさねられてきたわけだが、こうした芸能上の幽霊の技術は、江戸の河原崎座の鶴屋南北と、名優尾上松助の合作によって工夫され、今から一三二年前の文政八年（西暦一八二五年）三代目尾上菊五郎によって上演された怪談狂言「東海道四谷怪談」が決定版になった（渥美清太郎氏「幽霊芝居ばなし」）ものというのが定説のようである。「姿や動作で、見物をおびやかした幽霊は南北と松助の「天竺徳兵衛韓噺」が初めてであって、怖いもの見たさの江戸市民が殺到し、皿屋敷、小幡小平次、累などが、あいついで上演された」と渥美氏は説かれている。

この松助が円山応挙の絵などを参考に扮装を考案し、裾をジョウゴという、だんだん細く長くひく形にして足を見せない工夫をこらしたり、宙乗りをさせるなど、しかけ物に技術改善をはかったことは民衆の信仰上の幻を具象化する上に非常な影響を与えたことは当然であった。ほんのわずかの時間のうちに、幽霊から足を奪ってしまった下地は、われわれの信じてきた霊魂の飛行

性の合理化ともいえると思う。幽霊にはむしろ足のないのが自然だったともいえるのである。

人魂のさをなる君が唯独り逢へりし雨夜は久しとぞ思ふ「万葉集巻一六）——真青な人魂さんよ。私とお前さんとが以前出会った、あの雨降りの晩

幽霊の変遷（1）
ほとんど生前の姿で書かれた道真の幽霊（伝藤原信実筆）

からは、随分、待ち焦れて居たことです—（口訳万葉集「折口信夫全集第五巻」）

というふうに、人間の霊魂が形あるものとして、すでに万葉時代から伝承されてはいたが、そんなものが、今のように怖ろしいばかりのものになってきたのは、大いに人工が働いていたのである。

幽霊がいつも柳の下に出るというのも

定型化してきたが、これが天狗の枝垂栗だとか寺の枝垂桜と縁のある変遷である（柳田國男集「しだれ桜の問題」）ように、足のない幽霊というのも、たんなる新案特許とはいえないかもしれないけれども、文化、文政ごろ、舞台上にもっとも多く幽霊が現われるようになると、これでもかこれでもかと刺激の強い血みどろの怪談狂言がくりひろげられてしだいに民間の信仰からは遠くなってくる。

幽霊の変遷（2）
生前の姿に三角布と白衣をつけ死装束で出るようになった。

そしてそれがもてはやされると、こんどはそれがふたたび民間に根をおろして「幽霊とは、こんなもの」という知識が養われてくることになる。

ともかく生霊や怨霊などは平安朝ごろすでに大変な活躍ぶりを示しており、源氏物語でも夕顔の巻など鬼気せまるばかりのモノノケが活写されてはいるが、そんなものがすなわち今ふうな幽霊でないことは言うまでもない。

中世の能楽を見ても、それらはまるで亡霊、モ

ノノケの文芸、芸能といってもよいほどで、こうしたものが歌舞伎狂言にも筋を引いてくるのだが、能ではほとんど史上の人物の幽霊が名乗り出て、来歴をのべたのち「跡弔いてたび給え」と後世を頼んで消えていく――そこには血みどろな怨恨や復讐の要素は見られないのである。

創作された――国民大衆の日常生活における経験ではない――妖怪は、いずれ別な機会に詳しくのべるつもりで、ここでは、これ以上にはふれないでしまうが、ともかくも足のない幽霊というものは、幽霊の歴史から見れば近代化であって、けっして昔ながらの姿ではないこと、それがまた、文化人――ということができるならば――都会の人びと、つまり文芸や芸能によった知識で暮している人たちの間では、江戸時代の末ごろには、ほぼ足のないものに固定してきたことだけを知ってもらって、話をさきへ進めたい。

そうは言いながら、一方では、昭和年代の東京における幽霊さわぎでも、なおカラコロ、カラコロという高下駄の音を都民の耳にひびかせているという矛盾しているような古ふうな幽霊を追求するほうが、筆者の側のここでの主たる目的なのだから、ほしいままなる空想の作物については、早々にペンをおかなければならないのである。

新旧文化の併存　このごろのようにラジオ、テレビ、映画や新聞雑誌の類が全国津々浦々まで普及してしまうと、たんに陸上や海上の交通上の遠近とか便不便を超越して、新しい生活様式とか流行の伝わり方が、非常に早くなって、その新旧の差がいくらもなくなってしまう。

ただそこに差が生ずるのは、それが日常生活の中に実際に吸収され、身につき土着する遅速と、

もう一つは地方の人たちが、それらの新文化、新文明、新しい生活知識や暮し方を吸収し土着させるに際しての選択であり、なにを土着させ、なにを土着させずにしまうかという受入れる側の智慧や環境いかんである。

婦人の髪形のパーマネントのように、あっという間に全国に普及するものもある一方では、いつまでたっても普及しないもの、あるいは、地方へ伝播する途中で、いつとはなしに立消えてしまうものも少なくはない。

その一方では、新しい文化なり、新しい流行を生み育てた都会、文化の中心地だけをみていると、いつのまにか、ある流行が移りかわって、つぎの新しいものになっているのがふつうである。都会地ではすでに一つ前の流行が田舎では現在のニュー・モードであり新しい流行になっているといった例はいくらでもみられる。

それが都会からずっと遠い田舎までは伝わらずにしまうもの、かいなでにサアッと流れてはいっても、間もなく消えてしまうものや、すっかり農山漁村に根を生やしてしまって五十年も百年も、あるいはそれ以上も長く保存されているものなど、いろいろな伝り方、残留の仕方のあることも、ちょっと考えてみると例をあげるには、ちっとも困らないのも、われわれのお国がらなのであった。

現物が目の前にあるものでみると、よくわかる。一番はっきりしているので、照明用具をあげてみよう。東京などの大都会では螢光燈が大流行で、それも台所などの調理場などには、殺菌燈をつける家まであるのが流行の尖端だが、同じ東京、大阪でも、ビルディングなどはもうほとん

どこの螢光燈にはなっても、各家庭では螢光燈の前の、ふつうの黄色っぽい電燈をつけている数のほうが、まだずっと多い。

ところが昭和三二年という同じ時間における日本の横断面をみると、同じ東京都の中でさえ、いまだに電燈をともしていない村や部落がまだあって、そこでは、電燈の一つ前のランプによって読書したり夜業をしたりしているし、さらにランプ以前のアンドンを使っている村だって辺土にはあるにちがいなく、極端な例をあげれば、年代にしたら千年も二千年も……といってよいほど大昔の燈火だった油気の多い松のヒデなどを燃して暮している家々だって、絶無とは断言できそうもない。

このような現状なのだから、幽霊の世界においても、その同時代の横断面は、あたかも地層の断面を見るように、いくつもの変遷段階が同時に併存しているが、それが地層とちがう点は、かならずしも古いものが下積みになっているとはかぎらないことである。

しかも、大都会のもっとも新しいと思われている幽霊話だって、糸をたどってみると、それは非常に古い郷土の伝説などに由来し、それに支持されていることも少なくはないし、都会人にもてはやされるというのも、意識しないというだけで、そんな伝統みたいなものが底にあって、なんとなく心ひかれているといえるものも認められる。

そういう見方からいえば、創作怪談が、いくら奔放なる空想をたくましくしても、そこには、おのずからなる限度があり、なんらかの下地や類型から、まったくは脱しきれないものが多いということもできよう。

鶴屋南北のお岩で、幽霊のだいてきた赤ん坊がやがて石地蔵になるというのも、古くから信じられていた産女（うぶめ）の怪のモチーフにほかならない。

前節でもふれた御霊信仰の実盛（さねもり）の虫送りにしても、源平合戦の老勇士、斎藤実盛が白髪を染めて出陣した話は有名で、その乗馬が稲の切株につまづいたために不覚をとり、その恨みが死して稲の害虫と化したといった話が、現代まで尾をひいて実盛人形をして田んぼを徘徊せしめている。

番町皿屋敷の皿の枚数をかぞえるお菊さんがお菊虫に化したというのも、じつは、死して後、白鳥になったり虫になったりする一連の民俗から一歩も出ていないことである。（西角井正慶氏「幽霊の話」）

都会の幽霊(1)　こういう考えのもとに、昭和二四年五月に東京都文京区の八百屋（やおや）お七の亡霊出現さわぎのあとを、もう一度くわしくたどってみることにしよう。

その年からかぞえて二〇六年前の天和三年、悲恋のはてに放火の罪にとわれて鈴ケ森刑場の露と消えたお七の墓のある指ケ谷町円乗寺境内にある印刷所専進社というのが、そのさわぎの場所。この専進社は、お七の幽霊さわぎのおこる二年前に建てられたが、建設翌年の八月の盆がすぎると、毎夜十時ごろから十二時ごろまでのあいだ約三〇分間、高歯をはいて工場内をカタコト、カタコトと歩きまわる音がしたという。

これは、お七が供養を求めているにちがいないと、専進社では、牡丹燈籠もどきに、お七の亡霊の侵入するという入口に供養碑を建てたり護符をはったりした。こうして印刷工員たちが、毎

朝焼香をしたところが、しばらくは現われなかったが、なまあたたかい夜や雨のしとしとと降る夜ともなると、またカタコトをはじめる。

やがて昭和二四年五月、ふたたび活発な動きがはじまったので、ついに富坂警察の指ケ谷交番に警備かたを依頼。柔剣道二段という田村士郎巡査が十二日、私服にピストルを握って張りこむ。バタンと戸の開く音――カタコト、カタコト――サッと懐中電燈を照すとパタッと足音はやむ。戸口は錠前がちゃんとかかっている。電燈を消せばふたたびカタコトという音が闇の中にきこえてくる……（昭和二四年五月二一日付東京日日新聞）

うわさはうわさをよび、新聞にもたびたび報道されたので、ほかでもふれたように、NHKが実況録音に乗りこんで、十九日夜八時から二〇日の午前一時まで、専進社印刷工場にマイクをすえたが、ついに、お七は出現せず、やむなく足音をじっさいに聞いたという六人を中心の座談会でお茶をにごして引きあげたという。

三百坪もない場所に五百人からの野次馬が集っては、いかなる八百屋お七だって出られるわけはないはずだが、このさわぎで、いくつかの問題をひろうことができる。

もっとも興味をひかれる点は、昭和年代の大都会でも、足のある幽霊であったこと、すなわち高歯のカラコロ、カラコロは苦笑を禁じえない。いかにも江戸期から歌舞伎狂言などで培養された人たちらしい幻聴で、ヒタヒタと漏れ足の板廊下を歩るく音などというのとはちがった陽気さを感じさせる。

お七幽霊の第二の特色は、幻の姿は誰にも見えなくて、つまり視覚に訴えずに聴覚のみに訴え

ている点であり、この点だけをとりあげれば、幽霊という現代ふうな固定した概念からはむしろ遠くて、いわば怪音というにすぎない。姿なき幽霊という点では、声や足音きり認められない西洋ふうな透明人間などと一脈通うものがある。

もう一つは、この世に対する恨みやのろいといった意志表示を何一つ伝えていない点である。円乗寺の住職の智慧が、おそらくは「供養を要求している」という解釈を導いたのではないかと思うが、これもまた古ふうな類型にすぎなかった。

もともと生前のままで幻の姿を見せた幽霊が、後には白無垢の装束、額に三角の白布をつけた死装束になり、やがては都会ふうな足のおぼろにかすんだ姿に変ったのだが、お七の足音だけなどは、平安期頃の生霊のたたりの名残りさえ感じさせ、それにありありと幻の姿を見せるには環境があまりにも合理的な近代感覚の人たちばかりだったというコンプレックスもあって、奇妙な現象を示したとでもいうほかはないのかもしれない。

都会の幽霊(2)　もう一つ、昭和三一年六月二八日付の新聞（毎夕?）に報じられた東京警視庁内に出た幽霊の話をみよう。

警視庁内にある新聞記者クラブの部屋というから、よほど胆力のある幽霊だったらしいが、当時の宿直の記者たちのあいだで、かねてから「夜中に足音がきこえた」とか、「たしかに桟をかけておいた窓があいていた」などのうわさがあったもの。そんなうわさの最中のこと、二六日夜、T社のM記者は午前三時ごろ、コツコツコツという足音、耳をすますと「アイゴー、アイゴー」

ときこえるかすかな泣声を聞いたという。

　M記者は飛び起きて様子をうかがうと、消し残した一つの電燈のぼんやりとかすんだ光の中に、ひとりの男が影のように立っている。「お前は誰だ」と、声をかけると、その男はグイッと首をまげてM記者をじっとみつめ、ニタリとすごい微笑を口辺にうかべ、やがて消えるともなくスーッと消えてしまった……。

　商売がら、とるものもとりあえず卓上電話をとりあげて、庁内の要所要所にかけてみると、不寝番の庁内警官たちは、みな口をそろえて「そんな者はひとりも通りませんよ」という返事だった。そして、それからも泣声だけはよくきこえ、いろいろと変なことが毎晩のようにおこって……というような記事であった。

　NHKまで録音に出かけたからとか、血の気の多く、チャキチャキの警察記者たちの部屋に出たのだから、ほんとだろうなどと、せんさくする必要はないことで、どんなとき、どんな所へ出たといわれても、つまりは実在するはずのない幽霊にすぎないことは改めて説くまでもない。

　興味のあるのは、ラジオ放送関係者や新聞記者たちもまた当然のことながら、日本人ともどもの伝統からは脱しきれずに、日ごろは無信仰だの無宗教だなどとはいっていても、こんな「非科学、不合理」なはずのことを経験したり、騒ぎが大きくなると、ついフラフラと出かけてみたりすることにもなるわけである。こんな経験を心から一笑に付す人たちのほうが、じつをいうと、案外に、いうところの非科学的な不合理な経験などにおちいりやすいということも事実のようである。

　東京における戦後の二例だけをあげたが、こうして実例をくわしくあげることは、大して意味

がない。というのは、いくつ例をあげてみたところで、読者のほうで、「そんな話は見たことも聞いたこともない」などとビックリしたり、感心してくれるような怪談などというものは、創作、空想以外には、あるわけはなく、いずれも「さもありなん」というたぐいの経験にすぎないからである。

田舎の幽霊(2)　話を都会から地方に移して、さらに一、二例をあげておいて、さきへ進むことにしよう。

　青森県北津軽郡中里村大沢内部落（戸数一三〇）の幽霊は昭和三二年一月二八日、旧正月を二日後にひかえたときというから、幽霊としても、まるで季節はずれ、気ぜわしないばかりか、どっぷりと一メートルあまりの深い雪の降りつもった真最中の出現ではあった。

　田中運吉さん（五六才）は中学二年生の息子と妻君の三人ぐらし。夜中の一一時すぎ、あまりの寒さにフト目がさめた。気がつくと自分の掛ぶとんのすそがめくりあげられ、そこから冷たい風が入っている。思わず「だれだっ」とどなってしまったが、夢心地でふたたびウトウトすると、こんどは横の方から、ふとんがフワリと持ちあげられた。気のせいか敷ぶとんの下から、にぎりこぶしで、たたかれている気もする。運吉さんは脊すじを冷たいものが走った。妻君と息子に声をかけてみると、ふたりとも同じ経験で、息をひそませていたという。恐怖のあまり、三人は一つふとんの中にだきあって臥ってみたが、一番鶏がなくまで、その夜は、正体のわからない生あたたかいものが、はだにふれたり、顔をペタペタたたかれたりして、まんじりともできなかったという。

おさだまりの筋で、威勢のいい若い衆が五人、乗りこむことになった。

六〇ワットのはだか電球の下、囲炉裏をかこんでの景気のよい力自慢の話かなんかのうち、やがて一一時すぎ、風もないのに自在鈎が左右にゆれはじめる――思わず唾をのみこむ一座の注視のうちに自在鈎はユラリ、ユラリ――と、それがピタッと止まって、鉄びん湯のたぎる音。つぎには炉の灰が二度、三度と、ちょうど物でもそこへ投げつけたようにパァッ、パァッと舞いあがる。

そして間もなく一座のひとり由さんは便所へ立って、足をもつれさせて倒れ、健さんもつまづいて倒れる。一同思わず「オバケはまだいるぞー」と、さけぶ。

つぎには一五、六人もの血気盛んな青年たちが入れかわり立ちかわり泊りこんだが、ちっとも怪物の猛威は衰えず、ついに、このあたりでゴミソ（御夢想の訛語）とよばれる巫女の出馬を乞い、のべ二〇時間、二日にわたるありがたいご祈禱のご利益によって、さしもの怪異もパッタリとおさまったという（週刊新潮三月四日号）。

多少の潤色はあるかもしれないが、同号には、運吉さん一家の写真までそえて出ているので、まあ話の筋の真実性は疑うほうが不自然というべき性質の記事である。

この部落から一六キロほどの五所川原市で、間もなく原子力博覧会が開かれようとしている時だったので、週刊新潮では「オバケに飛ばされた部落――原子力時代のオトギ話――」という見出しをつけた。

だが、これは、ほかでもふれた、むしろ座敷童子の要素に終始している経験であって、どこを

見てもオバケ（つまり幽霊――怪談――の意味の）の条件は出てこない。はじめっから姿形は認められず、会話もなく、べつに怨めしい筋もなさそうで、いわば、すきま風だとか誰かのいたずらといった物理的な条件が認められないのに、その結果ばかりが認められたというにすぎない。

このような現象までを〝オバケ〟のせいというのは、言いすぎでなければ誤解であろう。こんな現状だから、なにもかもをひっくるめて表現できる〝怪談〟という熟語は、なるほど便利である。

田舎の幽霊(2)　同じような誤解は、神奈川県津久井郡青根村にもあった。

昭和二七年五月から六月にかけての幽霊さわぎである（サンデー毎日三一巻二九号「幽霊の出る村」）。

同村向部落の農家、裾野芳房さん（三八才）は、ある夜「お前の家には、金銀で造られた宝物が埋まっている」という夢中のお告げを感得し、町の易者に相談したところ「六畳の下を掘ってみると出る」との託宣をうけた。

三メートル以上掘っても宝物は出なかったが、そのかわり四月になって、夫妻とも幽霊を見た。隣家の目あき按摩は「お前さんの家の窓から人玉の飛び出すのを三回も見たぞ」という。

このうわさが、だんだんにひろがって、近くの座間地区（駐留軍がいた）からMPがジープで乗りこみ、外国通信者、国内新聞記者が来る、ラジオが録音をとりに入りこむさわぎ。六月一二日になって、国家警察の津久井地区署からは司法主任以下六人の刑事が真相調査に来て夫妻を出

頭させ、世間をさわがせたかどで仕末書をとっている。

当局の狂言説や、頭が変になったのではないかといった取りしらべに最後まで屈伏しなかったのは妻女オヨさんで、

「そんなにうそにしたいのなら、私を懲役に連れてったらよいでしょう。事実この目で見たのだから間違いはない」

と頑張ったのだから、本人の経験は疑う余地はなさそうである。それが錯覚にせよ、幻覚にせよ、それは解釈のちがいにすぎない。

この話題で面白いのは、裾野さんの家は地名を姓に移したことでもわかるとおりの旧家で、その昔、武田、北条が戦ったときの落武者の首塚が六つも屋敷内にあるというから、さぞや、甲冑姿の幽霊でもと思うのが常識なのに、案に相違して、

「出るのは、ちっともおっかなくねえ幽霊でな、大入道が出たり、小坊主が出たり、四十ぐらいの男だったり、若い女だったりするけんど、おとなしくてねえ」

という次第。そんなものの出現するのは、いつも夕方の四時—七時ぐらい、五月に八回、六月は上旬だけで三回という。

つまり青根村の場合は、妖怪変化と幽霊らしきもののミックスであり、目明き按摩殿の人玉までが、おまけに登場している。妻女の出生や育った環境を調べないと、たしかなことはいえないが、旧家だといいながら、地方での妖怪と幽霊の混同は、むしろ珍らしいというべきであろう。

三　幽霊の実態

現在の同胞の中に、各個人が信じるか信じないかという問題以前の、うぶな体験としての霊魂現象が、どのような形で認められているかについて、昭和二五年の信頼できる全国調査の資料がある。

文部省に寄せられた採集資料は新潟、茨城、埼玉、神奈川、山梨、愛知、三重、金沢、鳥取、愛媛、福岡、鹿児島の一二大学からの九五報告書（巻末付録参照）がそれである。少しくどくはなるだろうけれども、日本の怪談をささえている暮し方、幽霊の歴史性をたどるのに、もっとも手取早い方法として、その人魂や幽霊関係のものに一応の整理を試みてみよう。

これらの資料は、専門の民俗学者の調査、採集ではないけれども、まじめな学究的な態度で報告されたものであると同時に、もっとも新しい資料として珍重すべきものである。このような資料は、すでに活字になっているものだけでも、整理しきれないほどもあるが、ここでは、これら一二大学の学生たちが寄せたものだけで、現代日本の霊魂観と、それによる経験をみていきたい。他の一般は、これだけによっても、ほぼ推定して大過ないといってよかろうと思うからである。

火の玉と魂のぬけた人間　人間に魂があると、信じさせられた実例にはどんなものがあるかと

いうと、火の玉、人玉は「実際にある」というのが多く、九五報告書のうちの、六八までが、これら火の玉、人魂なるものを実際に見たか、または実見した人から、その経験談を聞き、あるいはその存在を信じていた。「魂は存在しない」と答えた例は、わずか九例にすぎなかった。

生霊を信ずるからこそ、長期旅行者や出征兵へも陰膳も供え、死後のみ魂祭もし、幽霊の顕現も正当化されてくるわけである。精霊様を迎えるためだと信じられているお盆の清掃も行われ、日本のあらゆる祖霊信仰は、ここから出発するとみられているわけだが、こうした事情を説明する報告としては、次のような例が報告されている。

新潟県佐渡ヶ島沢根町の小学校の藤沢先生は、三度も火事で焼けだされ、一時は、口も満足にきけないほどボンヤリしてしまったが、町の人びとは、こんな藤沢先生を「魂が抜けてしまった」とうわさしていた。その後一切の面会をたっていたが間もなく死んだという。また福岡県では「ミタマゴハン」といって、健在で生きている人の霊魂にご飯を供する民俗がある。この地方（糸島郡桜井村）に、ふたりの婆さんがいたが、はげしい言い争いをしたら、ひとりに他の婆さんの生霊が憑いたために、とり憑かれた婆さんのほうは、チンバになってしまったことがあったが、その婆さんは、信心家だったので、間もなくよくなった。「かならずしも根性が悪いために憑かれるとはかぎらない」と、桜井村の人たちは語っているという。

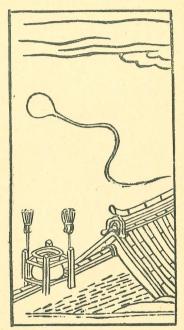
同じ地方の人びとは「夢をみるのは、生きた人の魂がぬけ出して遊んで来るのだ」と解釈しているが、関東の茨城県でも、「眠ると、体から魂が抜け出して、朝になると戻ってくるのだ」と信じている。

まざまざと人間の魂の遊離する状態を見聞したという例は、日常生活の中でも、しばしば聞かされるが、三重県梅戸井村では、昭和一五年に、つぎのようなできごとがあったという。この部落の造り酒屋の若い衆数名が、隣村大長村へ「娘遊び」に行った帰途、一二時すぎに大声で話しながら歩いている横を、尾をひいた火の玉が通りぬけて行った。

ソレッ、というので後を追いかけて行ったら、自分らの住む酒倉に入ってしまった。そこで、みんなも入ってみると、女中さんは、若者たちが帰ってきたのを知って、夜食を出しに起きて来ながら「あ、恐ろしかった。今、若い者大勢に追いかけられて逃げ帰った夢をみた」と語った。そこで、若い人たちは、はじめて人間がねむると、その魂はからだからはなれて遊ぶことを知った。

死と同時に遊離しようとする魂を、ふたたび戻そうとして、近親者が屋上に登り「誰々やあーい」とよぶ〝魂よばい〟の作法は、今では、もういくらも残っていないらしいが、愛知県下では今もそうして大声でよび返そうとするといい、小倉市からの報告にも「お産で死んだ時は、屋根をはがしてその名をよぶ」とあり、同県三井郡でも「死んだ時は、家の上に向ってオーイとよぶと、あの世へ行ったものが帰ってくる」といっている。

人魂の色・形・種類　つぎに、それでは、それらの人魂なるものの形や色や種類にはどんなものが認められているであろうか。

人魂、人玉の名称は、ヒトダマ、ヒダマ、ヒノタマなどが標準語のようになっているが、タマ

人魂（和漢三才図絵）

セ（タマシイの訛りか――茨城県）とよんでいる例もある。

そしてその色は、青白い、黄色い、赤いというのが大部分。形は円形、楕円形、杓子型が圧倒的。その多くは、尾をひいて中空をとぶといっている。

そして新潟県では直径一尺ぐらいの真赤な火の玉、新発田市では、頭がまるく、二尺ぐらいの青と赤の尾をひき弧を画いて速かに視界を去るといい、神奈川県では、大きなゴムまりのようで、うなりながら、樹木のこずえすれすれの低空をとぶ。さきはまるく、薪に火をつけて投げたようなもので、青い尾をひいて飛ぶといわれている。

また福岡県では青白く、じゅずのような形といっているし、埼玉県川越市の、ラッキョウの形

のほか、シャモジ形（三重県）、おたま杓子の形（鳥取県）先がまるく、電燈より明かるくてピカピカ光ってとぶ（茨城県）とか、あるいは、ずっと小さく鶏卵大（埼玉県児玉郡）という報告もあった。

そのほか、直径一尺ぐらい、流星のような青色で、おたまじゃくしのようなもの（神奈川県）、火柱を二本下げた青白い火（三重県河芸郡）など、似たりよったりだが、石川県下で「よく見ると、まるい中に、その人の顔が現われる」といっているのは、ずっと現実感があって興味深い。

またその種類には、老人の魂は上空を、中年のは中空を、子供のは地上二〇メートルぐらいの高さをフワフワととんで行く（埼玉県児玉郡）とか、老人のはユックリととぶが若者のは通った跡に指の太さぐらいの筋が残る（山口県）といった区別をいう地方もあり、さらに、その発現の形としては、つぎのよう例がみられる。丸い形のものが三個同時にとんだ（三重県）。埋葬された当夜、墓地に現われ、しばらく木の枝にとまってやがてとび去る（三重県）。墓地にいるものと、空中を飛行するものと、地面をころがり歩く三種がある（石川県羽咋郡）。赤くボーッとしたかたまりで、下に落ちると、泡になる。窓から出て木に止り、しばらくして離れた水田におちた（愛知県安城市）人魂は乱玉花火のようなもの。青いような光だが、落ちると薄茶色で、泡をブクブク吹いていた（愛知県安城市）。

また、ただ泡のような白いもの（愛知県）ともいわれるが、埼玉県秩父郡からは、二〇センチぐらいの赤味のある円型で、さわってみた人さえあるという報告が出ている。さらに男女別では、山梨県中巨摩郡では、男のものはまるく、女の人魂は帯をひいていると語られている。

一般に「死後の魂は、四九日間は家の棟をはなれない」と信じられているといわれているが、この調査でも、全回答が、いまだにそう信じられていることを証明してきている。

死後になお、その自家にてんめんするという亡魂は、人魂や火の玉の形式ではなしに――あるいはその以後に、蝶などに形を変えると信じられていることも一般のことだが、山梨県では蝶だけでなく、小虫、埼玉県行田市では蛇などの長虫になるといっている。川越市では、人の魂が、死後間もなく蛇に姿を変えて自分の家に現われたので、家人は「何か迷っているのだろう」と、仏壇に線香をあげて寺へ帰るようにと、その蛇に言いきかせた。また神奈川県茅ヶ崎市では、雀、蛾、ネズミになると信じられている。

魂が肉体から遊離する時期について、愛知県安城市では、死ぬ三、四日前というが、その間は、亡骸（なきがら）なのではなくて、おそらく人事不省に陥ったり、また意識をとりもどしたりする状態なのではなかろうか。そうでなければ、いくらなんでも不自然すぎるようである。埼玉県川口市では、生きている間は、魂は絶対に見えないが、息を引きとる時に、障子のあわせ目から出ていく。魂が出てしまったら死ぬのだから、戸障子の開閉には極度に気をつけるというのは、現代ふうな解釈である。

仏暁に、前の堀で洗濯していたら、遠くから提灯をぶら下げて人が来るらしいので、見ていると、そばまで来ても人影はなく、よく見ると、赤い提灯ようのものがフワッ、フワッと人が歩いているような調子で、私の前を通りすぎ、隣の寺へ入って行った。あとで聞いたら又兵衛爺が死んだという告げが寺へ来た（新潟県西蒲原郡黒崎村安藤キヨさん談）という体験は、素朴な実感

のこもった例だが、「ゴロゴロと音をたてて飛び、アッという間に見えなくなる。ピカピカ光って、ご光のようなものをさす」という（愛媛県喜多郡）魂は、いたって荒っぽい。人魂の種類でも、三重県桑名郡では、「未練のある時は赤い火の玉、近日死ぬ予告の時は、青い火の玉の姿で抜けて行く。どんな遠くで死んでも、魂はかならず自宅へ暇乞いに戻るものだ」と区別している。

死ぬと同時に、その家のそばの藪の中から、青白い火の玉が出た（愛知県知立町）とか、人の魂は、火の玉となって飛び出し、知人のところへ廻って寺に入る（山梨県中巨摩郡）などは、全国どこへ行っても聞くことのできる例であり、藪の中から、屋根の下から、窓から……と、いずれにしても、死者もしくは生身の人間の身辺、ほど近いあたりから遊離していくものと信じられている。

幽霊の現われかた　ともかくも、こうしてポツポツ整理を進めてみると、一般にはもうほとんどの幽霊には足がなくなっていると思われているのに、カスリの着物に下駄をはいているといった古ふうな幽霊が、昭和年代にも地方にはまだウロウロしているし、福岡県嘉穂郡のように死装束のままというところもあるところから、実際には、長い間の各変遷段階が、まだ幾通りにもいまの日本に残存していることをうかがい知ることができる。

現われる時は、大部分、例の丑満刻（うしみつどき）、実見者もほとんどは、幽霊の方がめざして来るべき因縁にある一人、もしくは同席した近親者だけ見ることができるという。

出現回数は、一回だけという資料が全報告の過半を占め、二、三回から五日間、一週間連続し

て現われたとの報告がこれについで多かった。

意外だったのは、かならずしも、うらめしくない幽霊の実例が今もなおあることである。「迷っているから供養してくれ」と頼みにくるのは幽霊の性格上自然であるにしても、借金を返さずに死んだのを苦にして貸主のもとへ現われた（新潟県西蒲原郡）のや、生前の約束果せと友達のところへ現われた（同県南蒲原郡）といったきわめて現実的なものもある。

しかし圧倒的に多いのは、やはり幼い子供を残して死んだ母親、物心いずれかの虐待をうけて死んだホトケ、恋しい人を残して先立った霊などである。

陰気な、悲しそうな表情で、ほとんど会話らしい会話も生者とはかわさずに、この世の人の話はすべて了解はしても、せいぜいかすかにうなずく程度にすぎない例が多い。

現われた幽霊が誰であるかは、生前の姿、格好などの特徴をそのまま再現するので、一見してすぐわかるという報告が多く、それほど親しい間柄でない場合は、お能の怨霊のように自ら名乗って出ている。

以上のような霊魂の詳細な実験報告書の比較研究によって今後明らかにされる点はいろいろあるだろうが、その中で、おそらく日本における霊魂現象の研究に、かなり具体的に実証されるだろうと予想されることの一つは、肉体を離れた霊魂が、時間の経過とともに、それぞれ異った性格が附与されてゆくらしいこと、すなわち全霊魂現象を有機的な時間の経過に従って体系づけられそうな気がすることである。

元気で生きている人の、なまなましく活気にみちた霊魂は、他人に憑いて病ませ、死にいたら

しめるほどだが、これらはもちろんまったく肉眼にはみえない。

つぎに死の直前、もしくは直後に人魂、火の玉とよばれるものにまず変形して見えるようになる。つまり幽冥境を異にして始めて物理的現象をあらわす。

しかし、そうした人魂は何十キロという遠距離は飛行しないらしく、そんな場合には、死と同時に、一瞬にして、きわめて遠隔の距離を飛翔して生家の門口に幻の姿を見せる。異境に果てた出征兵が近親者へ暇乞いに姿をみせたという全国数知れない類がこれである。

これにはしかし、かならずしも遠近に関係のない例もあって、すでに亡き人の数に入ったにもかかわらず、仮の姿を見せて自分の死をしらせたという報告も二、三にとどまらない。

このような死後まだいくらも時間が経過していないものは、どの報告でも「幽霊ではない」と断定されている。

すなわち幽霊となるためには、ある程度の時間が必要であるらしい。人魂、火の玉は間もなく蝶や蛙、小虫などさらに具体的な動物に姿を変え、やがて死の忌明きとともに〝行くところへ行きつくもの〟と、〝行くべきところへ行けないもの〟との二種に分けられ、ここではじめて幽霊と、ホトケ、精霊さまの性格が成立するもののようである。

死後の霊魂が虫などに姿を変えることは、昔話中の致富譚の一種〝ダンブリ長者〟（ダンブリはトンボの方言）などを連想させられる。

四、二〇世紀の謎

——心霊現象——

心霊術の実験　ここまで、われわれは人魂とか幽霊といった、ごく素朴な形の霊魂現象の分野だけを考えてきたので、なにか、非常に古風な、もしくは泥くさい、現代生活とは縁の遠い前時代的な感じを濃くしてきているので、このへんでモダンな話に転じる必要を感じる。

　それは「二〇世紀の謎」などといってもてはやされている心霊術、心霊現象についてである。大衆小説家一方の雄ともいうべき長田幹彦氏は、日本における心霊界のパトロン的存在として知られ、筆者も各新聞社の記者諸君や文部省の若い人たちを案内して、心霊実験なるものを見せてもらった経験があり、その時の様子を詳しく報告した月刊誌（レポート四巻六号、昭和二四年六月）もあった。

　昭和二四年深緑の候、ところは東京信濃町の長田幹彦氏宅。世のパリサイ学者先生から、処生的唯物論者の新聞記者諸君に公開し、心霊実験なるものの認識をあらためさせようというこんたん。

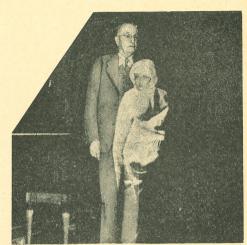
　部屋の正面に黒幕をたらしキャビネットがつくられ、その中にイスが一つおいてある。キャ

ビネットの前には机が一つ。その上には紙製のメガホンが二つ、ブザー、大中小の人形が三つ、赤いきれでさきを包んだ懐中電灯などがのっている。これらにはすべて、夜光塗料をぬった紙きれがはってある。これから、真暗やみの中で、このテーブルや小道具が、「霊」の神秘でおどりだすというのだ。霊媒をつとめるのが竹内という法学士。下準備はできた。いよいよ実験である……。

　霊媒氏はキャビネットに入り、イスにこしかける。見物人の誰かが出て手足をしばり、それをイスにくくりつけた。外へ出て奇術をするのでない証明である。

「霊」との対話は、大勢が勝手に話しかけたのではだめらしい。「わたしがその役をやります」というのは、K氏で、長田氏の説明によると、いまキャビネットに入っている竹内霊媒のパトロンだそうだ。

　八時二〇分消灯。文字どおり真暗やみ、レコードが静かになりはじめた。曲はジプシー・セレナーデ。やみの底に、テーブルとその上の小道具の夜光塗料が、かすかに白く見える。と、テーブルの上の白いものがスーッと動き、やがてふわふわと一メートルばかり浮きあがった。メガホンだ。しばらく宙にただようと見るまに、スルスルと右へそれて、ボコとにぶい音をたてた。誰かの頭がたたかれたらしい。

　メガホンはふたたび正面へもどる。「もっと前へ出てください」とK氏がいうと、わずかながら前へくる。「何かしゃべりそうです」と長田氏の声。それと同時に、重く、太く、にごったような別の声が、メガホンの口あたりから聞えてきた。K氏「ロームさんですか」。メガホン

「消えかかっている出現霊」の唯一の写真

『ソーデス』。ロームさんというのは、竹内氏によく出る霊で、インドのユカ行者だそうだ。なるほど、西洋なまりの日本語に聞える。

メガホンの声は続く。

「ミナノ、イロイロノ、ケンキューナサレルコト、オモシロイ」

やがて、テーブルが四こをふみはじめた。メガホンは浮いたままだ。「人形が動きだしました」とK氏の声。違いない。両眼と手足に夜光塗料がついた人形の、その光の点が、暗闇の底からニョキニョキと立ちあがりながら手をふり、こちらにあいさつしている。大人形は、一たんテーブルの上におりかがみ、小さい方の人形をだいてもう一度立ちあがると、さらにふわりと宙に浮んだ。「ゲンキナ、レコード、タノム」という声に、レコードはフューネラル・マーチに変る。大人形は小人形をだいたまま、空中で曲に合せて踊りだした。

メガホンは、乱暴に机をたたいている。「テーブルを動かしてください」とK氏がいう。テーブルが持ちあがった。天じょうまであがった。と見えた。とたんに、グンとたたみにおりてブザーが鳴る。赤いきれをかぶせた懐中電燈が、ピカリ、ピカリと半秒ぐらいずつ赤光を点じながら、キャビネットのまわりをまわりはじめた。

それから、ものの三〇秒もたっただろうかキャビネットの中央部で、例の赤い懐中電灯がピカリと光った。何か白い細ながいものが照しだされたようだ。どうやら人間の顔らしい。「女の顔だ」「うつむいている」「こっちには見えないぞ」。

と、突然、ぶりしぼるような声が聞えてきた。悲痛のそこからうめきでるような女の声だ。

「この霊はわたしも知りません。今まで出たことのない新しい霊のようです」と長田氏がいう。

「だれですか？　チヨさんですか？　ミヨさんですか？」と、K氏がたずねるが、声はただ……iyo……iyo と、うつろに繰り返すばかり。

「どなたか心あたりの方はありませんか？」とK氏。「僕の死んだおふくろがイヨという名だったんですが……」と、見物の一人が答えた。「そうかもしれません。直接よびかけてみてください。きっとあなたのお母さんが来られたのですよ」。そこで、例の人、「お母さんですか、僕ですよ、聞えますか……」

一同動揺するなかに、メガホンはただ、コツコツというばかり……。

現代の幽霊現象　このようなマカ不思議なる心霊術が、二〇世紀の現代、なぜもてはやされる

のだろうか。この心霊術の実験者たちは、現代風な科学的な説明を試みる。たとえばエクトプラズムといったり、机がおどり霊の現象があらわれる時には、そこに参加した人たちの目方が全部少しずつ減って、その減少部分のエネルギーが凝固して像ができるのだとか、いろいろな動作のもとになるエネルギーになるのだ、と。

十人、二十人なりの科学者たちがその実験に立ち合ったとすると、その時全員を自動秤に乗せ、何らかの現象が現われると同時に秤の目盛りが少しづつ軽くなるというのだ。

しかしながら、心霊術なるものは、われわれの生活基礎である自然科学とは全然別な、時間と空間を超越したいわゆる「第三次元の世界」を前提としているのである。

たとえば、ロンドンの王立心霊学会での実験例として、霊媒がドーバー海峡に泳いでいる魚をその実験する部屋の空中に生きたまま呼びよせ、その魚からしたたり落ちる塩水を分析してみるとたしかにドーバー海峡のものだった、とある。また、動物園のおりの中から生きたままのライオンを呼び寄せる（空中を飛ばして）ことができたともいわれるが、われわれの物理学では、とても信じきることができない。

このように、はじめから立場が別であって、心霊術を信じる人たちは、霊魂というものが物理的存在としてこの世に存在するものだと、きめているのである。夜光塗料がぬられた椅子やテーブルやメガホンが中空におどったにしたところで、われわれの方は、机が持ちあげられるということは、そこに力学的なエネルギーが作用しなければならないわけだと思っているのだから、話は、まるで別になっている。

「見破られた心霊の正体」

霊媒がキャビネットの中の椅子に腰を下ろすと，まず立会人に両手両足を縛らせ口に水を含み，幕を閉め，電灯を消す。と間もなく，幕の前のメガホンが飛び，人形や机や鈴やハーモニカなどがつぎつぎに空中に浮び上ったのであるが，カメラマンがフラッシュをたいてしまった。現われたのは縄から抜けた手だ。幕が少し開きメガホンの一端が中に入っていた

（「知性」創刊号より）

そんなら、小学生でさえ疑問をいだくような心霊術を、どういうわけで教養と常識の豊富なはずの大人たちが、こんなにまで話題にし興味の対象にするのかが問題である。

心霊術を商売にしている霊媒、心霊術のような能力のある人は、なにも二〇世紀になって急に出現したわけではなく、昔からいたわけだが、このようなマカ不思議なもの、理外の理、理屈に合わないことをこのむ国民性があるからというだけでなく、そこには、日本人にかぎらぬいろいろな基盤が考えられる。

これは、われわれの生活を歴史的に考えてくると、説明することは少しもむずかしいことではない。ということは、根本的に、われわれの体験している幽霊と、心霊術でいうところのイクトプラズム（物質化）なるものとは、二にして一といえよう。実在しない人間の顔や姿や形が、信仰とは無関係に、そこに参加した人たちにありありと見られることは、幽霊とわれわれの関係と同じだといえる。

前節で多くの例をあげたように、われわれの生活の中には、そうした幽霊のごときものが何百年いらい纏綿していたということ、それは心霊現象といった解釈ではなしに、日本在来のありかただったということにすぎない。

ところで、心霊術を行う霊媒の存在は、われわれの歴史でいうところの巫女（みこ）に当る。現世の人間と神様との仲介の労をとり、人間の願いを神に、神の意志を人間に伝える人たちである。われわれの先祖たちは、将来を計画し、未来を卜する場合、たえず神の啓示、思召しに従ったという長い習慣があったがために、形こそモダンではあっても、いま流行の心霊現象、心霊術のやり方

は同じような類型であり、われわれの生活にきわめて身近かなものであった。

したがって、このような方式が、昔の売卜業者なり、人相見、手相見、八卦見にまでつながってきているわけである。もともと、神の思召しにかなった人、そういう能力があるとみなされた人が、一定の祭事を行う時、神が乗り移り、生身の人間のわざを通して神の意志を伝えるという初期の神主業が、ちょうど、心霊術の霊媒の役割を果したのである。

近代科学との対決　透視とか千里眼、念写などについても心霊術と同じことがいえる。こんな現象について、当代一流の物理学者・中谷宇吉郎博士は、「千里眼のような現象は、物理学上の問題ではなくて社会的な熱病にすぎない。したがって、これの対策は社会政策として取り上げる以外に療法はなく、物理学者の参加する問題ではない」といっているのが、けだし名言である。

いまのわれわれの物質科学を否定して、別な学問を将来樹立できないとは言いえないかもしれないが、それまでのわれわれの生活は、その基盤となっている現在の科学に矛盾するものは否定せざるをえない。

だが、われわれ受け入れる側に立って考えてみると、このようなものを、むしろ心霊現象、心霊術とかいわなければ、すこしも不思議とは思わないはずである。にもかかわらず、心霊術に関係のある人たちがインテリであったり、大学の哲学科卒が霊媒であったりしているために、現代人ならば当然持つと思われる疑問に答えようと新解釈を言っても応じようとするからおかしくなってくる。

このナンセンスというか無駄な努力と、ちょうど反対なのが新興宗教である。彼らは科学的知識など問題にせず、信仰とか心の問題として説く。ところが心霊術のほうは、あれほど新しい解釈をうちだすために苦労し、多くの科学者までも動員しながら、新興宗教の信者獲保率とは比較にならない。もし、「あなたに崇っている先祖が出た」「幽霊が出た」「信心すればはっきり見えるよ」というように宗教的に説けば、何の不自然さも無理もないのだろう。

ただ、面白いことであり、縄ぬけであるとか、巧妙な手品であろうなどと、以前の物理学者たちが話題を提供するが故に、興味をもたれるにすぎないのではないかと思う。

デューク大学で十二年間も「超心理学」なるものの実験と研究を続けているライン博士は「距離そのものは超感覚的知覚には、何の影響も及ぼされない、すなわち心の力は、空間の限界によって制限されない」という実験結果を出しているという。この著書の紹介文をリーダースダイジェスト誌は昭和二三年五月号に「心の領域」と題する長文でのせているが、これについての中谷宇吉郎博士のエッセイを要約して、心霊現象についての結びとしよう。

「いわゆる心霊現象については、科学は無関心でいて、ちっともさしつかえない。それは完全に場ちがいの問題であるからである。とくに、いわゆる心霊術師の場合に、そういう問題をいちいちとりあつかっていては、科学者は身体がいくつあってもたりない」

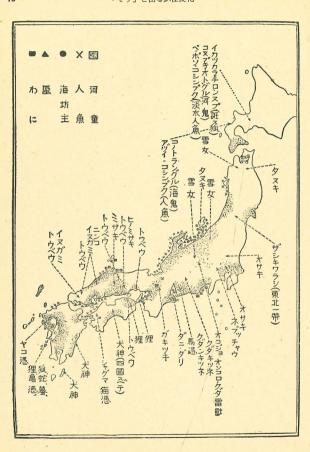
「心霊現象の研究に、従来の科学が無関心であった。なにも悪意があったわけではない。科学との交渉が今まで不心要だったからである。科学は有在するものを研究する学問で、何が存在しないかには触れない学問である」(「心霊現象と科学」雑誌〝座談〟昭和二三年八月号)

一、「モウ」と出る妖怪変化

妖怪変化、オニ（鬼）（一般的名称としての）あるいは魑魅魍魎といった言葉は、読書階級の使用語であって、文字に親しみのなかった一般国民の日常語ではなく、現在なお、これらの熟語は一般の人びとによって全国的に使われているわけではない。児童語のいわゆるバケモノを総称する語は、東京などでは主としてそのままバケモノもしくはオバケが使われている。

だが、「化性のもの」、バケモノといい、バケルというからには、その正体ではない別な形を現じる意味であって、妖怪の総称としては、その一部の特性を表現するにすぎないものという非難が、妖怪の側から人間に向って発せられるかもしれない。かれらの機能はけっしてバケルだけではなかったのである。

またオバケは、少なくとも幽霊にとっては不当な名称であった。かれらはもともと、生前のままの姿で幽冥界からこの世へ通うのであって、足のおぼろなることは、すなわちバケタことにはならないのである。少なくとも現在使われているオバケなる語は幽霊と妖怪との混同であって、オバケ大会と称したり、または怪談と称して幽霊を引きあいに出すことは新しいことである。オバケはすなわちバケモノであり、幽霊ではなかった。

「オバケが来る」「オニが来る」「人さらいが来る」などというのは、幼児にとって、おそろしい

ものである点が共通している。おとなの社会にとっては、こんな文句をまじめに使用する機会は非常に少なくなって、しだいに児童社会の専用になろうとしている現状であるが、地方においても、これらの総称は児童語もしくはおとなが児童にむかって発するときに、しばしば使われている。（前頁図は神田左京氏の「不知火・人魂・狐火」による）

沖縄でマジムン・マジモノといい、内地におけるバケモノ、魔モノなどの語によって、目に見えぬ精霊（せいれい）の発現ないしはその作用を広くモノとよんでいた時代の古くかつ、かなり長かったらしいことには、いろいろなよりどころがある。

モノノケといい、モノグルイ、モノツキなどの語もこれに属する。

いわゆるバケモノを意味する児童語は、つぎの表のように全国をモウコ系統とガゴ系統の二つにその方言分布を画くことができ、さらに九州一部のワン系統があることを柳田國男先生は立証されている。なお、このほかにバケモノがほぼ一般知識層に行われていて、バケモノといっても、その意味を解する人びとが多くなっている。

語	地域
モウコ・モウ	山形県
アモコ	岩手県外南部
アンモウコ	青森県九戸郡
モッコ	岩手・秋田
モウカ	仙台市付近（今は消えている）・金沢市
モカ	新潟
マモウ	福島県岩瀬郡
モーモ	富山県新川郡（五箇ではガーゴンもあり）

語	地域
モモッコ	新潟県西頚城・中越・南魚沼・富山県北部まで・出雲崎
モウ・モンモウ	石川県能登
モッカ・モモカ・モモッカ	長野県
モンモ	山梨県・天竜川流域
モーモー	静岡県東部（主にモモンガー、モモンジー行わる）
モーン・モーンコ	静岡県西部
ガンボウ	岩手上閉伊海岸
ガンゴジ・ガンゴチ	茨城県水戸市付近
ゴッコ	茨城県新治・稲敷郡
ガンゴジー	栃木県芳賀郡
ガガモ・モウカ	石川県河北郡
ガガモ	岐阜県飛騨
ガコゼ	京都・播磨（今はなし）
ガモチ	和歌山県熊野
ガモシ	三重県伊勢宇治山田市
ガンゴ	北大和
ガモウ	但馬
ゴン	石見（ゴンゴチー、ゴンゴンジー）
ガガマ	出雲・、伯耆東伯郡
ゴンゴ	山口県
ガコジ・ガンゴシ	徳島県
ガンゴ・ガガモ	香川県喜多郡
ガンゴチ	周桑郡（鬼の小児語）
ゴガモノ	西宇和郡
ガンゴー	対馬
ガンゴ	肥前佐賀藤津二郡
ガゴー	肥後球磨郡
ガモジョ・アモジョ	長崎市
ガゴ・ガンゴ	日向椎葉村
ガンコ	大分県
ガモジン・ガゴ（ワン）	鹿児島県
ワンワン	筑前博多・阿蘇小峰村

バンバン　嘉穂郡
ワワン　肥後玉名郡
……ワン（ガモ）　薩摩
（以上、柳田國男先生の妖怪古意――国語研究昭和九年発行による）

モウコと妖怪を総称することから蒙古起原説が出ているが、これはこれらのバケモノが「モウ」という声を出しながら出現してみずからを表示したことによるものだろうと柳田先生は、その「妖怪古意」で考察し、信州の若者が「バケモノはモウと鳴く」と信じている例をあげ、また子供たちが「オバケだぞう」といってこわがらせるかわりにまた、「モウ」といいながらバケモノのまねをする例をあげて、犬をワンワンとよぶ態度と同じであるとのべている。

ガンゴ系統の総称についても大和の元興寺起原説もあるが、これもかれらが「咬もうぞ」と大きく口を開けて出現したことから出た言葉であろうと推察した（同・妖怪古意）。

このようにバケモノを、ガゴまたはこれと近い音でよぶ区域は、ほとんど完全にモウコ区域と隔絶しているという。

六、山中に住む妖怪

生きている仙人　一九五六年にやつぎ早やに二人もの「生きている仙人」の話が伝えられた。放射能の雪が降る山に、現代の仙人はいったい、どんな暮らしをしているだろうか。なぜ里の生活を捨てて、山にこもってしまったのか。

生きている仙人の一人は、青森県の岩木山（一六二〇メートル）の頂上に近い、赤倉山という地名をとって「赤倉山の仙人」とよばれる人である。この仙人は、里の人間世界にある時の名前は、荒井万作といい、南津軽郡十二里村矢沢が本籍地である。この年八七歳になるというから、この仙人は明治元年生まれのはず。

赤倉山は「赤倉様」と地元の人たちから、うらやまれている山ノ神がまつられている山だが、万作さんが、この山にこもって、行者の生活を始めたのは、今から六三年前だという。万作さんは、こうして赤倉様の忠実な家来になったが、「大山彦江神」という神様としての名前もつけられている。長い年月の難行苦行の結果、いつのまにか、仙術を体得して里の人たちから「仙人」扱いされるようになり、今では、ふもとの部落の人たち一五〇人が信者になっているそうである。

赤倉仙人は、時どきふもとに下山してくる。どうやら酒が恋しくなるらしい。毎日新聞社の記者が、この仙人と会見した報告記が、その青森版に写真入りでのっている。

それによると身にまとうものは越中フンドシ一つだが、ふつうの百姓姿の時もあるという。写真でわかるように、襟元をおう白髪、胸までのびたヒゲ、キラリと輝くヒトミなど、まずは伝説上の仙人そのままである。

赤倉仙人の食物は、四足の獣以外は何でも食べるが行（ぎょう）に入ると、二〇日間ぐらいは、水以外何も食べないという。食物のない時は、木の実や、里の人たちが供えるコンブをしゃぶっては水を飲んで暮らしている。酒は一升ぐらいのむが、一番うまいのは、断食した後の水だという。

山に入った動機は〝山の霊気にさそわれて〟というだけで多くを語らず、入山してからの年数は、石にきざみつけて勘定しているそうである。山での暮らしは、赤倉様という神様のいうとおりに、川の流れに体をつけたり、神様のいいつけで、青森県内の山々をまわったりしており、この年の四月ごろは三本木の方まで行けといわれたと語っていた。バラやトゲを踏んでも血も出ない厚い足底をしていて、山中では、若者も追いつけないほどの早足でかけ、断がい絶壁を登る時は、手の平にツバをつけて、ピッタリと岩はだに密着させながら、スッスッと登って行き、「その足は鹿よりも早く、その声は雷のごとし」といわれているという。

この仙人は、決して民家を托鉢（たくはつ）して回ったりせず、信者がお詣りに来て、お供物（くもつ）をおいて行くのを待つだけなので、仙人の暮らしは楽ではなく、村役場からは生活扶助を受けているというから、やはり現代の仙人にはちがいない。

一番幸福な時は、信者が詣りに来た時と、神様にお仕えしている時で〝神様に仕えて、もっと

もっと長生したいといっている。信者は、この仙人に、いろいろな願いをしたり、相談に来るが、こういう時は、すべて神様におうかがいを立てて、その教えを取り次ぐ。歯の痛い信者をマンチャク柴という植物の実で治したこともあった。この仙人の足だまりは赤倉山、岩木山、十二坪に四カ所あるが、里に降りて来た時に、信者が作柄の予想などを問うことが多く「今年は晩稲と早稲はだめで、中稲が一番よい」という託宣であった。このようなことは、仙人自身の予言ではなく、赤倉様から聞いて伝えるだけだとい

神々しき？　赤倉山仙人

木の葉を綴って前を隠していないところが昭和の仙人の真面目ともいえようが、よれよれの越中フンドシ姿は、むしろあわれをもよおす。若い人たちには、むしろ「社会生活の敗惨者」といった解釈がぴったりするかもしれない。

う。妻さきさんは一昨年死に、子供は一男五女、二町歩の田持ちだったそうだが、子供たちとは別居しており、死ぬときは、死体は山の中に隠してしまうと語っている。

青森県で大山彦江神として、里の人たちから尊崇されている赤倉山仙人にくらべると、山梨県北都留郡富浜村鳥沢の高畑山にいる「高畑山仙人」は、ずっと人間くさい。仙人とよばれるようになったのは、自分で仙人を名乗っているためらしい。

まるでアメリカ映画のターザンそっくり。ブドウづるや藤づるを綱にして、目のくらむような樹から樹へ飛びあるくのが大好きなのだそうだ。こんなことをしても六〇歳の現在までけが一つしないところが、仙人らしいところ。

この仙人の俗名は天野博英さんといい、今から一〇年前、五〇歳の時、愛する妻に死なれ、息子も戦死した上、日本が戦争に敗れてしまった時、つくづく世の無情を感じ、俗世がいやになって、山の中にこもる決心をしたのが、仙人生活の動機になったという。娘さんが一人いたが、フラリと家を捨てて近くの高畑山へこもってしまった。親類や娘さんが、どんなに家へ帰ってくれるように頼んでも、山から降りようとはせず、孤独な生活を一〇年も続けている人。鳥獣を相手に山の中で、黙々と開こんを続け、今では一人で四町歩もの畑ができた。仙人のうわさを聞いては、山を登ってくる都会のハイカーのために、山小屋で山料理をだしたり、ブランコやおすべり台を設けて、若い人たちが遊ぶのをながめて喜んでいるそうである。

頭が変だ、狂ったのだといってしまえば、それまでのことだが、人間の人生観、生き方にはいろいろあるので、ふつう一般の人と違うことは確かだが、それだけで、気ちがいということはい

いすぎかもしれない。徒然草の著者の兼好法師だけでなく、わが国民の中には、昔から何かの動機で、里の暮らしがいやになって、生涯を旅に果てたり、世を捨て、ことに山に入ったっきり出てこなくなった人びとと、「神隠し」などで、ずっと行方がわからなくなり、やがて山深く、一人で暮らしていることがわかったという二つの種類があるが、もう一つは、昔から山の中だけで暮らしていた人たちがいたらしい証拠は、いつの時代にも、たくさんあった。

一般にヤマビト（山人）とよばれている人たちがそれである。この人たちは、時代により、地方によって、オニ（鬼）とよばれてきた。また山ノ神、ヤマチチ（山父）、ヤマジジイ（山爺）とかヤマワロ（山童）などとよばれていたものの中にも、このようなほんとうに生きている山中の人が、かなりあったものと見られている。

女の場合は、ヤマハハ（山母）、ヤマヒメ（山姫）、ヤマウバ（山姥）などとよばれ、赤倉山仙人のように、鹿よりも早く走り、声が雷のようだというほかにも、赤い目がランランと光っていたり、西洋人のように天狗鼻だったりという共通の特色が、よく話題になっている。ふつうの着物をきないで、ハダカ、ハダシという例も多い。力もなみの人間よりも、ずばぬけて強いといわれている。もちろん、こんな人たちは、役場に戸籍などを届けていないし、ふつうの国民のように、定まった家もなく、山から山をわたり歩いているようにいわれている。一方では、ほぼ住んでいる山の定まっている場合もあるようである。高畑山仙人のように、もとはふつうの人でも、これを仙人とよんで、別に変な気もせずにいる日本人の心の中には、今までの日本歴史ではわからなかった、かくれた部分があるに違いない。

赤倉山仙人も、よく里の信者の家を訪ねては酒やご馳走を食べるそうだが、炭焼小屋や山小屋で暮らしている里の人を、突然に山男が訪れたという実話は、昔からずいぶんあった。

炉の火でモチを焼いて食っているところへやってきて、しきりにモチを欲しがっては食っていたが、このモチを食い果たしたら、とって食われると覚悟していたところ、火であぶられた榾(ほだ)がパチッとはねて山男の顔をいきなり打った。山男はビックリして飛び上がり〝とっても人間にはかなわない〃と叫んで逃げ帰ってしまった。翌朝、小屋の前にドサッという大きな音がしたので、出てみると、ご馳走になったモチのお礼のつもりか、山のような薪木がおいてあった……。

山中のひとり暮らしなのだから、体もよほど丈夫でなければ生きのびられないに違いないが、背丈も異常に高いとか、目が赤いとか頭髪も赤い、鼻がうんと高いというような特色を考えると、当然、われわれ大和民族とは異る民族なり、種族ではないかという合理的な解釈をしたくなる。

心細さや不安や恐怖心におびえていると、相手の姿形なども、自然にものすごくなるし、一方また深山幽谷には、そんなものが出没するという知識をもっていると、ただの猟師やきこりに出あっても、テングや鬼や仙人のように感違いするという例も、ずいぶん多いにちがいない。

赤倉山仙人にしても、よくよく写真を見ると、よほど、よぼよぼした老人で、「その足はシカより早く、その声は雷の如し」というのも、いささかあやしい気がしてくる。つまりは「そんなふうに山の中に、たった一人で何十年も暮らしていられるからには、ただの人間ではなかろう。」という里の人たちの解釈が、彼らの特殊性をよほど誇張してやっていると考えるべきだろう。とはいうものの、「日本のジプシー」といわれている山窩(さんか)のような一群の人びとが、日本の野山を

自由にかけ暮らしていることも事実で、その数は、数万から四、五〇万人と推定されている。戸籍を届けていないのだから、ほんの推定にすぎないのだが、定住する家を持たず、季節や食料事情その他で自由に漂泊移動しているという。使う道具も、話す言葉もしたがって暮らし方もまるで一般国民とは違っているこの人たちは、果たして異種族なのか、大和民族から、ずっと昔に分かれた末なのか、そのへんのところは、まださっぱりわかってはいない。竹細工や箕(み)なおしなどを専業にしている者も、いたって多く、しょっちゅう里の人びととは交渉が保たれているのだが、暮らしぶりは、まるで別世界なのである。

この人たちがカケマクと称して急速に移動する時は、一日三〇里、四〇里は平気だといわれている。しかも、これは女子供まで含め家財道具もろとも山から山への大移動の時のスピードだという。どこまで正確なものか疑問なのだが、修練と遺伝などで、ともかくもシカの如く走る能力が人間にもあることは、陸上競技を見ても証明されている。

こんなせまい国であり、これほど多数の同胞が住みながら、こんな未知の部分がまだ残されているのである。やがては国民の関心や学者の目も、こんな方面にまで注がれ、今までは素性もよくわからなかった仙人、山男の暮らしぶりも解明されるようにはなるにちがいない。

(岩波本)

「やまびと」の怪

我妹子(わぎもこ)が穴師(あなし)の山(やま)の山人(やまびと)と
人も知るべく　山葛(やまかつら)せよ　山葛(やまかつら)せよ

「山人」という言葉は、この神楽歌にも見えているように、遠い昔から使われていた。

いまでは、ふつうの人たちは、山の中だけに住む人間としてはサンカぐらいのもののように、それも都会の人びとは小説でだけ得ている知識であるから、どこまでが、ほんとうなのか、どこまでが創作なのか判然とはしない。

とにかく一〇〇〇年以上もの大昔から、平地の里ではなくて、山だけに住んでいる人間のいたことはたしかな事実であった。

そしてまた、昔のままの「山人」は、今はもう、たとえ絶滅してはいても、いまなお「山に住んで、里とは異なる暮し方をしている人びと」のいることも、多くの証拠がある。

また「山ノ神」については説明するまでもないことで、高山、低山にかかわらず、山を知っている人である限り、山ノ神の信じられている事実を否定することはできない。

実際に、その姿を見たり、その声を聞いたりしたことはなくとも、鬼とか、山姥とか、天狗とか、山に関係する妖怪変化、異常なモノの話、もしくは、そうした言葉、文字を知らないという日本人は一人もいない。

山近い村むらの人たちや、山に親しんだことのある人は、さらに、山だけにかぎられた、さまざまな神秘、不思議な現象、異常なできごとについての、いろいろな知識を持っている。

どういうものか、われわれの間では、あまりにも、しばしば「神隠し」になった人びとや「迷子」になった子供の話が多い。

それは都会のお花見や動物園などの雑踏の中でのただの「迷子」ではなしに、一種の「モノまよい」めいた現象が昔ほど多かったようである。

また大人のフッと姿を隠し、山に入ったまま、再び里には帰らなくなった者、中でも女の山に入って姿を消したという例は、かぞえきれぬ程も多かった。

しかも何年か後に同村の者が山中で会ったのは、たしかに何某であったとか、一度は自分の家に戻って姿を見せたが、その後、再びは姿を現わさなかった、もしくは山で逢って声をかけたところが「二度と里へは帰れぬ、自分に会ったことは口外してくれるな」などといって姿を消したという実験談も多く伝えられ、山中にそうした人のなお生きているかと想像せられた例が少なくないのである。

里人の山へ入って会った、見たという一方的な実例だけではなく、山で働く炭焼、樵夫の小屋に不意に姿を現わして、焚火にあたったとか米の飯を欲しがったという話もその一つだけを紹介したが、集めればこれまた限りない程であろう。

わが国の古代の記録を見ると「国ッ神」という語がしばしば出てくる。これは人類学上でいう先住民族であり、祝詞(のりと)に出ている「国中に荒振神等(あらぶるかみたち)を、神問わしに問わしたまい神掃(はら)いに掃いたまいて……」などのアラブルカミタチは暴神とも荒神とも書いてあり、古語拾遺(こごしゅうい)という本などには「不順鬼神」とも書いてある。これらは多分国ッ神すなわち先住民族中で、ことに強硬に反抗した者たちを、古くから、こんなふうに呼んだのだろうと推論される。土蜘蛛(つちぐも)とか大和に住んでいた国巣(くず)なども、こうした先住民族だったようだが、先住民族が北へ北へと圧迫されて後には一

人も残らなかったように考えるのは不自然なことではないだろうか。

事実、里の人びととは、まるで風俗を異にする一群の人たちが住んでいたという例は、後のちまでも、かなり多くの記録が残っている。

『上古史上の国津神が真二つに分れ、大半は里に下って常民に混同し、残りは山に入り、または山に留まって山人と呼ばれた』のであり『近世いうところの山男山女・山童山姫・山大山姥などを総括し、便宜上、この古語を復活して、これらを仮りに山人と名づけるのは必ずしも無理な断定からではない』とし、また「山人すなわち日本の先住民が絶滅したといわれる過程を想像するに、その道筋は次の六つが考えられる。

(一) 帰順朝貢に伴う編貫であって、最も堂々たる同化。

(二) 討死。

(三) 自然の子孫断絶。

(四) 信仰界を通って、かえって新来の百姓を征服し、好条件を以て行く行く彼等と併合したもの。

(五) 永い年月の間に、人知れず土着し、かつ混淆したもの、数においては、これが一番に多いかと思う。

以上の、五つのどれにも入らない差引残、すなわち第六種の旧状保持者、というよりも、次第に退化して、今なお山中を漂泊しつつあった者が、少なくともある時代までは、かならずいたわけだということが推定される。ところが、この第六種の状態にある山人の消息は、極めて不確実

であるとは申せ、つい最近まで各地に独立して随分多く伝えられていた。それは隠者か仙人かであろう、いや妖怪か狒々か、またはダボラかであろうと、勝手な批評をしても済むかもしれぬが、事例は今少しく実着でかつ数多く、またそのようにまでして否認する必要もなかった……」

相模に住む　山鬼　(妖怪画談全集より)

柳田國男先生の「山の不思議」や「山の妖怪」解明の発端の一方面は、こうした実在の「山人」に立脚して、大正三年以後、その主宰した機関雑誌「郷土研究」に連載された「山人外伝資料」として発表され、続いて大正六年に日本歴史地理学会講演の「山人考」にまとめられている。この方は昭和二二年

に実業之日本社から復刊された「著作集第一巻」の「山の人生」にも付録として出ているから、容易に読むことができよう。

心理学の方の解釈では、さして説明もむづかしくはないのだろうが、山村で語られる山の不思議の一つに「天狗倒し」という現象がある。

山中の大木を挽ききる音がしたかと思うと、非常な地ひびきを立てて、まるで大木でも倒れるような音が聞えたのに、その辺りに行ってみても、一本も伐り倒された大木などはないという例。

こうした怪音は、一人だけでなく、二人も三人もが同時に耳にするというのであるから、共同幻覚に違いないだろうが、ソラキガエシ、カラキガエリ、テングナメシなどの名称で天狗やキリキボウ、狸のなせる業と説明されている。

また山中の怪音には、ヤマカグラ、ヤマバヤシなど、山中で聞く神楽の音楽や閑寂な林にひびき渡る「天狗の高笑い」などもある。このような幻覚を里の人びとが、なぜ経験するのだろうか。問題は、そうした経験をくり返す里人たちの心理状態、山中の精神的不安の根元なのである。

オニといえば漢字の鬼、今ある絵空ごとの鬼の絵のようなものだけかと思うと、日本古来の国民大衆―常民―の中に実際に信じられていたオニとは、かなり違ってきてしまう。昔の、私どもに、もっと親しかったオニは、文学上の鬼や支那思想の鬼とは、かなり異っていて、オニの子孫だと自慢する家筋もあったのである。

また天狗にしても、かならずしも、今のように鼻の高い、あんなものでなかったことは、前にも、ちょっと申しのべたとおりである。

山に親しい人たちの、山に関する不思議、異常な経験を、幻覚、迷信と笑ってすますことは誰にでもできるが、そんな経験をした人びと、これからも経験するだろう村人、または、そういった話を信じ、もしくは半信半疑ながらも語り伝えようとする人びとが、私どもと同時代の同胞であることに思い及んで、何故に、そうした生活経験があるのか、山というものに、どんな信仰を持ち、山とどんな交渉を持って暮して来たかということまで考え及ばなければ、そうした村里の教員などはつとまるまい。

こうした常民のほんとうの社会学、国民一般の生活の変遷史というものは、いたって文献資料に乏しいために、こんな迷信めいた材料をつみ重ねてゆく以外に、今ではもう方法がなくなっている。

ハイキングや山登りの途中にでも、ちょっと休んだり、弁当をつかわしてもらった山村の縁先などで、かりそめに聞く山の怪談、不思議話のかげにも、長い年月、山に生き、山と共に暮して来た日本人の生活史が隠れている。

そして、こうした、生きた学問の資料は、日本には今ならば、まだまだ集めて整理しきれぬほど残されている。

柳田先生がすでに早く提供した「山人」の問題は、その後の若人たちによって、まだいくらも発展させられてはいない。読者が登る山頂への登山道の他に、横すじかいに山人たちの隠れた通路は、今だに残されたままになっているのである。

鬼と天狗　山の怪奇譚に、かならずといってよいくらい、いつも登場するスターに鬼や天狗が

ある。
　その名称や、ちょっとした話題の片端は、もう紹介ずみだが、もっと掘りさげて考えてみる価値は、今も十分にありそうである。というのは、その実体の有無はともかく、人間界との交渉の現段階をみると、言葉や過去のありようを示す多くの例が、今なお残されているからである。
　児童遊戯にその面影をとどめている〝隠れ鬼〟〝鬼ごっこ〟をはじめ、諺のような形で今なお使われているものに、

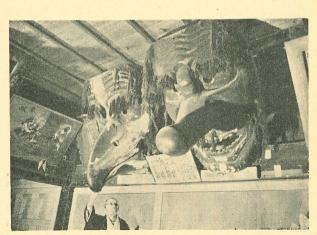
　小姑、鬼千匹。
　親に似ぬ子は鬼っ子。
　来年のことを言うと鬼が笑う。
　鬼の居ぬ間の洗濯。
　鬼も十八、番茶も出花。
　鬼の涙。鬼の霍乱。
　鬼よりこわい。

などを、誰でもすぐ想起できるであろう。
　年中行事として、全国的に行われている節分の「福は内、鬼は外」には、実際に各地の寺々の節分会には、年男のほかに仮装した鬼が出て来て、追い払われる真似事が繰りかえされていることも、日本人ならば、みな身近な行事になっている。
　これらの鬼や後にのべる天狗などは、実在の山の仙人や山人の里の生活における影響というよ

りは、やはり、そのもとは荒ぶる神の各時代による変遷と解釈すべきである。
　もともと「鬼」という漢字をオニとよぶのは後のあて字で、オニのおこりは、むしろ「隠」だと説かれているくらいで、中国大陸の鬼とは、その性格もおのずからことなるものであった。このオニに仏法の説く、いわゆる地獄のオニの思想が習合せられて、ここに頭に角をもち、赤い皮膚に虎の皮の褌をしめた典型的な姿ができあがるとともに、バケモノの一種とはなったのである。そして国民に親しいものとなったこの姿は、水ノ神であったはずの雲上の竜王までもこの姿に似せてしまい、雷雲上で大きなる如露を持たしめるにいたった。
　山の精霊、威力ある山神の上に中国、仏教の知識を重ね焼きにした、ある時代の日本人の連想が、天にあって稲妻を発し、とどろく雷鳴、豪雨をもたらすモノに及んだと考えることは、そう不自然ではなかったろう。
　試みに電話帳を繰ってみると、その姓に鬼のつく人びとが今もいることがすぐにわかる。
　東京の電話帳では、一番多いのが鬼頭さんで二五人、つぎが鬼沢さんの一二人のほか、鬼久、鬼島、鬼海、鬼川、鬼塚、鬼多見、鬼原、鬼山、鬼木、鬼形、鬼足、鬼武、鬼丸などさまざまあり、三鬼、五鬼、九鬼さんなどで現在も世に知られた人もいる。
　奈良県大峰の五鬼、鬼太夫の子孫だといって、代々の家筋を誇る大分県日田の大蔵家のほか、青森県中津軽郡の旧鬼沢村とか、京都の八瀬などには、鬼の子孫と称する家々もあって、バケモノとして畏怖するのではなしに、これを誇り、村人によって崇敬されていた時代のあったことが考えられる。

鬼ケ島、鬼界島は桃太郎君とは関係なしにわれわれの同胞の住む現実の土地であるが、集めればおどろくほどの鬼に縁の深い地名は今なお各地に残っていて、大なり小なり鬼とのゆかりを説きたてている。鬼の開墾したという鬼田、鬼の足跡、爪跡と称する石や土地の窪みをはじめ、鬼怒川温泉などという地名もまた、そのゆかりによるものであろう。

秋田県の年中行事として、すっかり有名になっているナマハゲに出てくるオニを見てもわかるように、われわれの前代生活にあっては、山から里を訪れる神であった。

日本の古代の信仰ではカミ（神）とオニ（鬼）とタマ（霊）とモノの四つが代表的なものだったことは、

火伏の神として広く信心されて古峯神社（栃木県）にかかげられているすさまじく大きな鬼面

折口信夫先生の「鬼の話」（古代研究民俗学篇2）などにくわしく説かれているところである。

異常に高い鼻が魅力になっているとは言うが、鼻の高いことが、なぜわれわれにとって魅力なのかはわからない。天狗の面ばかり集めて喜んでいる人は、かなり多いのだから、一度はその魅力のなんたるかを問うてみたいものである。

しかし、この天狗の鼻の高いことは、けっして昔からでもなかったし、全国共通の特性でもないことは、地方の人たちならば知っているはずで、山形県最上郡あたりの天狗さまは、ただ神々（こうごう）しい白髪の翁というのみである。

「天狗にさらわれる」ということを、地方の人の中には、事実であるように思いこんでいる者が少なくないが、人間をさらうモノは、中世までは鷲（わし）であって、その後オニにかわり、オニの人気が衰えると、これにとってかわったものがすなわちテングであった。

羅生門の鬼だとか、大江山の酒顚童子（しゅてんどうじ）などは、鎌倉時代以後にはもう時代遅れになり、やがて天狗全盛時代を迎えることとなった。その名残りが、いまなお各地に伝説の形で伝わっいてる天狗岩、天狗松であり、行動としては巨木大樹を倒す幻の音をひびかせるというソラキガエシとかテングタオシなどである。

そして現在なお、天狗の話声や、いわゆる天狗の高笑いを、生きたわが耳で聞いたと真顔で教えてくれる老人や、中年のおばさんたちに、山村を旅行すれば、いくらでも逢うことができる。

素朴な農山村における彼らは、人間どもの長年におよぶ観察と経験によれば、もとはすばらし

い威力をもって単独で行動するモノの多かったのにくらべて、時代の新しくなるとともに、しだいに集団行動、共同生活をする場合が多くなってきたようである。

彼らが人間界となにかの接触を保つ機会は、バケモノ一般と同じくタソガレ、カワタレの未明暁闇であって、福島県相馬市坪田の人たちの観察によれば、その飛翔（ひしょう）する高度は、地上およそ五—一〇メートルであるという。（昭和一六年聞書）

声高にガヤガヤいう話声はたしかに大勢で、風はちっともない夕なぎだったのに、まわりの雑木林の枝々が、サァーッと一方になびき、声の遠ざかるとともに、そのうねりは遠ざかっていった……と、その村人は、遠いまなざしを阿武隈山脈の裾に向けて語っていた。

仏教からきたらしいテングという名称は独立したもののようだが、オニといいテングとはいっても、その属性だけが絵画や文芸によって典型化されたというだけで、鼻高くして天狗のウチワで飛行自在、修験山伏のような服装のモノが、大昔から日本の空を飛んでいたのではなかったのである。

武田静澄さんの「天狗の団扇（うちわ）」には、テングの機能とでもいうべきものを立証する例話の代表的なものを掲げられていて、ずっと通読すると、各時代によるテング——人間の側で、考えてテングらしきもの——の移りかわりがわかる。

山人（やまびと）、山に居住するモノがいまでは想像もできないほど多かったか、あるいはまた、どういうわけか、フッと山に魅惑されて家を捨て山中深く姿を消してしまう人間の多かったかは即断できないけれども、人里を遠く離れて終始弧独に明け暮れていると、しだいに無口になり、感情の起

伏もはげしくなる一方では、すべての物事に無関心になるのは、あるいは天地寂莫の久しき威圧による変化かもしれないが、笑いさざめきながら共同生活を続けている里人が、時あって山中で行き逢うモノが、ほぼ共通してそんな性格らしいことは、いくつでも例証することができる。

この辺の真相と思われることは、もう一度「赤倉山仙人」の入山の事情やその現状を読み直してもらえると実感として納得できると思われるが、「こんな人にわずかな思索力ないしは信心があれば、すなわち行者であり、あるいは仙人でありうるかと思う」（柳田國男先生「山の人生」）

ともかくも、山人とか隠し神、大人（おおひと）、オニ、テングなどは、後世の自由なる空想を奔放にした百鬼夜行絵巻などとは異って、山中深く身をかくして住むモノとの交渉が根拠になっていただろうことは、ムスビを与えた、薪をもらったと、いったたぐいの多くの類例からも推定できようかと思う。

三、家や路傍の妖怪

路上の怪　鬼や天狗のような、いまだに信仰との縁をそうは薄くしていないものとはちがって文字どおり、バケモノそのものとでもいうべきいろいろなモノがたくさんいる。ここでは、くわしい解説はさけて、そうした類の種目をあげてみよう。

妖怪の中で多くの部分を占め、また、誰でもたくさん知っているのは、道の辻や橋や路傍の樹

の下、森、坂、道に沿った川または野原の路などに現われる類のものである。

　これらを、それぞれの働きと、現れる方法などで分けると、アズキアライのように音を出すもの、権五郎火とか火走り、蓑虫（新潟県南蒲原本城寺村）のように、怪しい火が見えるもの、佐渡のミアゲ入道や、幻の壁を出現させるようなもの、同じ新潟県の北蒲原郡金塚村のバイロン石やバロウ狐あるいはまた、東京本所の七不思議にかぞえられたオイテケ堀のように、そこを通る人に呼びかけるもの、佐渡の砂撒き狸のように通行人にいろい

アズキ洗い

ろないたずらをするもの、南蒲原あたりでいう横槌蛇とか、岡山のテンコロバシのように、人の歩く足にまとわりついたり転って歩くもの、長野付近のヤカンヅル、長野県北安曇郡の袋下ゲのように頭上の樹からぶらさがるようなもの。

　また、普通にいわれるように狐が通行人の前で化けたり、その人をまどわしたりするといったふうに、道路上に現われる怪物には、七人童子の打綿狸（四国多度津）ツケ紐小僧（長野県南佐久郡）袖引小僧（埼玉県川越地方）などいろいろあり、新潟県三条町、長野県南佐久、下伊那両郡などでいわれる送り犬、静岡県北伊豆の送りイタチ、和歌山県の送り雀、岡山県の迎い犬のように、通行人を送り迎いするような怪物なども信じられている。

　石川県の山中や愛知県北設楽郡には、通行人の提灯の火にとりついて火を借りようとしたり、火を細く暗くするようなものもある。

　こんなものを、一つ一つ紹介していると興味は深いにちがいはないが、それではかえって内容が散慢になってしまうので、先を急ぐことにしよう。

　まず、路上の怪を分類してみると、目のまよいともいうべき怪し火を出すものを一くくりすることができる。

　この方は人玉のような人間の亡霊が火になって見えるものと、光りものとよばれるような火の玉、火柱や狐火や山鳥の尾の光るようなものに分類することも可能で、佐渡の外海府では、人魂の火をケチといっているが、四国の土佐でも亡霊の火をケチ火といっている。このケチは「ケチ

がツク」とか「ケチをつける」などと、私どもが日常会話に使っているケチと、もとは同じかも知れない。

こうした怪し火には、土地によって、その正体といわれるものも名称もいろいろである。たとえば、沖縄のイネン火、石川県能美郡の坊主火とかそのほか、油火、オサ火、ホイホイ火、ジャンジャン火、ゴッタイ火、テン火、トビモノ、ワタリビシャク……などがあり、金沢のスケアンドウというのは、黒味を帯びた光りの幻である。

新潟県でもスケジョウチンというのは、湯灌の捨て場から飛び出す火の玉のバケモノで、雨のショボショボ降る晩などに、フワリフワリ飛び廻ると信じられている。

こんなもののほかに、巡徊するというか、そこいらを歩き廻る妖怪の一群がある。

四国の徳島県で首のない馬に乗って歩く夜の怪物のヤギョウサンとか首キリ馬、岩手県遠野市のヒトツマナグ(一つ目)、青森の甘酒婆などがこれだが、これらは、ちっとも怪物の要素がなくて定期的に訪問して来る神様と縁がよほど近く、また厄病神、行き逢い神などをただちに連想させる性質のものである。

最後に残ったものが家屋にまつわる怪物のたぐいである。

これには納戸婆（奈良県吉野、日向、岡山、備前）灰婆、棚婆（神奈川県）土用坊主（神奈川県）などというのもあるが、ここで注目しなければならないのは、前にもふれたが、子供の形をしているたくさんのモノのあることで、こうしたものは元来、家の守護神ともいうべきものだったと思われる。

伊予のアカシャグマ、遠州の枕小僧、岩手県遠野市付近のクラボッコ、ザシキワラシ、クラワラシ、山梨県北巨摩郡のテンヅルシなど、いずれも小童だと信ぜられている。

このほか、火葬場のサイコイ太郎とか、新潟県南魚沼郡で新墓をあばいて脳味噌を食うオボとか福島県会津地方で、死骸を奪って食うというカシャなど、わが妖怪変化、魔物の類は、挙げればあきれるほども多い。

すさまじき雪女郎　雪にちなむ妖怪では、雪女、雪女郎が有名になっている。文字に出て来るものや、絵に画かれたものは、背の高い真白な美しい女で、モウロウとはしているが、べつに怖ろしくて腰を抜かすようなものには画かれていない。

実際に信じられている雪の怪は空想上のものとは少し違っていて、大体三つに分類できるようである。

すなわち、一本足の男らしいものと、産女のように子を抱いたもの、それに女のバケモノのような三種である。

一本足の雪中の怪には、岐阜県飛騨の高山の雪入道がある。和歌山県の雪坊も裸形の片足で、腰から下は白衣をまとっているという。和歌山県伊都郡貝好村のユキンボは、雪の降り積もった夜に出て歩くバケモノで、子供のような形のモノが一本足で飛び歩くといい、雪の朝、樹の下に円い形の窪みなどがところどころにあるのは、このユキンボの足跡だといわれている。

四国徳島県の「一ツ足」は雪の上に、左または右足だけの足跡をつけ、北宇和の「一本足」も

雪の降る日に来るもので、雪のところどころに穴のあいているのは一本足の足跡だといっている。和歌山県南部にも（名草郡、名田地方）一本足の名があり、静岡県磐田郡川上村でも一本足というバケモノが雪の降る時に足跡をつけて歩くと信じられ、これは山仕事の時に、片足を斧（おの）で切って死んだ杣人（そまびと）の亡念だといっている。和歌山県の上山路村では、一二月二〇日に山に行くと、この一本足が出るともいい、雪の深い日にも来るという。

また遠く八丈島でも、二、三〇年前の正月に雪が降った朝、家の周囲や道にも山にも一面に一本足の跡があった事があり、末吉村の人びとは「山ンバが一本足で竹をついて歩き廻ったのだ」といっていたそうである。長野県の諏訪郡永明、宮川両村では「シッケンケン」というのは雪の降る時に出て来る女のバケモノだと言って、紐で人を縛って歩くようにも信じているそうであるが、シッケンケンというのであるから、これも一本足に違いない。

日野厳という人の動物妖怪譚という本によると、佐藤紅緑氏の「樹々の春」という作品に出ている青森県浪岡村の雪女は「子供を抱いていて行き逢った人に、その子を抱いてくれと頼むので、抱いてやるとその女は消えてしまって、子供がいつまでも泣きやまない。それが男の子なら脇差しを、女の子なら櫛を持たせると泣きやむ」という話が出ているそうである。

その他、日野氏は、秋田の雪女も子を抱いて現われるが、うっかり抱いてやると、だんだんに重くなって雪の中に埋もれてしまう。その子は雪のかたまりだというとか、茨城、新潟の雪女も子供を連れて出るとあるが、どういう資料によったかは明らかでない。

伊予の吉田では、冬中雪の積もっている晩などは、ユキンバが出ると信じていて、こんな晩は小児が屋外に出ないようにと戒める。青森県西津軽郡の関では、正月三日に雪女が降りて来て、最初の卯の日に帰ると信じていて、この雪女のいる間は、一日に三、三〇〇いくつかの稲の花がしなびるから、卯の日の遅い年は作柄が悪いというそうである。

岩手県遠野市の雪女は、小正月の夜や冬の満月の夜に、大勢の童子を連れて遊びに出るといって小正月の夜に限って、村の子供たちは早く家に帰るように戒められるという。

伯耆（鳥取県）の中津の雪女は、白幣をふり、淡雪に乗って現われ、長野県下伊那郡の雪オンバは、やはり雪の降る夜に現われるバケモノである。

美濃の徳山村では、目に見えぬものが時どき女に化け、雪玉の形でも現われるのを「ユキノドウ」といっている。これが山小屋に来て水をくれというが、水をやると殺されるから、熱いお茶を出すものだといわれている。

冬の始めに小さい白い虫がたくさん飛ぶのをよく見るが、東京ではこの虫をオワタといい、福島県相馬市ではユキブシコという。子供はこれを見て、「雪をしょっておじゃれ」などとはやすが、これが飛ぶようになると、もう間もなく雪が降ると人びとは信じていたのであった。つまり雪の先触れである。

雪が吹雪（ふぶ）いて、人の形に見えることがあったのを、昔の人は実在するもののように感じたという見方もあるだろうが、山の精霊が山ノ神であり、水の精霊が河童に代表されるように、やはり雪の精霊を信じていたのが、だんだんとこんなものになって来たのだとも思われる。

外国の雪国でも雪の精や霜の精はかつて信じられていたようであった。ユキオンバを信じている長野県下伊那ではまた、雨の降る夜にもアメオンバという怪物が出るといわれている。

伝説にいうところの、すさまじき雪女郎ごときも、つまりは雪の降り積る時に、よく訪れて来る神様のおちぶれた姿とでもいうべきだろう。

狐と狸の腕自慢　あなた方は狐の表情を、よく観察したことがあるだろうか。狐の目は小さいけれどもキョトキョトした落つきのない目であり、そばに人がいると、チョイチョイと横目づかいをして、盗み見をする。誰が見てもいたって注意深く、神経質なけだものらしいことが感じられる。

生きた狐を見たことのない人でも、昔話や物語などの狐は誰でも知っている。生きた狐などは動物園にでも行かなければ今では見られなくなったが、私たちのお爺さんやお婆さんのころまでは、今よりはもっともっと狐のような、けだものとの縁は深いものだった。

そのころは、大きな町の数もまだ少く、汽車も自動車もこんなに多くは走らず、電燈もラジオもないころで、山や野原には狐や鹿や狸や猪などがかなり多く生きており、人間の住む家の近くまで、遊びに来ていたのだった。さらにその以前は、狐が人間の家までおしかけて来ては、ニワトリをくわえて行ったり、縁の下に巣をつくって狐の子を生んだりまでしていた。こんなことは、大昔ばかりとはかぎらず今でも山深い村むらの人たちは、狐やイタチなどに、よくニワトリを盗まれては追いかけまわしていることもそう珍らしくはない。

こんな村へ行くと、狐が人間の体の中に入りこんだとか、狐が人間にとりついたなどという話

もしばしば聞くことができる。

むつかしい制限漢字の「憑」は、ツク、ツキとよみ、腹の中に入る蛔虫のように、その魂が体に入りこむことである。狐の魂が人間の体中に入りこめば「狐につかれ」、その人や家は「狐つき」となる。

四国や九州、中国、近畿、中部地方では、今でも、この狐つきが、なかなか盛んで、医者や学校の先生を困らせている。

狐にとりつかれた人は、狐のように四つばいになって歩いたり、油揚げばかり食べたがったり、柱に噛みついたりして気ちがいのようになるのがふつうである。もっと困ることは、狐つきは代々遺伝するばかりか、狐にとりつかれた人の家族が養子に行ったり、嫁入りすると、その人とともに縁組した別な家まで、その狐が分家して、くっついて行くと信じられていることである。だから、ふつうの家では狐つきだといわれる家の娘などは、けっして嫁にはもらわないという。また、狐つきの人は自分では、ちっとも盗むつもりはないのに、「あの人は金持でうらやましい、お金が欲しいなあ」と思うと、とっついている狐が、いつの間にか、向うから財布を盗んで来てしまう、などとも言われている。

四国で犬神と言い、鳥取、島根県あたりで言う人狐、管狐とかトウビョウ（蛇神）などは、みな同じツキモノだが、狐だけがそんなに悪い魂を持ったけだものであるはずはない。

狐は、山の神様の代理をするお使いの一種だと昔から信じられていたから、今でも正一位稲荷大明神にまつられたりもしているわけ。だから、今でも狐つきになると、願いごとが、かなったり、お金持にもなれるとも言われているわけは、こんなところにも、一つの理由があった。

「鬼が幽霊に進化して、もっぱら個人関係をせんさくし、一般大衆に対して千変万化の技能をたくましくしないようになると、化けるのは狐狸という評判がもっとも盛んになった」（「一つ目小僧その他」）。

狐はすでに風土記、日本書紀以来、しばしば文献にも出ていて芳賀矢一博士も「国文学に現われたる狐」という一文を草されているくらいであるが、この狐の機能は狸とは比較にならないほどのすばらしさで、まずみずから巧妙に年ごろの娘に化けて見せ、それによって人間を化かし、あるいはまたいやらしい執り憑き方もする。

狐にだまされたという経験や話は、全国で数かぎりもないほど多いが、合理的な解釈をしようとすれば、たわいのない錯覚にすぎないであろう。

麻畑やソバ畑を深い川と感ちがいして、一晩中裾をめくりあげて渡っているうちに朝日がさしてきて、正気にもどったとか、馬糞を甘いマンジュウだと思って喰わされた、大金をもらったつもりが木の枯葉だったというたぐいの話は、笑い話としての興味つきざるものがある。

しかしそんな狐といえども、人間の側が落ちついていて、おかしいぞと気がついて、路傍の石に腰かけタバコを一服吸うよゆうがあればすなわち、すべては雲散霧消するというほどのたわいなさにすぎない。武田静燈氏がいっているように、狐の嫁入り、狐火、狐のオサクタテ、モリタテなどは、いずれも野中の幻覚にはすぎまいけれども、こんな現象によっても、前代の人びとは、一年の作物の豊凶を占う方法としていたのであった。

天心ランマン，お酒に浮かれて踊り出すタヌキ（宇治）

〃ボクらは人間のように化かしたりはしません〃

人獣交渉史上における狐や狼や猿などの背後に、われわれは、いつも神の存在を意識せずにはいられなかったのである。

狐は外国でも日本と同様に陰険な、ずるい動物として登場するようだが、これにくらべると狸のほうは、むしろ実利実害とは直接にかかわりの少い動物といえる。

その本体の姿からくる人間の側のイメージによるかと思うが、全国いたるところの瀬戸物屋の店頭や料理

コン太夫，どうして酒の味を覚えたんだい（桐生）

屋の入口などに、愛嬌ある狸のあのおおらかなフグリをさげた姿にわれわれは日常親しんでいるから、さして奇異な感じも伴わぬけれども、外国人から見れば、かなり珍奇にして不可解なものにちがいあるまい。

同じ化ける、化かす、とり憑くにしても、狸の方は、狐よりははるかに罪のない道化モノである。

茂林寺にせよ証城寺にせよ、ちっとも無気味とも、ものすごいとも感ぜずに、むしろ、ほがらかな笑いを誘う種類のものである。今となっては、カチカチ山の

狸奴だけは、どうしてあんな悪質なことをしたか、ちょっと理解に苦しまざるをえないくらいのもので、月夜に浮かれて腹鼓を打ったり、汽車の開通の印象の強烈な村では、鉄路上にピョーピョーガーガーと幻の汽車を走らせたりしたばっかりに、本物の列車にひき殺されて、朝の太陽のもとに、みにくい骸(むくろ)をさらすほどにも、愚かにして素朴なるバケモノではある。

つい近ごろも茂林寺に寄宿する愚仏と号する奇人が、分福茶釜（ブクブクと湯のたぎる音からの命名）の狸にどうだまされたものか、白昼公然と同好の士の参集を乞うて「人間界にはあいそがつきた。死して今後は狸界に生きる」などと声明して、生きながらの野辺送りをやってのけ、ご本人だけはよい心持になったなど、写真入りで新聞に掲げられていたが、茂林寺にはふさわしい、人もなげなるおふざけというほかはない。

四、遊泳自在の妖怪

水神変じて河童　河童をはじめ人魚、船幽霊、濡れ女とか、産女(うぶめ)とか、海坊主のようなものは、すべて水に関係のある現代の妖怪変化である。

河童の元の型は、今もなお、神として祭られている水神様であって、青森県あたりでは、水虎(スイコ)様であるとか、オシッコサマ（写真参照）という変な名前で呼ばれているものだが、これが河童の直接に、前の段階を示す神がみである。

オシッコ様（民族学博物館所蔵）

現に、その神像もできていて、旧家の暗い神棚の上に安置され、敬虔に祭がいとなまれている。

それらの祭られ方をみると、とても神罰のほどがはばかられて「へのかっぱ」だとか、「おかっぱ頭」などとうっかり言えないほど、厳粛な信仰の対象となっていて、素朴な農村の人びとの手あつい祭りをうけていられる。

河童の特徴は、頭がおかっぱ頭であって、短い髪の頂点には、河童の命といわれるお皿がのっていて、その皿には水がたまり、子供の型をしていること、水中もしくは水辺に居住すること、人間——ことに人間の子供と相撲をとりたがること、馬や牛のような家畜をしばしば水中に引きこもうとする性質のあることや、水中に引き込んだ人間や家畜のお尻子玉ぬいてくうといわれていることなどである。

そのほか、河童の手は右手と左手の伸縮が自在であって右手を引込めて、左手を長くすることもできるし、その反対も自由であるとか、キウリを好んで

食べたがるとか、いろいろな属性が伝えられており、河童の手のミイラ、もしくは干もののようなものや、これが河童の正体だと称せられる干からびたものが、しばしば寺や神社の宝物のようになって残っている。もちろん、そんな得体の知れない動物が存在するわけでは、けっしてなく、もともとは、われわれの空想の産物にすぎないものであることは言うまでもない。

河童が一般民衆にもてはやされる人気者の一つであるばかりでなく、学界でもこれがまともに取り上げられ、独立した研究書さえ、二、三にとどまらない。

柳田國男先生の「山島民譚集」、石田英一郎さんの「河童駒引考」などがそれである。学者たちは、たんに河童が民衆に受けがいいバケモノだからといったようなふざけた理由から、これらを学問の研究対象として取り上げているのではなくて、日本人の信仰の歴史、生産生活に重要不可欠である水と、それをつかさどる水の神との間に、どんな交渉をもってきたのであったかを河童を媒体として、どこまできわめうるだろうかという試みである。また、アジア、ヨーロッパにまで資料をさぐって各民族に共通した要素はなんであり、民族による違いはどういうところにあるかなどを考証しようと試みているわけである。

むつかしいことは、しばらくおいて、われわれの生活のなかにおける河童は、たんに絵画に扱われ、随筆に登場する以外にも、いわゆる河童の傷薬とか、家伝薬とかいったふうな実際上の利益も多分にもたらしていたのであった。

河童信仰史における大きな問題の一つは、九州の筑後川の流域の人びとが信じているように、河童が冬になると山に入って山童となり、平地の民が農耕期に入ろうとする季節には、ふたたび、

山童から河童になると信じられてきたらしいことである。

いわでものことだが、そう信じている人たちが、いくら秋の末に川岸を泣きながら山に向って河童が移動する声をきき、その姿を見たとは言っても、実在の動物なのではない。それらは、いずれは風の音をきき違えたか、もしくは、目の幻にきりすぎないのであろうが、遠い昔からわれわれの先祖たちは、山を支配する山の神は、里人が水の恩敬に浴す必要がある時期になると里へ下って人間のために過不足なく水をもたらしてくれるものと信じてきたのである。

かっぱ仏（福岡市博多）

山神が水神に神格を変換し、かくして年ごとに人間界の生産生活を保証してくれる——そういう神を人間が信じて来たという証拠の一つとしてあげることができるわけである。

河童とは直接つながらなくとも、井戸神をまつり、河の流れを、いささかせきとめて物の洗い場に使う川戸のほとりに水神をまつり、もしくは天然の飲料水を補給してくれる泉に水神をまつっているのをみてもわかるように、命の水を供給もしくは使わしてくださ

る神を敬虔にまつっていることは、現在もなおつづいている。これを特定の神殿、ヤシロなどはなくとも、水の恩恵によってできた農作物の胡瓜・茄子・ウリなどの初物を、お初穂と称して橋の上から川の中に投じる――つまり水神様にお初穂をあげてからでなくては、人間がこれを口に入れることをはばかるような生活は、今だにつづいているのであって、農耕の神としての水神は、われわれの生産生活に、非常に重要なものであったことは説明するまでもない。

その山の神の使徒としては鬼、前鬼、後鬼だとか、狐だとか、狼だとかいろいろあるが、その山の神が、水の神になっている時期のおつかわしめのような存在としての河童が信仰の対象となることは、そう無理なことではなかった。それが水神信仰の衰えと同時に、次第に奇妙な性格と姿、形のいま行われている河童というものが、信仰とは次第に縁を薄くして、妖怪変化としての性格を濃くしてきたにすぎない。

ともかく、現在における河童の存在は、オカッパだとか、ふざけた河童祭などばかりになってしまって、あたかも眼前に実在しているかのごとき実感のこもったものではなくなってきつつある。

かつては、しばしば河童さわぎの伝えられた隅田川の水だって機械油や排水汚水で異臭をはなつどろどろ水になったのでは、もはや、あのなつかしき河童の姿などを、その川底に空想することはむつかしい。全国いたるところの河川がコンクリートや石畳の土手でかためられてしまったし、魚の住めぬほど薬品などの流れくるところでは河童も住みにくいだろうというようなこともあって、彼らの活躍する天地は、よくよくせばめられてきている。

河中の怪物　新潟県の佐渡ではこの河童のことをスイジン（水神）とよび、刈羽郡ではスイシンという名称のほかにシージン、ミヅシン、柏崎市ではシジン、頸城地方の海岸部ではスジンコという名称がカッパのことである。

このスジンコは水神の子の意味ではないかと柳田國男先生はいっている。このように越後地方に水神系統の語とミヅチ系統の二種が行われているのである。

しかもこのミヅシン、ミヅシ、メドチなどという言葉、すなわちミヅチから出ている名称がもっとも古い河童のよび方であって、ミヅチはすなわち「倭名類聚抄」な

河童のいろいろ

どに出ている水の神をさす日本語であった。ミヅチ系の名称は北海道アイヌのミンツチ、青森県三戸郡のメドチ、前にのべた越後のミヅシン、加賀の能登、近江のミヅシ、ずっと南端の鹿児島でも水ノ神をミヅシンとよんでいる。

この分布状態からみて、河童という名称の前には広くミヅチから出た言葉でよばれていたことが推定されてくるわけである。つまり河童は、少なくとも水ノ神のお使いまたは水神そのものであったことは、この名称の上だけから考えても断定できるのである。

もう一つの方、すなわち標準語扱いされているカッパ系の名称は、河童をカワノモノ（豊後玖珠郡）とか川の人、川の殿（飽託郡）旅の人、川太郎、ガッタロなどいずれも、この河中の怪物は畏敬すべきものであったために、直接にはよぶことをはばかって間接によぶための忌詞(いみことば)であって、カッパは川童(カワワラワ)を語原としている。

古書にもワタツミの神を「海童」「小童」という字で書いてあり、このカッパがれっきとした、もとは水の神の子孫であったことは疑う余地がない。日本人の昔の信仰には、神様がよくこうした小さい子供のような形で出現されるものだという一種の信仰形式であったことは、現在でもいろいろな零落した信仰としてその証拠を残している。

言葉の上だけでなく、その上なお有力にカッパが水ノ神であったことを示している証拠は、直接に河童を水神として祀っている地方が各地に存在することである。

和歌山県伊都郡信太村で六月の晦日に行うガタロ祭、徳島県長岡郡や九州五島の川祭、岡山県井原町のカハコ祭など、いずれもカッパを祀り、水の恩恵を感謝し、水害を防ぐための水神祭りを行っている。

もう一つ、カッパで注目されることは、すでに、かんたんにのべたようにこうした水の神としてのカッパが、山の信仰と強く結びついている一面のあることとである。

九州の五島の山オロは山中の怪物で、山で木を伐る音をさせたりするが、これが川の中にいて、水の音をさせることもあり、しかも同地では、川太郎も山オロも共に人間の赤子に似た小さな動物だといっている。

もっと、はっきりしている例は、肥後、豊後の各地で、カッパは夏は川に住み、冬になると山へ登って山ン太郎とか山ワロ、セコとよばれるものになるといい、日向の西米良(ニシメラ)でも一日のうちで暁方には山から川へ下り、夕方になると川から山へ帰るとか、一〇月、一一月の冬近くなるとこの河童は山へ入り、セコというものになって木を倒し、岩を崩す音を立てたり、山小屋をゆすったりするという。

なお、この西米良では、水神も竜神も山神も皆一つのものだとも信じられて説明は不要の観がある。大隅の白引のスジンドンとよばれる水神様は、ヒョウヒョウと鳴きながら二月八日の春彼岸に地面や空を通って川に降り、秋は山に帰るといい、その山に帰ったスジンドンあるいはザラッパとよばれるカッパをワロドンまたはオヂドンとよんでいる。

つまり、もともと同じ一つのものが、季節とか日中とか夜によって山と川の双方を定期的に往復して、おのおのの場所で別なものとしての機能を発揮するものであることがわかるわけである。そのどちらも近ごろではバケモノ扱いされるようにはなったが、元来はもっとも畏敬されていた

山の神であり、水の神であったことは、間違いないところである。

水の神の信仰は、今では川の神がみとか、井戸の神、湧水のオスズ神とか、または淵や海底の竜宮、沼の底の主とかいうようにいろいろに分れてきている。これは人間の生活がだんだん複雑化してきたために、次第に分れてきたもので、もとは海の神も流れの神もまたわれわれに井戸から水を供給する神も、古くは一つの水の神であったと考えられる。

日本人はことに禍福ともに水の影響を非常に多く受けてきた民族である。山の神との仲介としての狼や狐と同じように、河童もまた、こうした水の神と人間の間を結ぶ、すぐれた神聖な仲介者であったと認めざるをえないのである。

それが信仰の衰えるに従い、また信仰の対象がこまかく分れて独立したような形になってきたために、かつはまた、それが日本信仰に伝統的な小童の形であったために、いたずらに胡瓜や桃を好み、大した加護恩恵も人間には与えずに、馬を引きこみ角力をいどんだり、尻子玉をぬこう

ケンピキ太郎詫び証文（大分）

とばかりする下等なる妖怪変化めいたものとなってきたのである。

川に棲むバケモノにはもう一つ「川天狗」「磯天狗」というものがある。静岡県の川天狗は水辺に住んで魚を好み、怪火（アヤシビ）を発し、三河の佐久島、紀州須賀利の磯天狗はいたずらばかりして、やはり、怪火をみせるといい、関東の秩父地方の川天狗は川の中にいると信じられている。

また、高知県の芝天狗というのは、川の堤などに出て角力をいどむのが好きで、河童との共通を思わせるが、これが祖谷山（いやま）では山中の怪として、木を伐る音や、倒す音をさせるといわれ、やはり山の神と水の神との因縁のあとを示しているのである。

ゴヒンサマというのは越後でもいわれ（三面布部）天狗の異名とされていて、広く信じられている。

海の妖怪　河童の話ばかりしてしまったので、海のバケモノの方はかんたんに紹介するだけにしなければならなくなったが、海のバケモノは、海上および海中、海辺に分けることができる。海上の方では、幻の船影となって現われるもの、あやしい火を見せるもの、それに船にとりついたり、海上に出没する怪物の三種ぐらいに分類される。

船のように見えて、実際の船でないものには、地方によってヨイヨイ船、迷い船、亡者船、船幽霊、シキ幽霊、灘（なだ）幽霊、ヨバシリなどいろいろによばれている。

海上の火にはムラサ、シチ、ヒケ、シキ、マヨイなど。船にとりついたりするものでは、ソコ

幽霊、船幽霊、イナダ貸セ、ウシオニ、ノウマ、フナシトギなどのほか、海坊主とか人魚とか、海姫、海女などというものがある。

また海岸に限って現われるものには磯女、磯姫などがあり、ヌレオンナというのは産女と同じような性格をもった女のバケモノである。

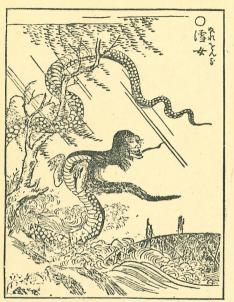
そのほか、高知でジャンとよばれるのは、海上でジャンジャンという音をさせるもので、こんな時は魚がないと信じられている。

名称ばかり並べるのは、やはり興味の索然たるものがあるので、各地に伝わる名高い怪談をほんの少し紹介してみよう。

これは宮本常一さんが昭和一五年に直接聞いた話である(屋久島民俗誌)。

烏賊をとりに行った帰りに、田尻のエビス様を祀ってある高瀬の下に船をつないで、陸を歩いて帰ろうと思ってなにげなく海の方を見ると、下げ髪の女が波打際に立っている。夕方だった。その女がニヤッと笑ったのがなんとも言えぬ凄さだった。何者かと思ってにらみつけたが、その姿は消えない。あたりを見ると硝子箱(海底をのぞく鏡)があったので力の限り投げつけたら女の姿は消えてしまった。それからずっと女がついて来ているような気がしてならないので、持っていた竿を振りまわしながら帰ってきた……。

海の怪談、海のバケモノというと、人魚、海坊主のたぐいをすぐに連想するのだが、実際に日本の漁村を歩いて「海の不思議」を聞いてみると、人魚の話などはあまりでてこないで、海で遭

難した人間の浮かばれない魂に関するものが圧倒的に多い。書物を愛し珍らしい変った話を好む都会人の要求と、実際に海に生きる人びとの経験談との間には、すでにかなりのへだたりができていることがわかるのである。

濡れ女（北陸地方の河辺に出るという）

幽霊にしても、柳の下にションボリと赤子を抱いて立つウブメにしても、威勢のよい男性よりは、やはり女性の方がすごみは濃いようだが、日本の海にもしばしば幻の女性は活躍していたようである。濡れ女、濡れ嫁女、海姫、磯女、トモカツキなどとよばれる女性たちは、いずれもこの世の者ではなかった。

濡れ女・磯姫・共潜き　五島列島の北端宇久島（長崎県）の磯女は、いつも磯にいて乳から上が人間、下の方は幽霊ように流れているといわれ、船をおそうそうである。九州の海岸にはほうぼうにこの女のバケモノの話があり、島原半島の小浜あたりでは他所の港に碇泊して寝る際には苫の毛を三本着物の上に乗せておく。こうしておけば磯女に生血を吸われないと信じられている。

人間とみれば生血を吸う魔女を、長島（鹿児島県）では磯姫とよんでいるが、これは美しい女の姿はしているものの、たとえ急いで顔をそむけたりしても、すぐ死んでしまうほど恐ろしいもので、だから知らぬ土地に泊る時にはイカリだけを投げて友綱をとらずにおく（フリガカリ）ものだと言われている。

佐賀県加唐島の鷹の巣で、唐房船が友綱をあげようとすると、磯女が出てきて、無塩の魚をくれという。船人は大いに驚いたが磯女のすきをみて友綱を断ち切って逃げ帰った。磯女は大いに恨んだが船が出てしまったから何ともしようがなかった。それで唐房船は今でも友綱をとらぬのだ……

という話を隣りの小川島で聞いた桜田勝徳さんが「してみると磯女は泳げぬのかもしれない」といっているのは皮肉である（漁村民俗誌）。

だが、同じ九州の海の魔女でも、大島（福岡県）の海女は、海上を歩けるらしく、漁民たちはその姿をときどき見ることがあったという。この筑前北海岸の海女たちは、出雲の外海で知られている「海女房」たちのように人間に害するものか、どうかは未だ確められていない。

罪の深いのは島根県海岸の「濡れ女」である。これは大体釣れのよいときに多いそうだが、産

女のように赤児を抱いて現われ、人にあえばこれを抱かせて海に入るが、赤児は吸い付いて離れず、次第に石に化けてがまんできぬほど重くなる。だから、この濡れ女の赤児を預るには、かならず手袋をはめてから抱かねばならないとされているという。

また志摩の蜑女たちにとっても恐しい同性の魔モノがあった。岩田準一氏が「昔の蜑女はしばしばこれに遭遇したそうだが、現在とても昔語りとなってはおらぬ……」と伝えてから（志摩の蜑女作業の今昔）もう二〇年もたつので最近の様子はわからないけれども、「共潜き」は志州各地の蜑女が、主として曇天の日に水底でよく見る自分と同じような姿の魔性である。

蜑女が海深く潜って行くと、自分と同じ服装をしたもう一人の蜑女が海底を這ってニヤリと笑う。時には鮑をくれてよこしたり、あるいは手を引いて暗い中へさそいこもうとする。上へ浮きあがってあたりを見回しても、自分の船以外には一そうも蜑船は見えない。不思議に思ってまた潜ってみると、やはり同じ場所にいる。これを正真の蜑女と心得て鮑をもらったり誘い込まれて行ったりすると、潜水時間が延びてしまって窒息しなければならなかった。トモカヅキだと知ってても先方が鮑などをくれてよこした場合には、背後へ両手を回して後向きのままでもらってくれれば安全だ……。

トモカヅキを見た蜑女は以後決して海潜をせぬのみならず、二、三日はその話を聞いた隣村までも、この蜑女のために「日待ち」をする。トメドもまた舟からこのありさまを見ることがあるという。これを防ぐためにかならず鉢巻などに「魔よけ」あるいは「魔おどし」と称するしるしをつける……。

形はドンクォに似て腹の白く、両側に四肢あり船に吸いついて船を止め、あるいは綱を伝うて船内に入り人間を喰う壱岐ノ島海上の怪魚フナシドキ。海に投影した船夫の影を呑んで、その船夫を死にいたらしめる島根県温泉津(ゆのつ)のカゲワニ。蛇のような形で際限もなく船べりを越えて行き、末にはその油がこき溜って船を沈める金華山沖のジンベイサマ、佐渡のタテエボシやウミカブロなど海の怪物は少なくないが、一般にはほとんど知られていないバケモノに、前出の石州温泉津(ゆのつ)湾(わん)のウシオニがある（山崎里雨氏の聞書）。

大浜村字波路浦の大下家では組下の漁師三人とともに旧暦四月のある夜、鯖釣(さばつり)に出かけ湾外一里ばかり、岸から一町ほどの所で豊漁を続けていた。そこは二、三度釣ったことのある彼らだけが知っている好漁場だった。夜もいたく更けた頃、岸の方から「行こうか」と声をかけるものがある。四人はひとしくある不安を予感した。というのは、この辺は高瀬山の末端が、約三〇メートルもの断崖をなして海に臨むところで、人の行き得る場所ではなかったからである。

しかし時たま狐がこうしたいたずらをすることがあるので、狐が魚ほしさのいたずらだろうと思いなおしたから「オウ、きたけりゃ来いや……」と、からかい半分に答えた。

返事に応じて何かが海中におどりこんだ。瞬後、夜光虫の光る波を蹴って舟に泳ぎつかんとしているものが、牛鬼(うしおに)であることを漁火のうす明かりで透し見た一同は、愕然色を失った。四挺櫓の小舟と牛鬼の競泳は波路蒲まで小一里も続けられ、汀(なぎさ)にもっとも近い大下の家へ飛込んだ四人は精根つきてへたばってしまった。外では押入らんとする牛鬼の暴れ狂う怒号が

聞え、大戸は今にも蹴破られそう……。

だが気丈な妻女の焼火箸に目をつかれ、出雲大社の護符があったので牛鬼は凄惨な咆哮を残して逃げ去った……。

土佐のジャン、肥前江ノ島のイシナゲンジョなど海の怪音。喜界島のシチ、長門のヒケ、牡鹿女川の亡霊火、筑前のヒーベエモン、隠岐ノ島のムラサなどの怪火。芝天狗、川天狗、河童、海小僧、布団被せ、七本蛸など、海の怪もまた多種多様だが、いずれにしても元来は敬虔なる水神信仰から出て零落したものというべく、人口に膾炙している船幽霊系の経験は、不運なる死者の霊魂の顕現にほかならなかった。

海上に限らず妖怪変化の類が人間の目のまぼろし、耳の迷いであることには、今では一人も異存はないのだが、問題はわれわれ同胞無数のこの種の幻覚、幻聴の経験にもおのずからなる類型と、変遷の跡がみられ、それがしかも日常実生活の変遷と、表裏一体をなしていることにあるのである。

竜宮と人魚　考えてみると、われわれの生活の中には、たんに、ほおえましいなどとはいっていられないほど楽しくも心の豊かなゆとりのいくつかを発見することができる。

「怪談」を題とする本書などで、こんなことを言うのは、見当外れのそしりをうけるおそれは十分だが、毎年のように海水浴の時期になると、あっちこっちの海岸に建てられる竜宮城の雛型みたいなものだってその一つで、水族館などには常設している所さえあるくらいである。

それが海神信仰の名残りにせよ、民間文芸の土着であるにせよ、そんな考証はともかくとして、あの海水の底に、あのような美々しい宮居があって、そこに魚が本性である美姫が何百、何千と住んでいる……そこへ浦島太郎が招かれて……といった空想を、この世のものとして楽しむ日本人の暮しぶりの一端は、心にくいほど、余裕のあるものではあるまいか。

しかしながら、ただに模型にとどまらず、わが国土のうちには、今なお遠く海洋の底に通じているという抜穴をそなえた塚（埼玉県秩父郡氷雨塚）さえあり、竜宮が川底にあると語り伝える群馬県佐波郡岩郷村には、竜宮をもって名とする部落が現実にあって、そこには竜宮神社が祀られている。

竜宮さまとよばれる海神を信仰する福岡、鳥取、和歌山諸郡では年ごとに盛大な竜宮祭を重おもしく執行するなど、現代日本人における竜宮は、面白おかしい架空なるおとぎ話といってしまえない存在なのだともいえるのだが、そこに住むという乙姫のもとは、やはり山に山姥や山姫を想像したごとく丈なす黒髪の水中にたゆたう神秘の女性を海にも空想したのではなかったろうか。

乙姫からの連想は、すぐに人魚にのびて行くであろう。

ちょうど河童の手の干物と同じように、人魚のミイラと称する一物は、静岡県富士宮市、新潟県柏崎市などに伝えられている。どうで水の仙女、妖精としての人魚などが実際に生きているわけはないのだから、ミイラがあろうと、アルコール漬があろうと、ほかのものにはちがいない。

諸外国にも半魚人の話はたくさんあり、おとなりの中国でも早くから信じられていたという。わが国の記録では推古朝以来だが、面白いのはコロンブスもアメリカ海岸でこれを実見し、アレ

キサンダー・デューマーもオランダで人魚の見世物を見たと書いているという。

アザラシやオットセイ、アシカ、セイウチなどの誤認、神秘化したと考えるよりも、もっと人魚に似ているのはジュゴンだといわれていて、南洋パラウ島の土人たちは、このジュゴンを人魚という意味の言葉マスキウとよんでいるそうである。

アフリカでマナタス（海牛）というのもこのジュゴンに似ているそうで、ともかくもこの海に住む魚ならぬケダモノの雌は、二・五メートルぐらいの体に二つの乳房をもち、授乳するときは、その子をヒレでだきかかえ、波上に頭を出すというから、なるほど人魚に見まがうだろうことは想像できそうである。

わが国で、この人魚が問題だったのは、じつのところは、もののめずらしさというよ

佐渡から現われた人魚のミイラと称せられていたもの
（柏崎市鯨波の妙智寺にもこれと同様なのがある）

りは、どうやらその肉が不老長寿の薬だったためらしく、史上有名な八百比立尼(はっぴゃくびくに)は、人魚の肉を食ったために、八百年もの長寿を保ったのだと伝えられている。

日本の伝説には、深い滝壺の底に、美しいお姫さまが水中の機を織る姿を伝えたものが少くないし、今におき沼や川中から常ならず巨大な魚が獲れたりすると、みんなが多少の不気味さを感じ、これを「沼の主(ぬし)」「川の主」として、せっかくの獲物を神社の池に移しはなしたり、もとの場所へ帰したりしている。水中に住む主(ぬし)の存在はすなわち、人魚、乙姫、主のすむべき住居につながる水ノ神信仰の名残りにほかならない。

蛇の子孫、鬼の子孫のみならず、わが国には人魚の子孫をもって一家の誇りとする宮古島の仲曽根家のような家もあったのである。

Ⅳ 神がみの零落と霊魂信仰

一、あの世とこの世と

日本人の天国　天国という言葉は、一般には縁が薄く、日本人でも、キリスト数を信じている人たちのほかは、行けない所であると思われている。しかしながら、われわれの周囲を見わたしてみると、人間の肉体には魂があり、その魂が安定して成仏すると考えられたり、死んだ人の魂をこの世に招待するというお盆の年中行事が繰り返されるなど、非常に多くの魂がある。

では、いったいお盆の時に、この世に招かれたりするその魂は、どこからくるのであろうか。また、肉体の死んだあとの魂は、いったいどこへ行くのだろうか。その魂の行きつく所を、日本では、普通「あの世」——天国でもある——とよんでいる。「後生」というのもそれである。

日本ほど、多くの墓地が、全国津々浦々に散在するところはあるまいと思う。どんな貧しい人でも、家族が死ねばその一人ひとり、戒名を石に刻みつけて石碑を建てようとする。このような状態がしばらく続くと、日本全土が墓地によって占領されてしまうのではないか、と心配するむきもあるくらいである。でも、どうやらその傾向は薄らぎ、一基の墓碑をもって「××家累代之墓」としたり、共同墓地とするやりかたがふえてきたのは幸といえよう。

ところで、これらの石碑の下にある室に骨壺をならべ、その場所を魂のありかと感ずる人が多くなってきた。肉体が亡んで、火葬にしたり土葬にしたまま、しだいに朽ちていく肉体に、なお、

死後の魂が宿っているように感ずる人が多くなったのは、死のけがれに対する感覚が稀薄になったことや、一般的な合理的解釈のためなのであろう。お盆様が墓地からおいでになると解釈するのも、顕幽思想の変遷にほかならない。

しかし、古風な暮し方のなかでは、死のけがれというものは極端に忌み嫌われていた。この世の人には、なんとでもして死のけがれがつかないように、厳重なるモノイミなり、タブーの生活がつづけられるのであって、そのために墓の設け方にしても、野辺送りをして亡骸を葬った所とは別に、お参りするためだけの墓地を作る習慣があり、今でもかなり残っている。埋墓へ詣るのは、ある時期だけで、それ以後は別の所に詣るとか、両方ともおがむ地方もある。

こんなのを両墓制と呼んでいるが、徳島県あたりでは、死骸を吉野川流域付近の断崖絶壁の上から投げおろして帰ってくるという。そして、参拝用の詣り墓なるものをつくり、死んだ人の冥福を祈るのである。

では、投げ捨てられた死体はどうなるのか。村人の話によると、年に何度かある洪水のためにきれいに洗い流されてしまうとのことだった。つまり、死のけがれをもつ亡骸はなるべく早くわからなくしてしまって、この世の人の生活から遠ざけてしまおうという考えなのである。

なにも徳島県の例だけにかぎらず、海岸の砂浜などへ亡骸を埋め、まるい小石をのせておくだけという所も多い。五年、十年たつかたたないうちに、風や波にけずられて消えてしまう。誰でも知っている風葬とか、水葬とか、もっとも簡単な土葬もあるというように、われわれの生活にあっては、死骸をそれほどていねいに葬むる習慣はなかったのである。そして、死体とその魂が

一体として考えられるようになったのは、ごく最近のことといえよう。●

そこで、お盆の精霊様を墓地から迎えるというのも、比較的新しいことは当然である。盆迎え行事の一つ、盆道作りというものを調べてみると、村境や山のいただきに通ずる道を盆道としてお盆前に雑草をとり、村中共同できれいにする習慣のある村が各地で＊

あの世………(1)

＊みられ、あの世の在所への暗示を与えている。

天国はいずこ つまり、精霊様が通る道だと信じられていることは、その道の行きつくところ、その一番奥のむこうに盆の精霊様たちが住んでいなさると信じているからだ、と言わざるをえない。

だから、人家のとだえた人跡未踏の山の奥、というよりは、行き来のできそうな里近い山で、

しかもふだんは、けがれた行為のつつしまれる清浄な場所……そこが日本人にとっての天国・あの世と信じられていたに違いないと思われるのである。

里に住む子孫たちが、日頃生活しているふもとの部落を見おろすことのできるような、小高い山の頂も、また、天国であるらしい。つまりわれわれの祖先の魂は、死後までもなお、子孫の幸福をねがい、たゆみない生産生活を見守って、すこしでもより多くの幸福を招来させようと努力しておられる——と子孫である現世のわれわれが信じていたと思われる資料が、今日なお多く残留しているのである。

あの世……(2)

また、仏教でいう地獄・極楽、キリスト教でいう天国の思想が普及してくるにしたがって、もう一つ、天国は、雲の上にあると信じられていた。いったい、どれほどの高さかは判然とはしないにしても、おそらく電離層などの上では高すぎようし、亜成層圏もしくは、その下ぐらいとみれば、だいたいのキロ数も出ようというものだが、つまりわれわれ下界の者が、空を見上げて、なにか神秘的な感

じを持たせられるような条件にあるぐらいの高さあたりが中空(なかぞら)の他界——天国と信じられているのではあるまいか。

天国、地獄というその地獄のほうは、だんだんと地極・極楽の絵解きだとか、宗教家の伝道などによって、おそろしいばかりの、ものすごい地下の国、難行、苦行をしいられる所であるかのような知識が普及してきて「この世ながらの生き地獄」とか「地獄をのぞくような」といった言葉が日常の用語に散見する。

そこには冷酷無慈悲な鬼がいて、血の池地獄、針の山といったふうな、どう考えたって子女の教育には、どうかと思われるような話ばかりが伝えられてきた。

嘘言をつくと舌をぬく閻魔大王などは幼児でも知っているけれども、それは仏教徒の、教化を期待するあまりに誇張せられ、極楽もしくは、御仏の国のありがたさを強調するためのところでしかなかった。

日本民族における、外来宗教以前からのもう一つのあの世に、はるか海の沖合い、海の彼岸(常世(とこよ))があるが、同じ日本人の他界観念とはいっても海のかなたのあの世という思想は、直接にわれわれの死後の魂が行きつく所というよりは、威力ある外来神、常世神の世界と信じられているようである。

天国のあり場所が、山の頂であるか、中空であるか(中空他界観)その相互関係、どちらの考えかたがより早く支配したかなどは大きな、そして根本的な問題につながる。

が、ともかくも現実の見聞でいえば、小、中学校の児童、生徒で、宗教的な洗礼をうけていいそ

うもないのに、雲のたたずまいや、夕やけなどを見て、亡き母をよんだという作文をしばしば見かけるし、「亡くなったお父さんやお母さんは、あそこにいるんだよ」と、幼な心に言われてきたからばかりだとも思えない。同じ中空他界観が、日本だけにかぎらないらしい事実を考えあわせると、ただちに後天的知識とばかりは言えないようである。

ともかくも、言うなれば先祖教とでも名づくべきわれわれの祖霊信仰は、集団宗教として経典などの文字記録とはならなかったために、時とともに移り変ってはきたけれども、死後の世界をうかがわしめる大きな特徴としては、すくなくとも、つぎの四つをあげることができる(先祖の話)。

(一) 死後の霊が、この国土にとどまって、遠くへは行かないと思っていたこと。

(二) 顕幽二界——あの世とこの世——の交通が頻繁で、たんに春秋の定期の祭だけでなしに、いずれか一方の心ざしによって、招き招かれることが、そう困難でないように思っていたこと。

(三) 人生の今はのときの念願が、死後にはかならず達成するものと思っていたこと。

(四) この信条にもとづいて子孫のためにいろいろの計画をたてたばかりか、ふたたび三たび生まれかわって、同じ事業を継続できるように思っていた人の多かったこと。

この世では添いとげられぬからといって相対死する例は、いまなおいくらでもあるが、文字どおり「天国に結ぶ恋」を信じればこその所業にちがいあるまい。

いまならばもう、若い読者にもすなおな気持で受けとれるであろうが、戦歿の英霊たちにして

も、「七生報国」を念じて散った尊い愛国者たちが多かった。

　顕幽二界の交通の頻繁なことの実例は、本書には、盛りたくさんなほども紹介されているわけだが、自主的な霊の発現のみならず、たとえば生口（いきくち）・死口（しにくち）を降ろすというイチコ、ワカ、ミコたちの降霊術によって、この世に残された人たちにあの世での消息を伝えるような経験は、東京の中にだって現在なお繰りかえされている。

　手段をもってよべば、すなわち要求によってその意志を伝えてくれるのが、われわれの霊魂のありようなのであった。

　もっと愉快なる現世での経験は、眼前に生きている人の口を通して、その経験したあの世なるものの様子の聞けることである。

　われわれが、もっとも現実的に、あの世の消息を聞くことができるのは、何も幽霊の告白や会話だとか巫女の口を通してだけでなく、一度は死んで、ある時間が経過した後に蘇生した人たちの経験談なるものがある。

　それらの生き返った人たちに質問して聞くことのできるあの世の消息というものを集めて比較検討してみると、現在ではほとんど言い合わせたように、暗い所から向うに明かるい所が見られる所を通って行ったとか、あるいは川の橋の向うで知人が早くこいと招いている、そこへだんだん近づいて行くと、向うには美しい花がたくさん咲いていたとか、気持のいい音楽が聞えてきたが、橋の途中まで行って渡ろうとしたら、急に大きな声で名前を呼ばれたので、ふり返って生き返って来た……というように、ほぼ共通してお寺の説教で聞かれるところの、いわゆる弥陀の浄

土とか、蓮のうてなというような、あの世での模様などである。やはり、われわれが生前、その人、その人が生きている間にえた知識、あの世に対して、西方極楽浄土といわれる内容の消息が、そのまま一度死んだ後の記憶として語られていることは、このかぎりにおいてはいえるわけであるから、同じような筆法で類推すれば、当然のことながら、生前に持っている知識が違えば天国のありようも違ってくるといって間違いはないわけである。

天国への階段

　このように、あの世を見ることができた幸福な人びとは、日本全国ではずいぶんとたくさんいるに違いないが、それでは、あの世へ次第次第に近づいて行ったと語られる魂はいったい、われわれの

天国への架け橋
鎮守様に祈る祖母とその孫
（福島県耶麻郡中の沢にて）

肉体からどのような経路をたどって、行くのであろうか。このことについては、別にややくわしく紹介するつもりであるが、「見て来たあの世」がこのように仏法臭一点ばりというのにも問題はあり、かつはまた、これを現実に信じられ、行われている民俗資料の一つとしての、魂が肉体から遊離してゆく臨終から死の直前、直後に行われるタマヨバイなども、考えあわせると、固有信仰と仏教との関連、同じ霊魂観についての混同矛盾している事実を知ることができよう。

魂よばいの作法にも、地方によっていくらかずつのちがいはあるが、ともかくも最期の息を引きとるとき、心臓がとまると同時に、魂が肉体から抜けてゆくと信じるのが合理的な解釈だから、この時に魂が遠くへ行ってしまわないうちに呼びもどして、もう一度、肉体の中に入れれば生き返ると信じるのは道理である。それだから魂よばいをする地方ではなくても病人が臨終になると、魂よばいということを、いまではもう意識はしないけれども近親者はしきりに大きな声で、その人の名前をよぶのである。名前をよぶことによって魂の遊離が防がれたり、よび戻されたりすると信じていたことについては、なお、いくつかの例証と説明が必要なのだが、ともかく魂よびの方法の一つをあげると、たとえば屋根の上に登って中空に両手を差しのべ、オーイ、オーイとか、誰ヤーイというようによぶのだという。

そうして、そういう手段をこうじてなお、生き返らない場合にはじめて魂の遊離してしまったこと、すなわち「不帰の客」となったことが確認されるのである。

二、生霊と精霊

生きている魂　死んだ人の魂をまつることは、ちっとも不自然ではなく、誰も不思議とは思わないが、今でも、生見玉といって健在でいる里の親のところへ、他家に嫁いだ娘が、お米や小麦粉を持って帰り、これでお盆のご馳走をつくって、親たちにたべさせる習慣（埼玉県入間郡）が残っていて、これを生盆といっている。これは、生きている人にも魂の存在を認めていることの、よい例である。

今のわれわれの考えかたからすれば、健在でいる家族、肉身への、たんなる義理とか礼儀だと解釈してしまいがちである。しかし、昔の人にとっては、たとえ生きている人にでも、魂のあるものに対してはその魂の所業を恐れ、なぐさめるのが自然だった。

生きている魂のもっとも恐れられるのは、生霊のたたりという現象である。たとえば、一般に知られていることに、非常に恨みのある人を相手として、誰れにも知られぬために、真夜中、神社の大木に藁人形をはりつけ五寸釘をのろいの言葉とともに打ち込むと、相手がのろい殺されるか、病気にされるという丑の刻詣りがある。今ではもうこんなことは、よほど執念深く、かつ古風な考え方の人でもなければやらないであろうが、地方の新聞を見ていると、一年に何度か、もしくは何年に一度ぐらいのわりでこのまじないのあとが発見されて、村のさわぎになったという

巫女の口よせ

記事が、出ているから、まるでなくなってしまったのでないことがわかる。

　こののろいとはうらはらに、われわれの先祖たちの魂は、ふつうは見えない存在ではありながら子孫の幸福を常にねがい、それが実現するように見守っていてくれる身近なものだと信じている。なにか特定な宗教にこりかたまっている子孫でなくとも、ホトケの命日には供物をするとか、親の祥月命日の朝食だけには精進料理をたべるとか、何か変り物を作って、その日を記念し、他の日と違った生活をするのである。

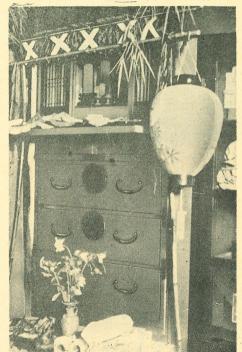
　いわば、これは、古風なものいみの生活の現代版であろう。東京のようなモダンな生活をしている人の多いと思われる大都会の中でも、一軒一軒の家をのぞいてみると、神もホトケもないような若夫婦だったのが、いつのまにか中年をすぎると、りっぱな仏壇をあつ

らえる。まるで無信心な人でも、時どき、珍らしい物が手に入ると仏壇に供えてみたり、変り物を作ると、ひよっと思い出してはホトケの前に供えたりしているのを、よく見かける。

　これが宗教の強弱とは関係なく、一般に醇風美俗と考えられ、もしくは格式の高い家、しっかりした家、家風のよい家と見られるのがいまなお社会通念となっているのは、伝統である。

　このごろの盆というと、デパートや一般商店の中元大売出しが非常に盛んになったために、交際礼儀の上で中元をもらったり、人にとどけたりすることが盆行事の中心のようになってきつつあるが、その根本は、やはり「盆と正月」と一口にいわれるように、年ごとの折目折目に、祖先の霊を迎え祭って、幸福を祈願し約束し合うという敬虔なる信仰行事なのである。

死後の魂と盆行事　今では、お正月と盆というものは、一方がカレンダーの年の境であり、一方はたんなる仏教行事の盂蘭盆那という言葉から移った法要にすぎないように思っている人ばかりが多いけれども、盆という言葉も盂蘭盆那という言葉から日本語に転化したというよりは、むしろ、祖霊をまつる道具から移った名称と見る方が穏当であって、現実に正月に祖霊を祭っている地方もすくなくはない。古い時代の盆と正月はつまり、今の一年を、二度に境をつけていたのではないかと見られ、年の境に祖霊をまつる二度の機会だったと思われる。

　われわれの死後の霊魂というものは、時間がたつにつれて、だんだん生々しい死のけがれから清まわった魂になって行くと信じられていたようで、祭り方としては、初七日、ふた七日、三七日、四十九日といったふうに、だんだんと一定の時間をおいて祭るのだが、ホトケと呼ばれる性

格と、神と呼ばれる性格の境界は早ければ三十三年目の三十三回忌あるいは五十回忌、つまり死後三十三年なり五十年ぐらいたてば、ほぼ時の流れにともなう清まわりによって、神に近くなり、それにともなって一人一人のホトケの性格の代表のような位牌もなくなって、先祖神という大きなグループの中にとけ込んでしまって、とむらいあげ、三十三回忌、五十回忌などの一定のくぎりによってホトケから神の資格にかわってくるのが全国一般である。

死後の魂の定期のまつり（盆棚）

それが地方によっての早い遅いはあるが、いずれ時がたつにしたがって祖先神の中に加わってしまい、一人一人の性格が解消されてしまうということは、固有の神ホトケを考える上に重要なことである。

お盆の祭り方を見ても新盆（にいぼん）といって、この一年の間に亡くなったホトケの魂だけは特別にぎやかに美々しく祭られはするが、古くなればなるほど、一まとめになってしまって、一人一人の性格の印象はうすれてゆく。

ともかくも、日本人の死後の霊魂は、このように、少くとも一年に一度は、子孫によって、この世に招待されてご馳走を供えられ、また灯籠流しとか、送り火によって、あの世へと、ていねいに送り返してもらうことができるわけである。

迎盆や送盆などに、お精霊様にむかってのべるあいさつの言葉を、橋浦泰雄氏の「月ごとの祭」によって紹介すると、東京都下では十三日の宵盆の夕方、一家の者が門前に集ってワラ火をたき、

　ぼんさま、ぼんさま、お迎え申す。

と大声でさけび、それから子供が、その火を持って墓に駆けて行き、またそこでも火をたいて、同じことをとなえる。

長野でも夜に入ってから墓地と家の門前で迎火をたき、そのとき、男女の子供らが口ぐちに、

　じいさん、ばあさん、このあかりで、おでやあれ、おでやあれ、おでやあれ。

と、となえ、また送盆のときには送火をたいて、

　じいさん、ばあさん、このあかりで、おけえりやあれ、おけえりやあれ。

とお送りする。秋田県河辺郡では迎火のことをコナガリといっているが、この地方の子供たちは、火をたきながら、

コナガリ、コナガリ
じっちゃも、ばっちゃも、みな来い、みな来い。

また同じ県の横手地方では、このときに、

この火のあかりで、おじゃれ、おじゃれ

というから、河辺地方のコナガリは、「このあかり」の意味であることがわかる。同じ系統のとなえごとは千葉県でもいわれ、

おんじい、おんばあ
このあかりに
お茶のみに、おいでなしてください。

このほか東北各地、長野、鳥取などでも同じように「この盆火を目じるしに……」と、となえているほか、秋田市では、

おんじいな、おんばあな
馬に乗って、ベココ（牛）に乗って
来とうらえ、来とうらえ。

と、となえたという。

このような精霊様を迎え送るときの唱え言も地方によってさまざまだが、それらを見ると仏教

とか、あるいは特定の宗派宗教に直接に関係なしに、いかにわれわれ日本人が、死後の魂というものを通して、肉身を祭るのに、近親感をもち、生前のままの愛情をもって遇しているかが、身にしみて感じられる。

成仏しきれぬ魂　これらの盆行事にさいして見られるお正客としての魂に共通した要素の一つは、これらの霊魂は、黄泉（よみじ）のさわりがなく、つまりこの世に思い残すことがなく、仏教ふうにいえば成仏している霊魂だということである。何か成仏しきれないものをもったまま死んでしまった霊魂というものは、この世に残された子孫にとっては、非常に気がかりな困る存在である。だから生身のわれわれから解釈すれば、たえず精神的な不安を伴っているわけで、古くからの信仰に基づいて、そういう、つまり子孫、残された肉親からみれば成仏しきれないのではなかったかと思われる

恒例の浅草観音の灯ろう流しで，ふたたびあの世に送られる精霊様（東京隅田川，1955・8・1）

霊魂は、何かの形で、その成仏しきれなかったことを、的確に知ることができない現世の人たちに伝えるに違いないという期待がもたれているわけである。

そこに仏教徒のいう供養のたりなさとか、供養をせよという要求の受け入れられる下地があるのだが、それはまた同時に、いわゆる幽霊の出現する条件ともなっているわけである。

妖怪変化には定着性があって、けっしてやたらには出現しないのに、幽霊の方が、時間や空間を超越しているといわれるのは、じつは、こういう現世の人たちの要求や期待が、それを裏づけているからであろう。

つまり物質的な存在としての幽霊が消えたり、出たりするのではなくて、あのような死に方をした人の霊魂は、かならずや冥途のさわりがあって成仏しきれずに、何かの形でこの世の人に供養を要求したり、もしくは、言い残したり、伝え残したことを伝えようとして出て来るに違いないという気持でいるからして、その人が遠くへ旅行しようが、あるいは巫女が託宣によって、病気や異常なことのおこったものは、何代前の何々のさわりだなどといわれても、うなづけるのである。

三、祖霊と八百万（やおよろず）の神がみ

八百万の正体　亡くなった親たちの霊魂が、とむらい上げによってホトケから神へと、その資

格が転換されるということはのべた。そこで、別な角度から日本の神様たちのことを考えてみると、祖霊が神になったものと、いわゆる高神様（たかがみ）との関係が明らかになると思う。

ひとくちに、八百万の神がみといって、日本ではあらゆるものを神様としてうけとり、祭っていると言われる。この点だけをみると、まるで文明の発達がおくれていて、もろもろの天然現象などを神の仕わざとする未開、野蛮な南洋土人と同一視されがちである。しかしながら、日本の神がみの場合は一つ一つの機能によって神の資格を与え、解釈されてきたわけで、根本的には一神性のものといえよう。

八百万の神といっても、ここで問題にするのは高神様（たかがみ）――官幣社、国幣社のようなりっぱな資格をもたれ、国家の保護のもとに国民の崇敬を受けていた伊勢皇大神宮、靖国神社または八幡などの神がみ――ではなく、日常生活に非常に縁のふかい、いわば身分の低い神がみのことである。

全国の大小官社三、一三二座を記録した延喜式（えんぎ）――西暦九二七年に完成――の神明帳このかた、これらの神社を紹介した作物はたくさんにできているから、ここでふれる必要はない。が、昭和二一年の神道指令によって社格を消滅させられた神がみは昭和一三年の書きあげでみると官幣社一一六、国幣社八九、府県社一〇九八、郷社三六一六、村社四四、八二三となっている。

これらの合計は四九、七四二社になるが、注目しなければならないのは、同じ年の調べによる全国の無格社の数は、はるかにこれを上まわる六〇、四九六社もあった事実であろう。明治政府は、神社を国家の重要な機関としてこれを保護する政策をたて、以上のような神がみの格づけを行ったわけだが、歴史上有名な事件となって記録されているとおり、その廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）によって、猛

烈な被害のあったのは最下位と目されたいわゆる無格社であった。そこでは村民との事実上のつながりは軽視されて、さかんな合祀整理が強行されつづけたから、これを保有するためには、いままでの神とは、なんのかかわりもなかったような、しかし国家の認める祭神を迎えるほかはなかったのだった。

ここで紹介したいのは、この国家によって認められなかったり、高い資格を付与されなかったような数しれないほども多い、いわば名もなき民ならぬ「名もなき神がみ」たちなのである。

すべては守神へ　たとえば、地鎮祭にまつられる土地の神とか、東北地方でお面をかかげ火をつかさどる神と信じられているカマドの神、水をつかさどる水の神、この水神の分身ともいうべき井戸神とか、便所にまつられているカワヤ神、あるいは三方荒神であるとか、そのほかいろいろな名前でよばれる神がみが信じられている。また、生産関係では風の神、もっといやなものに貧乏神、伝染病の本家本元のような厄病神、夢にあらわれる枕神など、もろもろの神がみたちがいるのである。

これらのうち、われわれの生活にもっとも近い生産をつかさどる神がみ――春、田畠の仕事にかかる頃、山から下りてきて山の神から田の神に神格をかえて里におりたつ神や、囲炉裏の火をつかさどる火の神など――を考えてみると、もともと独立した経歴の正しい神様というよりは、ごく漠然としたものであって、その由来をつきつめていくと、その性格は家の守り神に近づいてくる。

地　神（下左）　カマド神（上左）　風の神（上右）　サエの神（右下）

たとえば、山の神を例にとってみると、その一つとしてお産の神がある。難産が予想されるような時には、馬を引いて山に行き「お産の神様を、お迎えにまいりました」と、いって、ある神意を感応した場所――おそらくは馬が自然に立ちどまったとか、そのほかのことで、そこに神の存在を感応するのだろうが――そこで神様をおだき上げ申すような仕草をして、家の縁側までおつれする。改めて神様をおろし、家にお迎えすると、安産が保証されると、そう信じている村むらが今でもある。

また、カワヤ神は、非常にきれい好きな神様で、いつも便所を掃ききよめておくと、その心がけのよい嫁や娘はキリョウの良い子を産むことができるとか、裸で便所に入るなとか、便所で唾をするものではないなどと言われてもいる。

このような信仰を綜合してつきつめていくことによって、家を中心とした、生産を中心とした神がみの、もとの姿が明らかにされよう。すなわち、もともとはその家の生命力のシンボルというか、一つの守護神だったものが、しだいに分化してきたという証拠がはっきりしてくるのである。

そして、その家の守り神とはつまり、子孫の繁栄を願い、幸福を願うところの祖先たちの霊魂のきよまわった姿であるらしいというのが、ほぼ定説として受け入れられてきている。

今では、家の守り神として、男性のシンボルを型どった物を天井裏に上げておくとか、いろいろな形が見られるが、形にとらわれずに、象徴としてその本元の心持ちとか、信仰の形態をたどって行くと、われわれの家の守護神として、いつきまつられてきたものは、外来の威力ある、あ

るいは、ある時代に流行して人気を博したような高神たちではなしに、もっと素朴な、われわれの祖霊だったという考えを強くせざるをえなくなってくるようである。

さらに例証するならば、たとえば東北の岩手、青森あたりで非常に盛んに信仰されているオシラ様という神様をあげることができる。

これは近ごろ、無形文化財の重要民俗資料に指定されてから、かなり一般に知られるようになった。現在の信仰のされ方は、かなりの末期的現象をみせ、すでに素朴な形をくずしはじめているけれども、このオシラ神の古い祀られ方をたどっていっただけでも日本の神の特性の一端をうかがうことができるのである。

いつのころからか、わが家に伝わったかわからないが、先祖代々まつり伝えたというオシラ神が古い形で、三月一六日のお祭りに近所の人や家族が集る以外は、日常生活とは縁が薄くなっていて、これをおまつりする役目は、それらの家々の主婦というのが、ふつうである。

ことに、この神を主としてまつるのが一家の主婦であるという点とか、同じオシラ神なはずなのに地方や時代によって、あるいは農神様としてまつられ、あるいは、男女の恋愛の神様であるとかカイコの神様であるとか、いろいろな神様としてまつられているということなどからも、古い信仰の名残りをとどめている神様といえよう。結論を先にいうならば、これもまた、宗教以前からの家の守り神の一つであったとみるほかはない。

このように、われわれがふつう神様と言っているものの中には、祖霊に肩がわりしたものというか、または祖霊から発して、いろいろな働きを受け持つモノにつけられた名称であるものが多

いのである。

強い信仰意識　もちろん、大きな神殿に祭られている神様ほど身分が高く、小さなホコラにまつられている神がみほど身分が低いとはかぎらない。げんに非常に崇敬されている神がみのうちには、ミヤ、ヤシロの建造物を持っておられないのも少くはないのである。

もともと、ヤシロの素朴な形は、正常な祭をする場所へ神を招きおろす時に、その手段として臨時に立てた一本の木が中心であった。祭が終ればすなわち、神はお帰りになって、ふだんは固定された一定の神域に留まりたもうとは信じられなかったのである。ところが社殿が常置されるようになると、そこに神様は、いつでもおいでになるかのごとく考えるようになる。

このような高神と庶民との関係は、いってみれば血の通うことの少い、ごく形式的な、あるいは、観念的な信仰心を満足するにたるだけとでも言えよう。これに反して、卑俗、低級なようではあるけれども、水の神、カワヤ神、火の神などの神がみは、庶民にとってずっと身近な関係にある。

強烈な信仰意識をもって結ばれているが故に、その信仰形式というか、神と人との約束に反した場合、神がみのいやがる行為・冒瀆行為を犯した場合は、神罰、たたりも高神にくらべて、ずっと個人的には強烈なことなど、日常生活の中で、しばしば経験させられているところである。

たとえば、もっともわれわれの食生活なり、暖房なり、または照明に関係のある団炉裏の火にしても、この火の神の神聖をおかす不浄なものを炉にこぼしたり流したり、あるいは、けがれた

行為をした場合の火の神の罰や、そういう行為をいましめる諺のようなものも、たくさんに残っている。

またそんなことから、大みそかには、新年の新しい年をもたらす歳神様（としがみさま）を迎えるために、今までの古い火をきりかえて清浄な新しい火にしたりもするわけである。

炉中に塩をまくとか、四足、二足のようなものを煮炊きするときには、上の炉を使わずに、屋外に臨時のカマドを設けて調理したり、あるいは、一段低い台所のカマドで煮炊きをする約束になっている地方は、ほぼ全国的である。

また、それだから火の神を正しく祭っていれば火難をさけることができるとか、便所でカワヤ神に一定の方式にしたがって祈願をこめれば、かなえてもらえるといったような神の恩寵を期待するいろいろな方式も、けっして少いものではない。

一口にいま、われわれが神様といっているものの中には、宮

カマクラ（水神祭）

廷の氏神のようになっているお伊勢さんとか、われわれが氏神とか鎮守様とか産土様と称している来歴の正しい神もある。そのほか、白蛇が屋敷の中に入りこんできたから、これは家運が隆昌になるしるしだなどと、屋敷の中に小さなホコラを作り、コンクリートで土台をきずき瓦をふいて、これを〃白蛇大明神〃などと名づけて祭るような神。その正体は白蛇にすぎないが、その時から氏神もしくは屋敷神様になってしまう。

　こうして一度祭られてしまうと、家運が衰え、することなすことがつぎつぎに失敗したという反証でも重なりさえしなければ、この新設の神は、その家の存続するかぎり子々孫々まで祭りつづけられていくことになる。

　これは、このことだけを考えればその家族にとっては思いがけない新神のご出現となるわけだが、やはり根本には守護神思想がよこたわっているといえよう。白蛇――どこにでもいる蛇ではなく、明らかに何らかの神の意志の現われであると思われるような――を、神が「おつかわし」になったと考えられる。わが家の運命には、神の恩寵が、ご加護が加わったのだという認識のしかたであって、そんな根もないところだったら、白蛇がきたからといって、神として祭ることはしないのである。

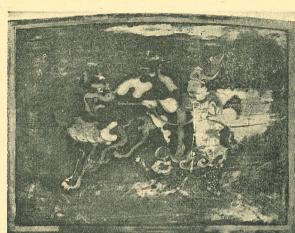
四、信仰の衰退と芸術の発生

ご神体の具象化　実際にはいないはずなのに、幽霊の絵だとか、幽霊の出てくる芝居があり、実際にはばけたり、ばかしたりする能力のないはずの猫や狐や狸の置き物だとか、ばけ猫の映画だとか、招き猫のようなものとか、あるいはまた正一位稲荷大明神の狐だとかが、いくらでもわれわれの日常生活の中には存在している。

　いったいこのように、実在しないものの絵姿や像が作られるようになった経過というものは、どういう筋道なのであろうかということも、考えてみたい問題の一つである。

　偶像崇拝ということは、まだ人智が発達しない時代のなごりであると、言われているけれどもわが歴史には、偶像崇拝のあとは認められなかった。いまわれわれがいう偶像崇拝の形でも、よく考えてみると、一つの神の姿、形を型どったとはいっても、芸術上の観賞によって、すぐれたものならば、それをよくした能力があるという証拠でもあるわけである。たとえば仏像にしろ宗教画にせよ、そこに非常に香り高い芸術性の豊かなものがあるならば、それらは、いわゆる偶像というべきものではあったにせよ、直接にそれを信仰の対象とする人びとは、宗教や信仰とは、きりはなして、もっぱら芸術の世界における価値の高さ、低さという見方をする。ここで考えるような、信仰の衰えなのか、発達なのか、または人間社会の側の生活水準の高さなのか、低さなのかということの関係においては、論じられないのがふつうである。

　しかしながら、これは他民族でも同じであろうが、日本人の古い信仰生活の歴史を考えてみると、信仰の度合が非常に強烈な場合には、何らそこに偶像とよばれるようなものの存在する必要の認められなかったことがわかってくる。

興福寺東金堂奉納絵馬

常設の社殿のない神が古態であり現存もすることは、すでにふれたが、今のわれわれの日常生活においても、たとえば、何かの祈願をこめるために、三、七―二十一日の間、身のけがれを去って清浄な状態において、オコモリをしたあげく、満願の日にありありと夢枕に神の姿を感応して、そのオツゲを聞いたという話がよく伝えられる。もっと極端な場合には、そこに何ら実在の姿、形なしにも、われわれがしばしば目のあたりに神、ホトケの存在を感得しえたのであった。

これを、しばしば引用してきた東北に残っているオシラ神にあてはめて考えてみても、その、ご神体などに、今からでも、何千年来のこの国

の信仰の対象についての変遷段階を立証することができる。すなわち、ずっと古い形は単なる一つの木の棒の執物（とりもの）にすぎなかったご神体に顔の形がきざまれるようになり、さらに布の切れはしをオセンタクと称して結びつけるにいたり、そのうえ、それが祭の時になると細工物の手足がつけられ、衣冠束帯まできせられるほどの状態になってきている。

このように信仰の対象である、ある一つのご神体が、だんだんと人間に近い形、あるいは、その神の性質をもっとも典型的に、ありありと明示するような姿、型にきざまれたり、えがかれたりするようになる経過は、ほかの例でも、いくらでも証拠をあげることができる。

たとえば、船に関する信仰をみると、船玉（霊）様という神様がある。これも航海の安全を保証し、大漁をもたらす神として、もともとは漁師たちが、船のへさきに、その船玉様をありありと示現した経験であったろうが、しだいしだいに、それが具象化されてきて、船玉の神像がきざまれたり、または船の舳先に、それらしい彫刻がほどこされてくるたぐいである。

これらは信仰の本質から言えば、明らかに信仰の衰えであると同時に、われわれの美意識ないしは美的表現の技術から言えば、芸術の発達であり、その変遷段階であると言えよう。

なぜ偶象化する？　神に向って何かの祈願をこめる場合に、信仰が強烈な時は、ただ心の中で祈念して両手を合せればすなわち神様が嘉納してくださるものと信じ、神と人間とは、そのような約束で結ばれていると信じて疑わなかった時代がもっとも古かったにちがいない。

それが、信仰がしだいに衰えてくるのと並行して、何かそれではまだ不安だったり、はたして、神が、わが願いの筋をききとどけてくださったかどうか、心もとなくなってくると、そこに絵馬だとか自分たちの名前を書いたさまざまな札を所せまきまでにはりつけなければ、満足しなくなってくるのである。

絵馬には、いろいろな祈願の筋を絵にしたものを書いて奉納するのが自然であるが、絵画というものの発生する一つの必然性を、ここに見ることができるであろう。

あとあとには絵馬を専問に作る人たちがこれを専業とすることにもなったが、ずっと素朴な型

では、めいめいがつたない絵を描いて、これを神前にささげ、自分が奉納したその絵馬があるかぎりは、あるときは神様も忘れてはいても、すくなくともこれが目に入ったときだけは、自分たちの願いを思いおこしてくれるであろう、といった安心感をみたしてくれるものであったにちがいない。

また、仏像にしろ、ご神体と称せられる神の像にしろ、当然にできるだけ、こうごうしく描き、きざまれるから、これらを掛図なり、ご神像として常に、もしくは祭の時に、掛けたり安置して、神をしのぶよすがとして祈願をこめていると、ここに一種のきわめて自然な錯覚が生じてくる。

このようにして仏像なり神像なりが作られ、形ある物として一定の場所に常置されてくると、知識としては、そこに神そのものが常においでになるのではなくて、それは一つの型どられた存在にすぎないとは知っていながらも、たえず、その具象的な実在の物である像の背後に、神なりホトケなりの存在を意識しながらこれを祭り、これに祈願しているうちに、しだいに、もとは人間の側で勝手に作ったものであるにもかかわらず、その中に神、ホトケそのものが宿ったような錯覚を起してくるのはきわめて自然なことである。

そうなってくるから神、ホトケは氏子なり、信者なりが、臨時のお祭りをする時以外にも、いつでも、そこにおいでになるという考え方が固定してしまうことになる。

神祭りの時に臨時にたてて、それを目標として天降っておいでになるはずであった神霊なり、ホトケなりが、常にそこにおいでになるという考え方からすると、お祭の時にたてるのぼり幟だ

とか、常緑樹だとか、諏訪のおん柱祭のように、柱を空に向って立てるといったことは、現代ふうな合理的解釈からはずれてくる。正月に歳神様を招きおろすための門松にしろ、クリスマスツリーにしろ、いまなおそれは、いずれもなくてはすまぬものだけれども、神祭の際の、もっとも重要な祭具、もしくは神祭のための重要なる手段であったことが忘れられてきて、しだいに装飾的な、もしくは、あらずもがなの存在になってくる。だから敬虔な人びとであるにもかかわらず、生活の合理化運動などに伴って門松廃止論が常に思い起こされるのも、こういうところに原因の一つがある。

芸術の発生　天然の妙なる美しさや、あまりにも微妙な変化などを見たり聞いたりした場合に、それをたんなる自然現象とは見ないで、何か神の存在を背後に感ぜずにはいられない伝統なりくせがあるということは、ほかでもふれるつもりだが、たとえば富士山の頂上に登ってご来迎を拝したときに、人びとは、そのすばらしさを、けっして「三、七七六メートルの美しさ」とは表現せずに、何か神秘的なとか、こうごうしいとかいって、信仰に関係のある言葉で、その美しさを表現する。それと同じことで、絵心のある人たちはそれをまず、こうごうしさなり、神秘さなりを絵画として描きたい衝動にかられがちなのではあるまいか。

そういうところにも、絵画発想の宗教性というものが考えられる。また、芸能方面にこれを移して考えてみると、笛を吹いたり太鼓をたたいたり、または鐘をたたいたり、合唱したり、歌を歌ったり、体を動かして舞を舞ったり、踊りを踊ったりするようなことも、神祭の時と結びつけると、その発達の過程が、もちろんその全部ではないにしても、とけてくるのではなかろうか。

誰でも知っているとおり、天の岩戸の神祭のときに、アメノウズメノミコトがオケみたいなものをふせた上で足を踏みとどろかせて、音を立てた。その音や、もろもろの神がみのどよめきにアマテラス・オオミカミが天の岩屋戸をそっとおあけになったという記録がある。

これはつまり、今残っている形で考えても、神社に参詣した時に、上からさがっている鈴をならすとか、カシワデをうったり、祭の時にもかならず笛を吹いたり、太鼓を打ったりするのと、もとは同じであって、その目的は、何かの音をたてて、神霊をそこへ招きおろす、神に、われわれの願いごとや、これからお祭りをいたしますということに、気づいてもらって、いわば神の霊をよびおこす手段として素朴な楽器めいたものが使われたにちがいない。

そうでなければ、たんなる楽しみや、音楽的な意欲を満たすためと言っただけでは、説明がつかない。

そこで何らかの目的を表現するための舞い踊りを繰り返えす過程で妙なる音楽を聞く快感を味う経験を忘れかねて、音楽なり、舞踊なり、あるいは物まねから発生してきた無台芸能などが、信仰の衰えるとともに独立し、ここに音楽芸術とか舞踊芸術などが芽生えたものと思われる。

人工の音を発することが神霊の注意を換起するというと、飛躍しすぎると思う人たちは、反対に、音を発することの忌まれる習俗の残留している事実を想起してくださればよい。

すなわち、今のわれわれの生活の中には、さまざまな俗信——一般には迷信のたぐいと考えられているもの——が残っているが、それらの中に、何かの音をたてることが非常に忌まれるいく

つかの例を誰でも知ってる。

「夜中に口笛を吹くと泥棒が入る」、「蛇が来る」といって、いやがったり、静寂たるべき時刻、すなわち夜中などに時ならずしてハーモニカや笛を吹いたり、歌を歌うなどの行為に、はたで想像する以上の異常な不安を感ずる人たちは、いまもなお、すくなからず生きている。

このごろではもう、写経などに精進する古風な人はさがしても一般の家庭にはいないにちがいないけれども、古くは、なにか心願の筋のある人が、経文をうつそうとして、心をこめてその一字一字写していくことを心からする人がいた。じつはこんなことも書道の発達にはかなり影響があったにちがいないと思う。神信心によって仏像や神像を、ひとのみひとのみに真心をこめてきざみあげていくようなたぐいもそれであって、このようにして完成されたものに、無信心な者では、とうていできないだろうと万人が認めざるをえないみごとな芸術品が多く残されていることも事実である。

いま、国宝や重要美術に指定されているような数かずの仏像や、もしくは宗教上の遺産の中には信仰に根ざした作品がおびただしいことは誰れしもみとめるところであって、多くの古風な芸術家たちは、すぐれた作品を残すために――というよりは、すぐれた芸術家たらんとして、合理的にいえば一つのことに精進するための手段といえばそれまでだが――非常に多くの人びとが、強烈な信仰にも生き、また神仏に帰依しなければ、すぐれた芸術作品はできないものだと信じたあとが、うかがえる。

また、直接には芸術とはいえないだろうし、このごろのように、お化粧が非常に発達してしま

うと、もう、化粧することのそもそもの目的などは、すっかりわからなくなってしまったけれども、お化粧をする、紅おしろいをつける必要性の古い形は、じつは祭に奉仕するためだったのである。

信仰の衰退と怪談　庶民階級においては、生産生活を営むふだんのくらしの中で、紅おしろいをつけるなどということは、考えられなくて、祭の時に、神に奉仕する目的のために、ふだんとはちがった顔、別なモノになるのがはじめであった。それがだんだんに発達してきていろいろなお面も作られるようになってきたのである。

これもまた信仰のおとろえといって言えないことはないようなたぐいだが、もともとは神がまつりの場に出現なさるときは、めいめいの神のお姿を信心深い人たちは、さまざまと感得することができたのであったろうけれども、信仰がおとろえるともに、それにかわるものとして、祭に奉仕するものがお化粧をしたり、お面をかぶったり、それらしい服装をして祭にのぞむことになり、その神の性格が次第に具象化され、形式化されてくると、そこに造形芸術なり、具象化にともなう技巧なりがこらされてくるようになってヒョットコ（火男）の面とか、オカメの面とか、天狗の面なども、仏像とは違った形でだんだんにすぐれたものが作られてきたわけである。

今、神社に参拝すると、誰でも見ることができる神前の狛犬であるとか、稲荷さんの狐の石像であるとか、あるいは素朴な木版ずりの山犬・狼の像の神札なども盗難よけや、火災予防の目的で畑に立てられたり、軒先や台所にはりつけられているのも、芸術化へのプロセスを示す一つ

の段階だと見ることができる。

お能にたくさん出てくるモノツキ、モノグルイのようなだしものや、芝居の「四谷怪談」や「心中累ヶ淵」であるとか、映画の「鍋島猫騒動」であるとか、こんなものだって霊魂信仰が衰えるのとは反対に、舞台上では次第に芸能的様相をましていったあらわれの一つにほかならない。

はじめは、偶像がなくても、じゅうぶんにわれわれの信仰心というか、信仰意欲がみたされていたのが、合理的な考えが、だんだん強くなって、無形であるはずの霊魂なり、神様が具像化されて、形のあるものになって、それが神様であり、ホトケ様の当体なんだとか、直接の対象として、あれが神様で、あれがホトケ様で、というようになってきたのが歴史的変遷である。一度そうなってしまうと、ぎゃくにそこにもう一つの合理化が行なわれてくる。無形であるはずの神、ホトケが、木や粘土や石できざまれているということは、いわゆる偶像崇拝で権威のないものだ、非常に低俗なものだから、そのようなものは信じられない、それを信じきれるのは教養が低いからだとか、知性がないからだというような逆なことになって、いわゆる偶像崇拝なるものが批難されるということになってきはじめた。

そうなってくるとおおかたは、人間の手で人為的に作られた神やホトケの像そのものをおがむということは、われわれの合理的な解釈とは矛盾するために、そういうものを否定したくなる。この、形あるモノに抵抗を感じてくるというのも、つまりは、神、ホトケは形のない存在なのだという知識にもとずいている。

V 怪談は生きている

一、現代人と怪談

　これまで、怪談に関連のある諸現象を、われわれの生活経験の中でとらえるとともにこれを歴史的にみてきた。しかし、それらはあくまで問題提起としてのべてきたのであって、具体的にわれわれ日本人が意識のうちに妖怪現象をどう受けとってきたか、現にどう受けとっているのかについては説明してこなかった。

　ちょうど、昭和二五年、迷信調査会（委員長、東京大学岸本英夫教授）が全国にわたって調査した報告書の中に筆者の担当した〝霊魂信仰による生活慣習の分布〟が、それを埋める科学的な統計になっていることと思われるので、ここに引用してみたい。すなわち、

一　死んでも魂はあると思うか
二　バケモノ、幽霊は今でもいると思うか
三　虫のしらせということがあるか
四　タタリというものがあると思うか
五　犬神、狐などが人に憑くと思うか

の五項目である。

　以上の設問は、おたがいに密接な関連があり、なかでももっとも重要なのは、当然「死んでも

無記入
わからない 20%
肯定 40%
死後の魂はあるか
否定 38%

魂があると思うか」である。おそらく、人間に魂のあること、したがって死後の魂を信じない人は、死後の魂の活動現象——と信じられている——である幽霊を信じるはずはなく、したがって「虫のしらせ」、ましてタタリといわれている現象も否定するにちがいない。

　幽霊、バケモノ、憑きものといったような、きわめて古い前時代的なもの、人びとの精神上の内面生活にまで深く入りこんだものの一国全体におよぶ同時調査による統計資料は世界の学界でも稀有なことである。

　われわれが、こうした妖怪現象を扱う場合に、たんなる現象形態や抽象議論に終わるのではなく、国民の実際生活にまで立ち入った中で掘りさげていかねばならない。ここに引用した資料は本章の「怪談は生きている」をのべてゆくための、科学的な根拠として読んでいただければ幸である。

　死んでも魂はあると思うか　この問題に対する回答は、まったく期待を裏ぎるものであった。右図を見れば明らかなように、肯定的な人は五〇％にもみたない。だが、ここにも数字上の魔術

といおうか、このような調査と実際の喰いちがいが認められる。それはたとえば、われわれの間の葬制の例を考えてみても、死後の魂の存在を信じないものならば、なぜ、ていちょうな葬いを行い、死水でホトケの唇をぬらし、死装束をつけさせ、枕飯をそなえるのであろうか。

挙げれば際限もないほど、日本人が死後の魂の存在を信じている例はあるわけだが、さてあなたはと問うと、〝ある〟と明確に答える人は二二・三％〝あるかもしれませんねえ〟と答える人を加えても四〇％そこそこというわけである。

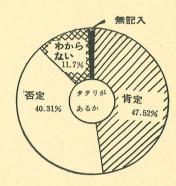
肯定 2.04%
わからない 10.7%
バケモノ，幽霊はいるか
否定 86.82%

おそらく、この質問を受けた人たちは、実際生活上の慣行によって結論を出すという実証的な態度ではなしに、〝そもそも人間というもの、もしくは鳥、けもの、生物などには、無形の魂なるものが存在するものなりや、いなや〟といった観念的な態度をとったのではあるまいか。そして〝たとえ存在するとしたところで、どんな実験機械によって物理的に確認するのか〟と、疑問をだし〝形のないもの、正体を手でつかみ、さわってみることのできないものは、存在しないのだ〟と断言するのであろう。こうした考え方が普及したというのも、明治以後の唯物的な、もしくは自然科学偏重教育の弊害の一つだと思うの

だが、どうだろうか。

バケモノ、幽霊は今でもいると思うか　存在を信じるものは、積極的肯定および半肯定を含めても、わずか二％にすぎない。その内容は、男より女が、若者よりも老人が、学歴の低い人ほどバケモノ、幽霊を認めている。

これらの人びとは、多分は肉体的に、すなわち直接に幽霊を見聞したり、妖怪に遭遇したと信じているか、もしくは信頼すべき肉親その他による体験談を直接聞いたものと推定して間違いはないであろう。他はことごとく否定者であって、無回答をのぞき、その否定率は八六・八二％と圧倒的数字を示している。換言すれば、幽霊、バケモノの存在は、今ではすでに笑話化してしまい、わずかに子供たちの生活のなかにだけ生きていると言うべきであって、いるかいないかを真正面から問題にすること自体、ナンセンスなことである。それはすでに文芸、芸能の世界だけでもてはやされ、講談、落語、映画などによって話題となり国民をむしろ楽しませる程度にすぎない。

わからない 6.76%
無記入
否定 18.4%
虫のしらせがあるか
肯定 74.25%

しかしながら、本書でもこうした問題をとりあげたということは、国民の九割までが知識として否定していながら、同時に想像以上に多くの人びとが、幽霊またはそれに類する現象、妖怪のしわざと解釈せざるをえない幻覚や錯覚を経験する状態が、依然としてわれわれの周囲に存在するからである。このような問題は〝わが国民の理外の理を好み、奇を好む性質による〟などと説明はされていたが、今までは、いったい、どのような奇を好み、また、なぜにそのような奇を好むのかについての実態は明らかにされていなかったのである。

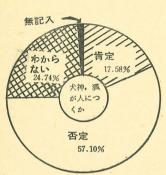
虫のしらせということがあるか　いわゆる前兆予知についての国民一般の深浅を知るために提出した。

「腹の虫がおさまらない」「虫酸が走る」「虫がすかぬ」などと、昔から人口に膾炙した言葉があるが、これを現代風に言えば予感ということであろう。吉凶いずれにも予感、虫のしらせはあるわけだが、もっとも重大視されるのは、凶事の起る前に常ならぬ「胸さわぎ」とか異常な感覚を意識する場合。一般的にいうと大地震、洪水、大風などの天変地異の起る前にあると信じられて

いる自然的な「前ぶれ」や、動植物、鉱物などの異常とか、夢の種類や、茶柱、口笛などの日常生活上の動作または事象によるなど、かなり範囲が広い。霊魂信仰と結びつく慣習としては、「霊感」という解釈、夢枕に立つ「枕神」の信仰、俗信がある。

「虫のしらせ」という場合、現代的な解釈をすれば、〝回虫のような虫がしばしば体外に排出されるのを見て、体中に虫のあることを知り、これを神格化して、その予報によって前途の吉凶をはかった〟といえようが、やはり昔は、祖霊なり氏神なり、子孫の幸福を常に見守ってくれる神様が、重大事の前に、かならず何かの変化によって、あらかじめ現世の人びとにその起るべき事柄を予知させてくれるものと信じていたのであろう。

調査の結果は、肯定、半肯定で七四、二五%と、妖怪、幽霊の場合とは比較にならぬほど高率を示めしている。年令別にみると、中年、壮年、老年と次第に肯定率が低くなる。このことは、実際の生活体験から虫のしらせの確率に疑問をいだき、否定的になるといえそうだ。

転業別のうち、漁師の否定率が四・六五%と最低をみせ、〝舟板一枚下は地獄〟といった危険率の高い生活経験の実状を物語っている。

タタリというものがあると思うか　「さわらぬ神に祟りなし」という諺が今なお使われている。しかし、信仰心の稀薄になってしまった大都会では、こうした諺を口にはしても、その神は純正な意味の神ではない。すなわち会社、官庁の上役のように〝敬して遠ざかる方が無難だ〟という軽い意味で、信心の対象としての「神」は、ほとんど意識されていないようである。だが、それほど信仰の衰えていない農山漁村では、いたるところ祟たる対象が現存しているために、「さわらぬ神に祟りなし」は、いまだ生きているのである。

忌みつつしむべきものとされている血の忌の赤不浄、死のけがれの白不浄を犯したためのタタリ、蛇や狐など神の使徒として崇敬されているものを殺したり、不敬な行為をはたらくと祟られ、神聖な場所へ立入ったり神木を傷つけるなどの行為に対して祟られたという話は、よく耳にする。

鉄筋ビルの建設に神主を招き、おごそかな地鎮祭を執行するのも、そのタタリからの予防処置と解釈できる。鰻屋の放魚による鰻供養、カメラマンたちのカメラ供養、ハンターたちの動物供養や猟銃供養も同じことである。

われわれは、この種のご供養が好きであるが、さて、このようなタタリを信じていると明言する人たちは、調査統計では案外に少い結果を示しているのである。

犬神、狐などが人に憑くと思うか　お能のモノ狂いを見てもよくわかるように、〝何かに憑かれたような……〟状態——神が人に憑くということは不思議でも奇異なことでもなかった。また、

近ごろでも、新興宗教などで信徒にモノがついたのを払うと称して本人の肉体を責めたといった例もある。さらに、地方（ことに中国、山陰地方）などでは、この「憑きもの」が大きな社会問題となるほど、いまなお相当な猛威をふるっている。犬神、蛇神など実存の犬や蛇とは関係ない信仰上のモノが憑くと信じている地方もかなり広い。

質問で犬神としたのは、とくに実害の多い地方をねらったわけだが、一般的になじみのない言葉なので、そうしたハンデキャップがあったと思う。その点、狐の方はヤコ、イズナ、キツネなどの名で全国的に知られており、飯綱憑きは関東から東北にかけてもかなり濃厚に分布している。

二、現代文明と怪談のゆくえ

信仰の娯楽化・慣習化　東京などの、われわれの周囲の人びと、あたり近所の信仰的な生活のあり方を見てゆくと、たとえば家を新しく造る場合に、若いサラリーマンたちの家にはたいていは、仏間の設計はない。

年寄りでも健在ならば仏間も造るけれども若夫婦だけが造る場合は、仏間の必要性はほとんど認められてはいないようである。

わずかに、年寄ってから必要になるかも知れないからと言って、用心深い人たちだけが小さな仏壇を設けるぐらいのものである。神棚もまた同じである。アパートの設計を見ても、ほんとう

に敬虔な信仰生活をおくる国民が多いならば、今ぞくぞくと建てられている鉄筋のアパートにも、仏壇や神棚があらかじめ配慮されるはずであろうが、それがほとんど、見うけられない。

仏壇があったにしても、若い世代の人たちは、親の祥月命日だからといっても特別に心もくばらず、また一年一回ぐらいは形式的に鐘をならす程度。「子供の宗教情操教育のためにも……」などというような心がけから線香もあげようといった程度でしかないように見うけられる。

また、年中行事できまっているから、昔からしてきたから、今年も盆祭りをしようとか、にぎやかでおもしろいリクリエーションだから盆踊りに行こうとかいったふうでとにかく盆行事や、彼岸にしても、しきたりとして家族そろって墓に参ったりする

盆のお墓参り（新潟市外）

家いえも、ずっと少くなってしまったらしい。

そうでなくても、クリスチャンが日曜ごとに教会に行くような形では、われわれは、寺参りをしていたのではなかった。

われわれの家は、ほとんど仏教信仰ということになってはいるが、寺と日常生活との関係は、誰か家族が死なないかぎりは、ほとんど縁がなくなってしまっている。

ほんとうは、こんなばかな話はないわけだが、たとえば世論調査でも、「家の宗教」・「本人の宗教」というように書きこみの欄が別になっていて、家ではなになに宗だが、本人は無信心というように書く例が非常に多くなっている。

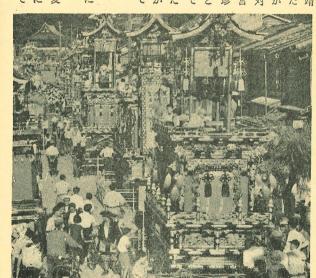
しかし、なき母をしたい、さき立った子供の死後を弔いたい気持などは、昔ながらに変りがないことは、めいめいの胸に手をあてて考えるまでもない事実である。

信仰心というものの表現形式がお寺や神詣りや、そういった宗教行事とは直接つながらなくなって、たとえばある人は思い出の中に信仰心を昇華させてしまっている場合もあろう。

夕やけに亡き親兄弟を思い起したり、日常の明け暮れのふとしたことに亡き愛児をしのんだりすることは、誰でも経験しているけれども、だからといって、毎日墓参りを欠かさないとか、日曜ごとに寺参りをするという日本人の数は非常に少ないにちがいない。

盆行事の一つであった盆踊りがリクリエーション化したように、盆行事にともなうものの贈答にしろ、盆とは別に、中元とか、盆休みという形で、彼岸参りにしろ、しだいに信仰から遠ざかり、娯楽や、そのほかの目的の要素が多くなっている。

戦死者の英霊を祭るための靖国神社の参詣者の数は、いまだに、ちっとも衰えないようだが生きながらの神として信仰の対象のような気持を持っていた宮廷に対する気持の現われが、珍らしいもの見たさの新年拝賀となり、本来は宗教行事の一つであるはずの恵方詣・初詣は、だんだんに純粋な意味の神参りから遊山気分の要素が濃くなってきている。

近代生活の不安　このように信仰の仕方というか、神信心、ホトケに対する祭りの形式が変ってきて、一般に信仰が非常に衰えてくる一方で、昔から捨て

高　山　祭（サンデー毎日所載）

長崎のへびのおどり

切れないでいる信仰心を満たすものの一つとして新興宗教は、あいもかわらず繁昌している。

非常に高度の教義と歴史の裏づけのあった既成宗教によらずして、平凡なる市井の人が神がかって、一つの新しい宗派宗教の教祖になると、待っていましたとばかり、大多数の信者が蝟集していく。だがそれは、その教祖が説かれる教義なり、宗教活動なりが、今までのいろいろな既成宗教とこれを比較検討してみた結果、こんどのほうが、ほんとうにすぐれているからとか、あれよりも、このほうが自分の信仰心をより満足させるからという選択からではなくして、かねて満たされざる信仰心を身近なものによって安直に満足させようという現代人の欲求の現われで

はなかろうか。

そうでもなければ、あまりにも現世利益的な、本格的な宗教から言えば問題にならないようなある種の新興宗教に、普通の健全な家庭を営む能力のある主婦や男たちが、あれ程熱烈にして純真なる帰依の心を寄せるのは解釈がつかないのではなかろうか。

だから本質的意味の信仰心というものは誰しも持っているのだろうが、ただ、昔のように神仏に帰依することによって安心立命するというよりは、自分を頼りにして、自分で人生を解釈し社会に対応していく、その限界を超え、もしくは超えそうだと感じた場合に、新興宗教のようなものにも頼るというのが現代人の多くのあり方の一つだともいえる。

幽霊や妖怪を、このようにもてはやしたり、かならず話題に花が咲くというのも、めいめいが、意識しないというだけで、やはり、こんな下地があるような気がしてならない。

妖怪変化や幽霊の話はすでに真面白な信仰や大人の世界から笑話になり、あるいは子供すらこわがらないようになったといったが、それはなぜであろうか。

もともと妖怪変化とか幽霊のようなものは人間の精神的な不安、心の動揺にもとづいて経験されるものだとすれば、世の中が非常に平和になり、誰も彼もが、明かるく健康にあふれた生活を楽しむようになったときには、このような経験をする機会は、ずっと少くなるだろうという想像はできる。

なにも都会が田舎にくらべてより幸福だというつもりはないけれども、今でも地方の村へ行くと、たった一人で野原の一本道を通るとか、山の中の墓地のわきを通らなければならないとき、

心の不安は禁じえないし、バケモノが出はしないか、狐にばかされはしないかと大部分の人びとは不安を感じるのがふつうである。ところが、大都会の夜の大通は、年中街灯がつき、ネオンが輝やき、店内のまばゆいばかりの照明が屋外までくまなく照らしている。こんな所では、心に不安を感ずる人たちは、田舎に比較してはるかに少く、従って、妖怪変化の出現する機会もそれにともなって少いわけである。

動物としての狐や狸や、鼬や、貉などは、こんなふうに人間どもが組んずほぐれつしており、建物は密集し、自動車や汽車のきしむ音、警笛、工場の騒音などが耳をろうするばかりの所には、けっして安居楽住はできないのだから、そんな都会をさけて山奥へ山奥へとにげ込んで行ってしまう。実際は、終戦後も上野の山で狸が捕ったとか狐が捕るなど首都東京の町の中からかれらが絶滅したとはいえないのであるが、心の不安の方がすでに妖怪変化の出現する余地をほとんど残していないために町の真中で狐にだまされたとか、狸にいたずらをされたという経験のほうは、原則的にはなくなったということができる。

しかしながら幽霊のほうは、動物が正体だと信じられている妖怪変化よりはまだまだ都会の中に生きうる余地を残しているようである。

それは、たとえば同じ都会とはいいながら、そこには、昼間の喧騒と対照的に深夜暁闇のしじまがあり、人類の未来を暗示するような鉄筋コンクリートビルの林立する不気味さなど、かぞえきれぬほどの近代生活の中の恐怖と不安がある。

怪談流行の新しい素地　そうした前代人の経験することのできなかった新しい不気味さや恐怖や不安にかこまれて暮す都会人のひとりひとりの体の中に残っているのは、なるほど、頭のほうは原子力時代の新知識、新文明ではあっても、心の奥底には、古くからの信仰生活の影をひいているのだから、幽霊だとか、幽霊めいたものの存在する余地は、なかなかに清算しきれないのではなかろうか。

　それにまた、近代的な物質文明に頼りっきりの生活を根本的におびやかす天変地異、人工の美ばかりを追っているうちに、ふと気がつく天然の織りなす美しさなども、都会人にとっては一つの驚異であり、しばしば神秘観を抱かせずにはおかない。たとえば、オオロラとか、あるいは、非常にきれいな夕日、夕焼け、朝焼けもしくは、人力ではとうていどうすることもできない大暴風雨とか大地震とか、転変地異に際して思いしらせられる超人的エネルギーは、反対に人間の力のいかにはかないものであるか、人間の力の限度というものを痛感させずにはおかない。

ついに見放された〝神さま〟
神社の境内に待合があり神木に〝仲居を求む〟の看板がたてかけてある

　そんなとき、素朴な人たちは、しばしばそこに人力以外の何ものか、ふつうは、これを神、もしくは日本の場合にはホトケというような存在をあらためて再確認することになるのである。

　そのような、天然のあまりにも美しい現象に際会するとか、天災に見舞われたような場合そこに自分たちの不安とうらはらに、そこに神の存在を信ずるだろうし、無力さを自覚すると同時に頼るべからざる姿なきモノの加護なり恩寵なりを求め、期待せざるをえなくなってくる。

　こういうことを考え、もしくは、こういうことを認めない限りは、日常、見聞するところのさまざまな矛盾した同胞の信仰行事、もしくは信仰現象を解釈することはむつかしい。

　たとえば鉄筋コンクリートの八階も十階もあるようなビルディングを建てる場合に神主を呼んで注連縄を張っておごそかに行う地鎮祭であるとか、もしくは、そのビルディングの完成したあかつきに屋上に稲荷神の赤い鳥居を建てるとか、あるいは、何か呪術的な不気味なけだものの像を屋上にかかげるといったようなことは科学的にいえばナンセンスにすぎない。

　現に、このような時代錯誤、アナクロニズムと笑ってしまわれそうなことは、いかなる都会にも、どのような近代的な建築なり生活様式のなかにもたくさんみられることは説明するまでもない。

　東海村の原子力研究所の設立には、おごそかなる鍬入れ式が行われたし、国際航空路の要所羽田空港にもターミナルビルの屋上にはちゃんと稲荷神が安置されているといったたぐいである。

　電気冷蔵庫や電気洗濯機のある家々の台所を見よう。その柱にはたいがいは鎮守様なり、付近の氏神のお札がはりつけてあり、その軒先にはシャモジにマジナイの文字が書かれたものがかか

げられている。お守札を肌身につけている人の数は、じっさいは想像もできないほど多い。
もっとも近代的な交通機関であるバスの車掌席の脇に、成田山とかお不動様とかの交通安全のお札のない車は見たことがないし、定期航空会社の飛行機にも、おそらくはその全機にマスコットという名称で人形めいたものがぶらさがっているのではあるまいか。
このように、肌身につけているもの、家庭内にあるもの、もしくは、家のまわりにあるものなど、例をあげれば日本人の生活の中にある古い生活様式、もしくは、古い時代の信仰の名残りというものはおそらく何千、何万種類といっていいほど残留しているのである。
しかもそうした生活様式が、それほど古いとはだれも気がつかずに、バスに乗り、電車にのり、飛行機にのり、そして原子力利用を平然と話題にしながら近代生活なるものを営んでいて、そこになんら矛盾を感じない。これはつまり、日本文化の新旧併存という特徴によるものなのである。
このような生活の中に、妖怪変化や幽霊が花を咲かせることは、そうむつかしいことではないわけである。

三、エピローグ

幼な子の疑問　ともかくも「ありうべからざるものを、実際に経験する」といった人間生活の不思議は、ぜひとも解明されなければならない。このような問題を未解決のままでおくということは、ただちに健全な宗教情操教育だとか科学教育の効果を、根本からおびやかすものなのである。現在のままではその双方とも効果はあがらないであろう。

さらに、われわれは、つぎのような教育上の実際の例をあげることができる。たとえば子供が夕方暗くなるまで屋外で遊びほうけていると、母親たちはよく、
「隠し神様にかくされるから早く家にお帰り！」、
といったり、夕方や夜になって、むずかる子供たちに『鬼が来るぞ』とかあるいは『バケモノが来るぞ』などということによって子供たちを恐怖させて泣き止まさせようとするのがふつうである。
しかしながら親たちは同時に一方では、子供が真顔で、
「お父さん、ほんとうにバケモノっているの」
とか、また、
「天狗や河童なんて、あんな姿のものが、ほんとうにいるのですか」
などと質問したような場合には、親たちは、わが子に正確な科学知識を与えようという、在来の学校教育の方針にのっとって「そんな馬鹿げたものは、絶対にいるはずがないのだ」と答えざるをえないのである。日本の子供たちは、いまだにこのような矛盾した教育を受けながら成長しているのである。
また一方では少くとも敗戦までは、すべての学校の歴史授業において、つぎのような矛盾した教育がくり返されていた。
たとえばある学生が「天の岩戸開きを始め、日本古代史にあるかずかずの歴史は、どうしても

人間のほんとうの生活経験とは思えませんが、伝説や昔話と同様に架空な物語にすぎないのですか？」といった質問をしたような場合に、先生は「そんな馬鹿なことを、どうして君は考えるのか。日本の神がみは、神とはいいながら、もちろん人間であるが、その人間がそのまま神なのである。こうしたことは歴史的事実なのだ……」なんという舌たらずな答弁であろうか。

だからその学生はさらに「しかし、どう考えても、こんな超自然的な、超人間的なことが、いくら二千六百年以上前でも、事実だとは想像できません……」と当然のことながら追求する。

そんなときの先生たちは、きまって「そんなことを言っても、歴史上の事実として、多くの歴史学者も肯定しているのだ」と逃げてしまわざるをえなかったのだった。

家庭と学校における、これらの問題に共通した重大な矛盾の原因は、ものごとを実証科学的に把握していないか、あるいはそうとは知っていても、公言をはばかりたいような矛盾を蔵していたところからきている。

「敗戦までは」とはいったが、こうした問答は、似たりよったりの状態のままで、今なお多くの人びとの中で繰り返されているか、繰り返されそうな可能性をもっており、国民一般の大多数の胸中にかくされ、悩まれている矛盾なのである。

常識のエア・ポケット　こうした身辺卑近の日常生活の中における常識の分野においてすら、健全なる良識の明確なる判断が下しえないところの、常識のエヤ・ポケットとでもいうべき弱点をわれわれは持っているのである。こうした現象は、学問研究なり、教育なりの大きなかたより

念写（ねんしゃ）
密閉した箱の中に物理的にはまったく光を入れずに，何かの像を写すという信念的写真。

であり、従来の人文諸科学の学問研究が見逃していた重大な欠点であるとともに、それは学者の責任でもあり、健全なる地に足のついた学問でなかった一つの証拠でもあった。

いわゆる神代にぞくすることは、あくまでもそれは神話であり、もしくは神話

的な表現で扱われたるものであって、かならずしも歴史事実と一致するものではないこと、そうした事を信じたのは古代日本人の信仰であり、そうした記録からわれわれが知ることのできる事は、それらが記述された時代の思想史、信仰史であり、あるいは記述する場合の一つの型であったこと、また、こうしたものだけでは、史実のすべてをうかがうことはできない、といったぐらいのことは、あらためて説明するまでもない常識である。それらは大ざっぱにいえば信仰上の事実ではあっても、現代の物質物理学上の事実ではないことは、言うまでもない。

　鬼や天狗や幽霊や妖怪のようなものも、けっして生きている実在の人間や動物のような存在として「ある」のではなくして——物理学的な実在ではなしに——、それは存在したり、存在するかのような「耳のまよい」としての、その音や声であり、「目のまぼろし」としての姿や行動であり、皮膚の感覚であることは、これまた説明を要しないはずである。それらは、昔からの信仰や、われわれの前代の知識による人間の側だけの経験であり、あるいはまた、人間の不安や恐怖や身心の異常状態によって生じた産物であることは、いわゆる「常識」で判断できることである。

　つまり、人間の側のさまざまなそうした経験は、疑いもなく事実なのであって、人間の経験としては対象になるべき、そうした妖怪や幽霊は存在するのではあるが、しかし、こうした妖怪や幽霊そのものが、自主的に行動したり、存在するのではないのである。

　自然科学的には、けっして実在しないものを、あたかも実在したかのように経験する、というのが事実なのである。

　ところが明治以来——素朴な形においては、はるかにその以前からであったが——自然科学者、

もしくは、そうした立場の人びとが、そのめいめいの自然科学的な立場から、このようなものの実在するはずのない迷信であることを主張して否定し、心理学者たちも、それらが錯覚や、幻覚、幻聴であって「存在しない」のだということのみを強調してきた。

　そして井上円了博士は、その老大なる「妖怪学」の大著によって、各種の実例の一つ一つを調査研究し、その実在しない事実を証明するためにその一生を費したかのような結果さえ導いてしまった。つまり、妖怪——実在するはずのないところの——そのものを否定しようとすることに急なあまりに、かんじんの人間の経験の方は深く論究されなかったのである。

　だがしかし、あいもかわらず全国津々浦々、近代文明の最尖端にある大都会の真中においてすらも、現在なお、国民一般の日常生活に妖怪変化、幽霊の存在が語られ、体験され、そしてまた、統計をとってみても、大学卒業以上の高い数養と、高度の自然科学的常識の持主であるはずの人びとまでが少なからず、かれらの存在を信じて疑わないのが一九五七年の実情なのである。その上、信じないと断言する知識階級の人びととの過半数も、ほんとうのところは、半信半疑であって、しかもその人たちは、ただの一度でも、自分でこうした現象にであうと、たちまち彼らにばかされてしまうことは前にものべたところである。

　このような風潮は、冷静に、偏見にとらわれることなく、われわれの生活事実を実証科学的に、すなわち、人間の経験をそのまま受取るのでなく、一方的に自然科学的知識によってのみ解釈され、教えられて来たことに、一つの大きな原因があった。

　つまり、そうした現象は、錯覚であろうと幻覚であろうと、それがたしかにわれわれの実際の

生活経験であったという社会事象はみとめなければならず、否定することのできない事実なのであるから、正しい研究の方向というものは、つぎのような順序で行われなければならなかったのである。

(一) われわれは、はたしてどんな幻覚や錯覚を経験してきたのか、いまでも経験しているのか。

(二) それらの実際の資料による時間的、空間的、――歴史的変遷と地域による異同――調査研究。

(三) どういう理由で、われわれは、このような経験をするのであるかについての各方面からの研究。

こうした実際の、事実によるいつわらざる資料を基礎とする研究から、なんらの偏見や一方的な立場によらないところの、自然に帰納され、演繹されてくる結論によって、われわれの信仰や思想を跡づけることができ、国民一般のありのままの、社会観、人生観などを正確に把握することが可能となるのである。

これこそは、われわれの妖怪変化や幽霊研究の真の目的にほかならぬのである。

われわれの立場 身辺卑近なる日常生活中の疑問だって解明できず、幼児の質問にすら適確に答えられない状態は見すごしにしておくべきではなく、このような疑問をそのままにして、実用の学を排し、いたずらに架空なる論理のみを尊しとしてあけくれる時代はもはや昔となったはず

である。敗戦というともどもの大きな不幸をもたらした遠く深い原因の一つは、こんなところにもあったのではなかったろうか。

記録文献に記載されていなかったために、いままでの国史に対するあやまった考え方のために、過去のわれわれの歴史の研究は、権力や富や地位のない国民大衆の歴史には、ほとんど触れなかったが、これらの国史の大宗は、国民自身の歴史に置き換えられ、したがって学校教育においても、その歴史教育はまず常民――国民大衆――の歴史、その日常生活変遷史を中心とする歴史教育を含むところの社会科、歴史教育でなければならないのである。

同時に、教育の場はたんに学校のみにとどまらず、家庭教育、社会教育が同時にともなっていなければならないのだから、学校の教師のみならず、父兄も隣人たちもまた、学生、生徒、児童教育の大きな部分を受持たねばならない。

そのためには、現在の社会事象を正確に理解、把握することが要求されるし、正しい歴史知識と認識を持たねばならぬことが痛感される。このような正しい知識と認識にもとづくあらゆる場における青少年にたいする教育によってのみ、真に社会の役に立つ健全な次代の人びとが養成されるのである。

そしてまた、われわれ自身の生活の近代化や科学化や合理化を行うべき正しい政策も樹立されることとなり、どんな生活技術、暮し方が、われわれの生活の中から不幸や災害を少くし、幸い多いものにすることができるかが正確に判断されてくるであろう。

こう考えてくると、われわれにとって妖怪や幽霊のようなものもまた、けっして一笑にふすべ

き問題ではないことが納得できるはずである。

妖怪そのものの、彼らの社会の研究ではなしに、それはこれまであまりにも未知だった日本人自身の社会を理解することに目的がすえられているのである。

代々の祖先たちは、ありうべからざる妖怪変化や幽霊たちとの間に、果してどんな交渉を続けてきたであろうか。

かれらの社会にどんな興隆衰退があり、変遷があったと考えられただろうか。またそれらがどのような現状にあるだろうか。そうしたことを知ろうとして、記録文献を渉猟してみても、前代人の実際の生活経験の資料は、ほんの片端きりうることはできない。

それらの中に記載されているものは、小説や芸能によるところの自由奔放なる人間の空想、創作が大部分であり、わずかに記録されているものは宮廷や貴族や武士たちの経験か、さもなければ、たまたまの見聞録による偶然記録にすぎない。

しかし、方法をもってするならば、けっして解明の道がないわけではない。わが国においては幸いなことには、かれらが、国民の強く根深い信仰によって支持され続けてきたことと、古風なる前代文化が、現代文化の中にも豊富に残留しているために、文字には書き残されていないというだけの違いをもって、資料はけっしてとぼしいものではない。日常生活の中に、それらの資料は、まだ生きているのである。

付録・霊魂現象の調査手帖

―人生観・思想史を学ぶ人びとのために―

一、霊魂現象調査の手引

敗戦直後の食糧を手に入れることだけに専念しなければならなかったような苦しみを超え、私どもの生き方、ものの考え方の、大きな動揺もほぼ静まって、経済生活の安定とともに、国民はようやく健全な未来を計画しようという時期を迎えつつあるとき、気をつけてわれわれの周囲を見わたしてみると、「日本人」という題で、いろいろなエッセイが書かれ、本が発行され、映画や芝居などにも、それらしいものが目立って来るようになっていることに気がつく。

映画「明治天皇と日露大戦争」などについては、一部から「えげつない金もうけ主義が復古調をあおっている」などという悪評も聞かれるけれども、歴史上の事実は否定しようもないし、われわれが日本人であることもまた同じである。外国人についての研究や議論や意見だけならば別だが、いやしくも日本人に関する人生観、世界観、信仰などを説こうとする場合には、どうしても、日本人のものの考え方、死生観だとか、倫理観などを基礎にしなければ、ただ観念的な空理空論に堕してしまうことは、言うまでもないことである。

新興宗教がなぜこんなに隆盛なのかとか、幽霊を信じる人びとが、なぜこんなにいまでも多いのか、といった手近な安直な疑問に答えようということにとどまらず、日本人の相互扶助の問題だとか愛情とか犠牲とか、祖国、同胞に対する考え方、気持、島国根性とか、排他性……という

ような大きなテーマにまでつながる、いわば哲学上の基礎資料としても、広い意味での、この国に生れ育った人びとの霊魂観、霊魂思想が深い関連を持っていることを否定できない。

イギリス人のジョンブル精神、アメリカ人のパイオニア・スピリット、日本人の大和魂といったふうに、統合された一民族が高度に発達した生活を営むようになると、そこに共通したある思想なり、民族精神というものが形成されてくるようになる。

それは文学上の作品からも抽出することもできようし、絵画、彫刻、音楽、芸能のような方面からも言えることだが、そういうものをしっかりと把握し認識してはじめて、一国固有のものかインターナショナルなものかの議論にも発展できるのである。

日本人の霊魂観の調査事業は、敗戦直後に生活の科学化のかけ声に呼応してはじめられた「国民の生活慣習調査」の一部門であったが、歴代の政府当局、文部省では、直接にいわゆる「迷信打破」運動を心がけていたにもかかわらず、そのために文部省に設立された「迷信調査協議会」のスタッフが省外の学者グループだったため、打破撲滅運動以前のデータの集成とその整理分類だけに終始されてしまって期待はずれとなり、昭和三十一年にその組織はそのまま民間団体の「迷信調査会」として、直接の審問には答えないことになってしまった。

しかしながら、十年にわたる生活慣習の資料整備は、前後二回にわたる全国調査によってほぼ完了せんとしており、「日本人の俗信」として、すでに三巻の報告書が世に贈られている。

つぎに記載するのは、その第二回調査（昭和二十五年）の、実例調査用の第二部門で筆者の担当した「妖怪、霊魂、憑きもの関係」の調査要項である。

これはパンフレットに作製して、全国の当時の師範学校（新制大学）五十校にあてて配布し、その府県出身生徒のうち、教官の選定した生徒によって採集してもらい、その報告を集めたのであった。それらの報告は昭和二十五年の前半にはすでに文部省に送られてきたのであるが、占領下の圧迫やいろいろな事情がって、集計がおくれ、第一調査による統計資料（その項参照）だけがようやく世におくられただけで、第二調査の実例の報告書は、まだ陽の目をみるにいたっていない。この本の読者の中には、あるいは当時、この採集パンフレットを手にされて苦労してくだすった方がたがおいでになるかもしれないから、ついでといっては、はばかりあるが、おわびを申しあげておきたい。

この本の本文のペンの届かなかったところを補足することにもなり、また本書がポケット版なのを幸いに、若い民俗学徒はもとよりのこと、社会科の若い先生がたや社会心理、社会学、宗教学などを学ぶ人たちの採集調査の手引の安直なものとして、いささかなりとも利用価値もあろうかと思う。

二 調査項目

霊と魂　諸君は、霊とか魂とかについて、いろいろなことを知っているはずである。その中には、書物を読んで知ったことではなくて、諸君の村や町の人たちの誰もが話したり、

信じたり、行ったりしていることから知った知識。文字の読めない老人たちや、中学や専門学校を出ない普通の農民や漁民や商人たちでも知っていること。そしてまた、いつだれかが新しく発明したとも、作ったとも知れずに、ただ昔から行われたり信じられたり語り伝えられているような事がたくさんあるはずである。諸君は、それらを朝夕に見たり聞いたり教えられたりして知っている。ちょっと想い出すだけでも、たとえば、△お盆のお精霊さま　△幽霊　△遺霊祭・招魂祭　△生霊や死霊のたたり　△「一寸の虫にも五分の魂がある」　△「魂の抜けたような顔をしている」　△「魂が腐っている」「魂を入れかえろ」　△狐が、とり憑いた（犬神・蛇神・とうびょうつき・飯綱使いなど）。

こんなふうに言われている時の霊、魂というのは、いったい、どんなものだと言われているか。それらは、日本中のどこへ行っても、みな同じなのだろうか。地方によって違うのだろうか。外国でも同じようなものだろうか。こんなものには、どれだけの種類があり、また、それらはどんな働きをするものだろうか。昔と今とでは、どんなふうに変っているだろうか。どうして人間は、こんなことを信じるようになったのだろうか。

こうした人間の、日本人の気持のもちようや信仰の実際のことは、今までほとんど科学的に知られていなかった。実際の、こうした資料に基づいた研究も、また十分普及していない。

だから、そうした材料も、ほとんど集められてはいないが、次のようなことについて調べてみたら、おうよそのところは明かになると思うので、項目式に並べてみた。あなたの土地では、次のような事について、いったいどんなことだと言い、どんな実際の話があり、またどんなことが

行われているか。どんな名前があり、どんなよび方をしているだろうか。
ただ「ある」「ない」という答だけでなく、できるだけ多くの実例、信じられている事実、どんなふうに説明されているかを中心に調べてみよう。

a　生きている人の霊魂

(1) どんな場合にか、または、何かの方法で、生きている人に魂や霊があることを知った例はありませんか。

(2) 霊や魂のようなものを、見たり、聞いたり、さわったりした経験のある人はいませんか。
それは、どんなものだったと話していますか（形や色などの性質）

(3) 体の中から抜け出した、他人の体の中に入りこみ、くっついた、飛び出した、はなれた、などといった話にはどんなことがありますか。
それらには、自分の力ではどうにもならぬこと、他人の力でどうにかできる場合などがありますか。

(4) 生きている人の霊が、他の人や物に祟ったり、のりうつった話はありませんか。

(5) 生きている人の霊魂を、どんな形でか、まつることはありませんか（お盆の生きみたまとか、みたまの飯などいろいろの例があります）

(6) 赤ちゃんに魂を入れるような行事はありませんか。

b　死んだ人のもの

(1) 人が死ぬと同時に、魂が抜けて行くといって、その魂を呼び戻す行事をする土地がありますか。あなたの地方では、どんなことをしますか。（魂よばいなど）

(2) 人の魂は、死んだ直後に、蝶や鳥などになるという話はありませんか。何になるといっていますか。
死の直後、忌中、その後、とむらいあげ以後などで、死者の霊のあり場所が、どんなふうに違いますか。最後にはどこに落つくといいますか。お盆の精霊様は、どこから迎えられますか。どこへ送りますか。

(3) 死者の霊魂（ひとだま、ひのたまなどという土地もある）を見たり、さわった話はありませんか。それを何とよび、どんな形、色をしていた、どんなものだったといいますか。

(4) 生き返った人の話はありませんか。あの世を見て来たという人は、どんな所だったと語っていますか。

(5) 死んだ人の魂が迷うことがありますか、どんなわけがあると迷うといいますか。
どんな場合に、迷ったことが、わかりますか。

(6) 迷ったり、何かの障りがあったり、何か要求したいことがあったり、何かのことを伝えたかったり、または、ただ肉親に会いたいなどの目的で、死んだ人が、この世に姿を

現わした例はありませんか。

それは、何のために現われたといわれていますか。

そんな現われ方をしたものと幽霊とは、どうちがいますか。それが幽霊ですか。

(7) 幽霊を、あなたの土地では何という言葉でよんでいますか。

(8) 幽霊は、何のために(目的)出て来るといわれていますか。

(9) 幽霊はどんな姿で出るといわれますか(古い幽霊はみな足がありましたが)現われる時間は定っていますか。いつごろでてきますか。どんな場所に、どんな相手の前に姿を見せましたか。どんな因縁があってその人の処に出たといわれていますか。

(10) 幽霊を見た、声を聞いた、感じたのは、たった一人の時でしたか、何人でしたか。家族だけでしたか、赤の他人もいましたか。

(11) 同じ幽霊は一回きり出ませんか。何回ぐらい出ましたか。毎晩つづけて、何日ぐらい出ましたか。幽霊などは今まで一度も出たことがない村や町はありませんか。

(12) その幽霊が誰なのか、どうして判るのでしょうか。幽霊が自分で名乗るのですか。生きた人と話を交わしましたか。

(13) 幽霊が出る前、出ている最中、出た後などは、普通とどんなふうに、あたりの様子が変りますか。直前に何かの様子で予感があったといいますか。

(14) 幽霊は何のために現われたといわれていますか。危害を加えたり、不幸や幸福をもたらした例はありませんか。

(15) どうしたら幽霊は出なくなるといわれますか。幽霊の出るのを防ぐ方法は何かあるのですか。

(16) 幽霊の実話(実話といわれている話)を知っているだけ別に書いておこう。なるべく何年ごろか、出た場所、人の名などを詳しく記入しておくこと。

c 人間以外のもの

(1) 家、倉、台所、便所、井戸、特別な部屋、その他家屋にくっついた建物などに、霊や魂や神様があると信じられているものはありませんか。それらには、どんな名前がついていますか。それらはどんなもので、どんな現われ方をし、また、どんな働きをするといわれていますか。

(2) 家具調度品、農具、漁具など、どんなものに霊や魂があるといわれ、どうして、それがあることを知りますか

(3) そうした霊や魂のあるものまたは神様に、人びとは、どんな場合に、どんな行事をしていますか。

(4) それらはその家の人の幸、不幸と、どんな関係があるかと思われていますか。

(5) あなたの土地では、家畜、けだもの、鳥、植物、虫、石、塚、森、山、川、原、田畑などの、どんなものに、どんな霊や魂があるかと信じられ、言われていますか。その場所や名前や、種類、いわれ、その働き、人びとの祀り、行事など、わかっただけ

を一つ一つ記入しておくこと。

d 「たたり」と「のろい」

(1) 崇(たた)るものには、どんな種類があり、それはどんな名前でよばれていますか。どんな実例がありましたか。(たとえば、神・ホトケ・人・虫・蛇・鳥・けだもの・家畜・植物・石・宝物・刀・塚・池・沼・淵の主など。田・畑・森・山などのある場所など)

(2) たたられたことを、どうして知りますか。

(3) どういうわけで、たたるといわれ、どんなふうにたたったといわれていますか。

(4) たたりを、どんな方法で防いだり、止めさせたりしていますか。

(5) 他人をのろったり、他人からのろわれたりした、どんな話がありますか。のろう方法、それに対する方法、他人にのろわれていることを知るにはどんなことをしますか。

(6) のろい、たたりについての実例。

e 憑 き も の

(1) 生きた人や死んだ人の霊が、人間に取りついた話。犬・蛇・狐・狸などの霊だと信じられているものや、「ひだる神」とか「だに」とかいわれるような、変な神様みたいなものが、人間に乗り移ったり、とりつくものだという話はありませんか。あなたの土地のそんなものには、どんな種類があり、それらは、どんな名前でよばれていますか。その正体はどんなものだと信じられているか、形、色、性質などを詳しく尋ねる。

(2) とっつかれたという人は、あなたの土地の、どんな人ですか。一度に一人にだけつくのですか。大勢にとり憑くこともあったか。男女・老幼・知識教養の程度・信心深い人か不信心の人か、普通の人か、普段からどこか変った人にとりつくのか、憑かれた人の性質などを注意して調べてみよう。

(3) とりつかれると、その人はどんな具合に変になり、どんなことをするようになるのですか。

(4) どうして、とっつかれたといわれていますか。とりつかれる理由や動機、何か因縁があったといわれていますか。

(5) とっつかれた人は一年間に何人ぐらい、今までの何年間に何人ぐらいあったか合計してみよう。それから、その人数と部落や村の総人口の何割ぐらいになるかも調べておくことにしよう。

(6) とっついたものを払いのけ、おとして、元の体に戻るには、どんなことをすればよいと言われていますか。自然に戻ることがありますか。かならず特別な人に頼みますか。多数の力を借りたりしますか。どんな実例がありましたか。

（7）とっつかれた人で死んでしまった例がありますか。もとに戻った人は何でもなくなりましたか。やはり、どこか変なところが残っていますか。他の人にも伝染したりしませんか。

（8）一般の人びとは、とっつかれた人を、どんなふうに扱いますか。
（どんな感じで見ますか。かわいそうだとか、あたりまえだとか、大切にするとか、いじめるとか、交際をしなくなるとか）

（9）そういう、人にとっつく性質のあるものを先祖代々、あるいはいつのごろからか、または突然ある時にとっつかれて持っている特別な家や家族というのがありますか。何軒ぐらいあり、どんな家ですか。総戸数との比率を計算してみよう。そんな家筋だということは、部落や村の人びとはみな知っていますか。その家の人たち自身は知っていますか、知りませんか。
どうして、そんなものを持つようになったと言われていますか。その家の起り・仕事・宗教などと何かの関係があると言われていませんか。そんな家では、そうしたものに対して何か特別な祀りをしていませんか。そんな家を何か特別な呼び方をしていませんか。その家では、そうした憑きものを迷惑がっていますか、よろこんでいますか。

（10）それらの憑きものは、その家から分家に出たり、嫁聟の縁組をしたりした時にはどうなりますか。

（11）そんな家と一般の家や人びととの交際の仕方はどんなふうに行われていますか。

（12）憑きものを持っている家は一群をなして村里から離れてかたまって建てられていますか。普通の家とまざっていますか。

（13）こんな憑きものの力を知っていて、それを持っている家の人が、それを何かに利用した例や、利益や害のあったといわれる例には、どんなことがありましたか。

（14）憑きもののようなものは、あなたの土地ではいつのころからとも知れぬ昔からあったと言われていますか。始まった時代や起りが判っていますか。こうした現象には時代によって多くなったり、少くなったりしたことがありましたか。

お社のない神様とバケモノ　諸君の知っている「神さま」とよばれるものの種類は大きくわけると、立派なお社のある、なにかに神社といわれている神と、もう一つは、社などのないもので、何神と神の名だけはついていて、大きなお祭りではないけれども、ともかく祀られている神様とがあり、それにもう一つは、もちろん、お社もなく、またまつられ方の少し変った「神さまのようなもの」の三種類になる。

たとえば（一）鎮守様と、（二）屋敷の内にある祠の神や井戸神や便所神、（三）それから厄病神とか「行きあい神」とか「辻の神」などでは少しずつ違っている。

しかし、諸君は、もう一種類のおかしな神様みたいなものも知っているはずである。

たとえば、山では社や碑になっている大山祇神のほかに、春になると山から里へ降りて来て田の神になり、秋には山へ帰るといわれている「山の神」や、それに似たような言い伝えのある天

狗、ぐひんさま、山姥などがある。また一方では正一位稲荷大明神などといって祠になり、氏神、屋敷神になっている狐が、他では人をばかしたり、自分で化けたり、人間にとりついたりすると思われてもいる。川の「河童」は、冬になるとまた夜になると、山へ帰って山わろというものになるという土地もあり、「河童」のことを水神様といって祀ったり、胡瓜を供えている地方もあちこちにある。つまり一口に「バケモノ」のように言われているものの中にも、神様と境目のはっきりしない、神様に近いようなものと、もうほとんど縁のなさそうではあるが何か信仰と関係のあるもの、それに、とてもこわいものと、あまり怖ろしくもない、どっちかといえば愛嬌のあるような変なものなど、いろいろあるようである。

山にだけいるもの、家の中やそのまわり、路の上や橋のたもと、川べり、海の上に出るものなど、バケモノのいる場所もその種類によっていろいろである。諸君の村や町の、こんな変な、おかしなものには、どんなものが昔はいたり、今もいると信じられ、語られているだろうか。

(1) バケモノ、お化けということばが使われていますか。(むづかしい熟語では妖怪・変化・魔物などというよびかたもあります) こんなものを、ひっくるめて諸君の土地では何とよんでいますか。

(2) バケモノは何と言って(鳴いて)出て来るか(モウーとなきながら出て来るという地方があります)

(3) 昔は出たが、諸君の時代には、もう出なくなったものにはどんなものがありますか。おじいさんやおばあさんの話の好きな人たちに尋ねてみましょう。どんな実際の例がありましたか。(出た時代は何年ぐらい前か、出あった人の名、出た場所、そこが今はどうなっているかなどわかったら忘れずに書きとめておきましょう)

(4) 家の中や、屋敷の中には、どんなものがいるといわれますか。納戸・炉の中・土蔵・棚・便所などに、おかしなものがいるといいませんか。(ザシキワラシ、灰婆、倉ボッコ、便所でお尻をなでるカラサデサンなど)

(5) 山の中にはどんなものがいると信じられていますか。山彦を何というか。木を倒す音をさせたり音楽をするもの、山にいる女の形をしたものなどに会ったり、その音を聞いたりした話はありませんか。その正体は狸とか狢とか、何だといっていますか。

(6) 大人や子供をさらったり、隠したりするものはいませんか。それは何とよばれていますか。どんなものだといわれていますか。どんな実例がありましたか。山に入ったきり行方不明になった人はいませんか。何年か後に帰って来た、山で出会ったという話はありませんか。(天狗、カクシ神、山姫、山姥、山男など)

(7) 人の体を急に痛くしたり、腹をすかしたり、のどをかわかしたりするものはいませんか。(ロクサン、カゼ、シチ、ダリなど)

(8) 道路の上や路ばたには、どんなバケモノが出ると言われていますか。
何かの音をたてるもの(小豆洗イ、狸バヤシなど)
人によびかけるもの(ウブメ、バロウ狐、オイテケ堀、イマニモ、ウワヤなど)
送り迎いするもの(ムカイ犬、送り雀、送り狼など)

人にいたずらするもの（砂掛け狸、スネコスリなど）
人が通るのを邪魔するもの（ヌリカベ、火柱、ノブスマ、大入道など）
人をだますもの（狐の作立など）
あやしい火をみせるもの（ミノムシ、狐火など）
とび歩くもの（ヤギョウサン、テンコロバシ、ツトッコなど）
こんなものには、どんな種類があり、それを何とよび、どんなことをされたというか。出る場所はどんな所か。出る時刻は。その正体は何だというか。

(9) 川や沼や淵にはどんなものがいるといわれていますか。沼や淵の主。水底にいるバケモノみたいなもの。（川の河童（かっぱ）―子供の姿で、頭に皿があり、角力がすきなもの―やカワウソなど）

(10) 海岸や海の上には、どんなあやしいことがあり、どんなものがいると言われますか。（磯女・幻の船・あやしい火・人の声や姿のあやしい音をたてるものなど）。それらの正体は何だと信じているか。なぜ出るのか。出たらどうするのか。出ない方法なども詳しく聞いてみよう。

(11) 雪の降る時だけに出るといわれているものはありませんか。どんなものだといいますか。（雪女、一本足など）雨の晩、霜の夜、みぞれの降る日などだけに出るものはいませんか。

(12) 毎年きまった時期にやってくる変なものにはどんなものがあるといわれますか。（正

月様や歳徳神などに似たもので一ツ目小僧とかミカワリ婆さま・ヒカタハギとかが各地にあります。）

(13) そこいらを歩き廻っていると信じられている気味の悪いものにはどんな種類があり、どんなふうに扱われていますか。入りこまれないために家々ではどんなことをしていますか。たとえば厄病神、貧乏神、疱瘡神、荒神さん、行きあい神、甘酒婆さんなど。

(14) その他、あやしい音を立てたり、まぼろしの火をみせたりするもの、猫が化けたといわれるもの、死体を喰うものなど、いろいろなものが各地で信じられていますが、諸君の村や町には、どんなものが信じられていますか。

(15) 人間が狐やイタチなどを祀ったり、わざわざ招いて、ご馳走をしたりして、何か占（うらな）ってもらうとか、その知恵をかりるという行事はありませんか。（寒施行（かんせぎょう）・クダ狐・オサキ狐・コックリサマ・イタチ寄せ・狐供養など）

(16) バケモノに会った話や、おかしなことを見た、聞いたという例を出来るだけ調べてみよう。そして、それは一人であったか、数人が一緒に出あったのか。怖くて逃げただけか、何か害を受けたか、福が授かったり、何かよいことがあったか。そんなめにあったという人は特別な性質の人か、普通の人か、年令、男女、体質などを注意して下さい。また、そんな経験をした時、どんな気持がしたか（ゾッとした、総毛立った、生暖い風や冷い風が吹いた、あたりが暗くなったようだった、淋しい気持になったなど）様子をたしかめよう。

(17) バケモノの正体を見たとか、だまされかかったが、正気にもどって無事だったという実話を集めておこう。どういうことをしてまぬがれることができたといっていますか(腰をおろして考えてみた。煙草の火をつけてみた。何かを供えたり、与えたりしてまぬがれた)正体をつかんでみたら、バケモノでなくて何だったか。それが初めはどんなバケモノだと思ったのだったか。

◇中扉写真説明◇

Ⅰ　貞山師匠の怪談ばなしの幽霊（読売グラフ所載）
Ⅱ　富川周重描くところの幽霊
Ⅲ　羅生門の鬼と渡辺綱
Ⅳ　信仰の修業にはげむ禅宗の学僧
Ⅴ　怪談映画「番町皿屋敷」のワンカット（東映作品）

△参考文献▽

本書は、専門学者を相手に書いたものではないので、参考書とはいっても、今では手に入りにくい古い本だとか、直接に全部か、この種の問題を対象としていない作物の中の一部分が役に立つといったふうなものは紹介しないつもりである。ここにあげた文献はいわば霊魂信仰、妖怪現象に関する入門書ふうな必読書で、著者の手もとにあるわりあい入手しやすいものだけにした。

妖怪談義　柳田國男著　昭和三一年一二月　修道社（二三〇円）

日本の妖怪について、まとまった一巻をなしたのは本書がはじめてである。井上円了博士の、「妖怪学」の大著はあるが、この方は、いわば実証科学以前の哲学的主観が先に立っている。この本、概論、各論とも、すでに発表された文集を一本にまとめたものだが、つぎのように、ほとんど妖怪の全面にふれていて、通読することによって、わが霊魂現象、妖怪現象の本質が解明できる。妖怪談義、かはたれ時・妖怪古意・おばけの声・幻覚の実験・川童の話・小豆洗ひ・呼名の怪・団三郎の秘密・狐の難産と産婆・ひだる神のこと・ザシキワラシ・山姥奇聞・入らず山・山男の家庭・狒々・大人弥五郎・一つ目小僧・一眼一足の怪・天狗の話・妖怪名彙。

孤猿随筆　柳田國男著　昭和一四年一二月　創元社（一・二円）

獣と日本人に関する論文集。猿・狐・猪・猫・狼などと同胞の関係を主としている。

山の人生　柳田國男著　昭和二三年五月　実業之日本社（五〇円）

柳田國男先生著作集第一冊。原本の初版は郷土研究社から大正一五年に刊行されている。「山」と日本人の生活の歴史を解明した宝典ともいうべき述作。山に魅せられる日本人、神隠しの現象、山に実在する人生のあることなどを中心テーマにした不朽の名著である。

先祖の話　柳田國男著　昭和二一年四月　筑摩書房（一二円）

家族制度の法制上や表面的な現状などではなしに、その根本精神ともいうべきものを中心として書きおろした名著。祖霊につらなる日本人の霊魂観を十二分に説いた同胞必読の書。本書を貫く筋は、この本の驥尾に付したにすぎない。

年中行事図録　民俗学研究所編　昭和二八年六月　岩崎書店（一二〇〇円）

年中行事のまとまった権威ある参考書としては、この本を推することができる。本書でふれた河童祭、虫送り、盆祭、御魂祭、親の膳などにつき、正しく詳しい知識は、この本によって得ることができよう。

猪・鹿・狸　早川孝太郎著　昭和三〇年五月　角川文庫（七〇円）

郷土研究社から炉辺叢書の一巻として刊行されてからもう三二年たち、著者もすでに故人になった。愛知県南設楽郡横山を中心とする野獣聞書に「鳥の話」が改訂版からついた。この文庫本の解説者鈴木棠三さんによると、本書は芥川竜之介や中国の第一級文人の周作人などの賞讃を博したという。早川さんは佐々木喜善、橋浦泰雄さんや折口信夫先生などとほぼ同期の柳田國男門下の最長老の一人だった。この本は、日本人と野獣交渉史研究にはもう古典といってもよいほどの名著として定評あり、棠三さんが言っているように「獣を主人公とした本というべきではなく、人間を対象にした厳粛な記録」である。

随筆民俗 **河童・天狗・妖怪**　武田静澄著　昭和三一年八月　河出新書（一三〇円）

題名でわかるように妖怪変化を主としたもので、非常に多くの資料が気楽に紹介されている。㈠天狗の団扇　㈡風流河童　㈢ざしき童子　㈣妖怪の心理学のほか　㈤さまよえる魂があり巻末には一一頁にわたる注解が出典を明示している。著者はもと民俗学研究所研究員。

かっぱ物語　山中登著　昭和三一年四月　河出新書（一二〇円）

山中氏はもと万造寺竜のペンネームだった人。「河童随筆」「河童昇天」「民族信仰の玩具」などの著作がある。㈠かっぱ概説　㈡かっぱ伝説　㈢支那のかっぱ伝説　㈣雷の伝説の四章から成り、「かっぱに関する雑記帳」と謙遜しているが、豊富な資料に満ちている。本書に転載させていただいた青森県津軽地方のシッコ様（民族学博物館所蔵）と大分県中津市自性寺のケンビキ太

郎詫び証文、福岡市博多のカッパ仏は、この本の口絵の三葉である。

日本妖怪変化史　江馬務著　大正一二年一〇月　中外出版株式会社（二・七円）

いわゆる旧式妖怪学の代表的述作で、戦後復刊本も出ているが、どこにも近代的な解釈はないから、題名だけは立派だが、一般の利用価値はきわめて乏しい。

古来の文献からの抜き書きが大部分で、庶民の生活経験は、ほとんどかえりみられていないこと―したがって、生活資料と創作もしくは中国輸入説話との区別が行われずに、分類が試みられているので、内容に混乱、矛盾が多いことは、たとえば妖怪変化の中に幽霊を含めているなどにも、うかがえる。ただ豊富な抜き書きと絵の転載は、見るだけならば楽しい。

不知火・人魂・狐火　神田左京著　昭和六年七月　春陽堂（二円）

この本に挿入された妖怪変化を主とした全国分布図は、本書の見返しに載っているもの。今では古本できり手に入らない本である。この著者は、妖怪変化のうちの「火」の形で人間に知覚されるものだけを中心に取り挙げて、これらの正体を自然科学的に解説しようと努力しており、この種のものでは一番まとまった本である。信仰や異常心理的な探究ではなく、燐、メタンガス、硫化水素、流星、隕石、摩擦電気、空中電気、球雷、発光バクテリアなどによって、怪火現象の正体に言及している。狐火・鬼火・人魂・火柱・蓑火・猫の眼玉・女髪の火・セントエルモの火・火の玉・不知火の十章。合理的な解釈を試みるには、一度は目を通しておきたい本である。

あとがき

梅雨の名残りが、タナバタの竹笹にさがった短冊をしとどに濡らして、いっこうに晴れる気配もない。昼間、あんなに大さわぎしてお飾りをさげるのに夢中だった子供たちも、ただ無心に眠りほうけてしまった。ことしもまた、タナバタ、ボンの御魂祭とつづいて、次第に盛夏へと向って日がたっていく。

我が恋ふる　丹のほの面わ　今宵もか、
　天の川原の岩枕枕く

夕星も　通ふ天路を　何時迄か
　仰ぎて待たむ。月人壮夫

じっさいに、いまのようなタナバタ祭をやったというのではないのだろうが、万葉には、こんなタナバタを歌いこんだ作物が、すでにたくさんみえている。

日米開戦の臨時ニュースを聞きながらスワリダコができるほど籠りっきりでまとめたオシラ神の卒業論文を世におくったのにつづいて、三田の山で何年もタマとタマシイの講義をノートした印象から、この本を書き綴って、この年の精霊祭に捧げるつもりではあっても、その折口信夫先生は、きっと、口に手をあてがいながら、おかしくってしようがないというように、横を向かれ

るにちがいない。

　こうして、あとがきを申しのべる段取りになった夜半、先生の全集の「霊魂の話」や口訳万葉集などを、ひとりしずかに開いていると、ホゾをかむように、ふだんの不勉強が悔まれてならない。それ以上におそれるのは「大白神考」のあとに馬娘婚姻譚を、「妖怪談義」の驥尾（きび）に付して本書をまとめはしたものの、その柳田國男先生に使わせていただいたカードの利用値価をまるでゆがめてしまっているにちがいないことである。

　昭和二五年の全国調査で霊魂信仰を受けもったのが縁で、ここ数年は、仲間からまで「バケモノ屋」などと、からかわれる仕儀となったが、肝心の文部省の実例資料の報告の方は、ことしのお盆にも間にあわずじまいになってしまった。

　新しい勉強などちっともなしに、ただ長いあいだの事情通というだけの状態のまま、本書がまとめられたのは、和歌森太郎博士の友情と、この本の編集を担当した星野和央君が、筆者の公休のたびに深沢の里まで通って相手をしてくれたおかげである。

昭和三二年新暦七日盆

著者

著者略歴

大正三年、福島県に生る。
昭和一六年慶応義塾大学国文学科卒業。在学中、佐藤信彦、折口信夫両先生から民俗学の薫陶を受けるとともに柳田國男先生に師事す。
現在毎日新聞社社員、日本民俗学会評議員、迷信調査会幹事。
著書「檜枝岐民俗誌」「馬娘婚姻譚」、共編「日本人の生活と迷信」など。

怪談 ©

昭和三十二年七月二十五日　初版第一刷発行
昭和三十七年八月三十日　初版第十六刷発行

定価 一二〇円

175
現代教養文庫

著者　今野圓輔（こんの えんすけ）
東京都千代田区神田駿河台三ノ七
発行者　土屋実
東京都千代田区飯田町一ノ二八
印刷者　堀鉄判

発行所　東京都千代田区神田駿河台三ノ七
株式会社 社会思想社
電話(二〇一)九六四六(編集)・八九八〇(営業)
振替 東京 七一八一二

文弘社印刷・黒田製本

人生・教養（人生・恋愛・学生 女性・読書・記録）

著者	書名	価格
谷川徹三他	教養と人生	120
倉田百三他	生活の知恵	120
原　随円他	西洋文化への省察	90
田部重治他	日本の自然と風物	80
塩尻公明	天分と愛情の問題	70
塩尻公明	自と他の問題	90
河合栄治郎	学生に与う（第一部）	80
河合栄治郎	学生に与う（第二部）	80
塩尻公明	或る遺書について	品切
河合栄治郎編	学生と教養	140
塩尻公明	女性論	120
デュモリン	全き人間	140
河合栄治郎編	読書と人生	120
F・ボッシュ	性の倫理	80
社会思想編	学園生活	80
塩尻公明	書斎の生活について	90
塩尻公明	生甲斐の追求	100
武者小路実篤	人生読本	120
三上慶子	月明学校	80
秋山英天	人間ニーチェ	100
水谷啓二	草土記	90
古谷綱武	女性の幸福について	100
永井潜	結婚読本	100
社会思想編	何を読むべきか 第二輯	100
古谷綱武	若さと幸福	120
木村健康・塩尻公明他	青年と自信	100
デュモリン	生きるよろこび	80
堀秀彦	恋愛 そのロマンと真実	100
串田孫一	受難の花	100
平井潔	人生と愛について	100
堀秀彦	結婚 その幸福と背景	100
ストープス 平井潔訳	結婚愛	100
小倉金之助	一数学者の肖像	90
平井潔	愛と性	120
天野貞祐	若き女性のために	100
ラッセル・ラスキ アインシュタイン	私は信ずる	140
マッキーヴァー 吉野三郎訳	幸福の追求	120
堀秀彦編	格言の花束	100
堀秀彦	現代に生きる古典	100
田中寿美子	若い女性の生きかた	120
出口一雄	良書のえらび方	140
ニーチェ 秋山英夫訳	愛と悩み ―ニーチェの言葉―	120
トルストイ 藤本良造訳	愛と暴力 ―未発表遺稿―	80
巻正平	恋愛の方法	160
ゲーテ 関泰祐	人生について ゲーテの言葉	140

著者	書名	価格
秋山英夫訳	希望と幸福	120
編集部編	教養人の手帖	200
爾津義範	ペンフレンド入門	160

社会・思想（政治・法律・経済 社会・歴史・民俗）

著者	書名	価格
ピグー 内田忠夫訳	ケインズ一般理論	80
ベネディクト 長谷川松治訳	菊と刀（上）	120
ベネディクト 長谷川松治訳	菊と刀（下）	120
C・ドーソン 深瀬基寛訳	政治の彼方に	70
社会思想編	社会思想史十講（上）	80
社会思想編	社会思想史十講（下）	100
E・ハイマン 土屋清 土屋弘訳	共産主義 ファシズム 民主主義	130
マリ 深瀬基寛訳	自由社会（第一部）	80
マリ 深瀬基寛訳	自由社会（第二部）	120
谷川徹三	平和の哲学	80
鬼頭仁三郎	ケインズ経済学解説	80
社会思想編	自由主義思想十講（上）	90
社会思想編	自由主義思想十講（下）	80
ケインズ 山田文雄訳	自由放任の終焉	60
社会思想編	現代社会思想十講（上）	90
社会思想編	現代社会思想十講（下）	80
ハーンショウ 服部弁之助訳	政治思想史	80
デュモリン	近代思想とキリスト教	100
喜多村浩	ケインズと現代の経済学	120
B・ラッセル 江上照彦訳	結婚と道徳	120
社会思想編	社会思想辞典	160
平井新	社会主義と共産主義	120
高桑純夫	考えることと為すこと	90
C・フタク 関・河上訳	マルクスとマルクス主義者たち	120
和歌森太郎	歴史の見かた	100
林信雄	法律学入門	120
桜井徳太郎	昔ばなし	100
イギリス社会主義連盟著	二十世紀社会主義	110
塩尻公明	人格主義と社会主義	100

- マヤキーバー 菊池綾子訳　社会学講義　160
- H・ラスキ 関・吉田訳　共産主義論　140
- エレン・ケイ 平井潔訳　恋愛と結婚（上）　100
- エレン・ケイ 平井潔訳　恋愛と結婚（下）　100
- 滝口宏　古代の探求　100
- 大島康正編　現代の思想　100
- 後藤守一監修 森豊　写真・登呂遺跡　100
- 木村健康解説　トマス・ヒル・グリーンの思想体系（1）　150
- 関嘉彦解説　英国労働党論　80
- 山田文雄解説　社会思想家評伝　140
- 外山茂解説　自由主義の歴史と理論　90
- 猪木正道解説　学生に与う（全）　140
- 中川俊一郎解説　マルキシズムとは何か　80
- 細谷松太　日本の労働組合運動　120
- 土屋清編　経済用語辞典　140

- 和田春生　労働運動入門　120
- 関嘉彦　新しい社会主義　180
- J・ロック 服部弁之助訳　政治論　120
- E・ロール 白石・吉田訳　近代経済学入門　140
- 鶴見俊輔　プラグマティズム入門　100
- 入江啓四郎　現代の国際法　100
- B・ラッセル 江上照彦訳　ソビエト共産主義　80
- 林信雄　社会生活と法律 ―民法講話1―　120
- 林信雄　経済生活と法律 ―民法講話2―　140
- 林信雄　家庭生活と法律 ―民法講話3―　120
- トインビー 吉田健一訳　世界と西欧　100
- 和歌森太郎他　トインビー・人と史観　100
- 波多野鼎　初歩の経済学　120
- 松本一郎　これからの日本産業（Ⅰ）　120

- 藤倉輝夫　これからの日本産業（Ⅱ）　120
- 中西永年　これからの日本産業（Ⅲ）　120
- 宮崎信江　裸族シャバンデス　140
- トインビー 深瀬基寛訳　試錬に立つ文明（上）　100
- 〃　〃（下）　100
- 民社研会議編　民主社会主義とはなにか　200
- W・タイマー 内海洋一訳　ドイツ社会民主主義の歩み　140
- 宍戸寛　アフリカ　160
- 吉村忠典　古代ローマ散歩　180
- 今野円輔　現代の迷信　200
- 武田静澄　日本伝説の旅（上）　240
- 〃　〃（下）　220

哲学・宗教（倫理・哲学・論理 宗教・教育）

- ベルジャーエフ 野口啓祐訳　共産主義の問題　70
- ベルジャーエフ 氷上英広訳　孤独と愛と社会　100
- C・ウェッブ 瀬沼茂樹訳　西洋哲学史　140
- 三谷隆正　国家哲学　60
- B・ラッセル 柿村峻訳　哲学入門　100
- 戸坂潤　科学論　100
- 賀川豊彦　聖書の話　120
- ベルジャーエフ 野口啓祐訳　現代における人間の運命　80
- 小口忠彦　才能と性格　120
- 小口忠彦　才能と自信　120
- 小口忠彦　才能と職業　120
- 津留宏　青年期　120
- 古田紹欽　禅 現代人の生き方　120

- 古田紹欽　宗教とはなにか　120
- 歎異抄研究会　歎異抄入門　140

科学・自然（自然・科学・工学 生物・医学・心理）

- ハクスリイ 中岡宏夫訳　蟻の生活　80
- 日下道男　海洋の秘密　120
- 内田清之助　野鳥物語　80
- 依田新　心理学入門　120
- 宮本忍　青年期の生理　100
- 荒川秀俊　台風・猛威への挑戦　100
- 宮本忍監修 行実直美著　あなたの健康相談　120
- 原田三夫　宇宙の開発　160
- 加藤正世　虫の世界　200
- 島崎敏樹　心の眼に映る世界　150
- 本明寛　心理テスト　160
- 本明寛　処世術　160

文学・芸術（文学・映画・演劇・美術・音楽・語学）

著者	書名	価格
今村太平	映画の本質	90
青野季吉	明治文学入門	70
中島敦選集2	光と風と夢 他二編	100
中島敦選集3	幸福 他八編	120
賀川豊彦	一粒の麦	160
青野季吉選集1	革命と文学	100
青野季吉選集2	現代作家論	80
青野季吉選集3	文学と人生	80
郡司正勝	歌舞伎入門	100
新城和一	ドストイエフスキイ	120
新藤兼人	シナリオの話	120
野田高悟 新藤兼人他	シナリオ入門	100
ロマン・ローラン 藤本良造訳	トルストイの生涯	120
神崎清	日本の名作 その作者とモデル	100

著者	書名	価格
荒正人編	文学 その創作と鑑賞	120
土屋文明	万葉名歌	140
山室静	世界文学小史	120
村松定孝	改訂 近代日本文学の系譜	140
荻原井泉水	芭蕉名句	80
ヘルンマ・ヘッセ 山下肇	青春彷徨	90
加藤周一	知られざる日本	80
池田亀鑑	源氏物語入門	80
大竹新助	写真・文学散歩	140
村野四郎	現代詩を求めて	120
河北倫明	日本の美術	120
唐木順三	森鴎外	100
蜷川譲 兵藤正之助	ロマン・ロラン	100
大竹新助	続 写真・文学散歩	140
中村溪男	日本人の表情	100
加藤周一	西洋讃美	100

著者	書名	価格
瀬木慎一	現代の美術	160
佐古純一郎	文学をどう読むか	120
瀬木慎一	ゴッホ 生涯と芸術	100
内村直也	新劇の話	100
菊地貞夫	浮世絵―庶民の芸術―	140
蜷川譲	フランス文学散歩	120
椎名麟三	愛と自由の肖像	100
荻原井泉水	一茶名句	100
重森完途	庭の美しさ	140
金子良運	日本の彫刻―国宝シリーズ1―	160
伊藤延男	日本の建築―国宝シリーズ2―	160
林屋晴三	日本の陶磁器―国宝シリーズ3―	160
中村溪男	日本の絵画―国宝シリーズ4―	160
村井富雄	土器とはにわ―国宝シリーズ5―	160

著者	書名	価格
浜口隆一他	国立西洋美術館	120
本多顕彰	文章作法	120
服部龍太郎	世界民謡集―歌の風土記―	140
大竹新助	写真・路―街道風物誌―	160
瀬沼茂樹	近代日本の文学	120
岡田譲他編	正倉院の宝物	160
柳宗玄	キリスト―美術にみる生涯―	130
服部龍太郎	日本民謡集―ふるさとの詩と心―	180
渡辺淳	イヴ・モンタン―人と芸術―	120
菱田安彦	アクセサリー―その知識と魅力―	130
古川久	能の世界	160
塚崎進	笑いの誕生 日本人の心にあるもの	100
飯泉六郎	日本のことば―今と昔―	140
尾崎宏次	現代演技の話	100

著者	書名	価格
堀江知彦	書の美しさ	160
郡司正勝	かぶきの美	160
本多顕彰	西洋文学入門	100
片山哲	白楽天―東洋の詩とこころ―	160
山本太郎編	愛の詩歌集	200
上甲幹一	話しかたの技術	100
多摩芸大編	日本の職人	140
須山計一	日本の戯画	160
木村重信	洞窟の美術	150
平岡定海 山口光朔	東大寺	180
重森完途	京都の名庭	200
大竹新助	写真・岬 旅と風土	180
本山桂川	写真・文学碑	240
野間宏他	写真・中国の顔	150
ゲーテ 秋山英夫訳	若きウェルテルの悩み	100

著者	書名	価格
杉本つとむ	日本語再発見	160
若杉慧	石佛巡禮	240
古川久	狂言の世界	160
石川正雄	啄木のうた	160
岡田紅陽	富士山	220
松山樹子	バレエ技法と鑑賞	240
椎名麟三	私の人生手帖	120
金子良運	仮面の美	240
臼井喜之介	カメラと詩歌京都	220
藤本良造	音楽入門	120
荻原井泉水	奥の細道風景	180
G・シュミット 中村二柄訳	近代絵画の見方	180
蜷川譲	ロシア文学の旅	200
井上宗和	日本の城	200
ハックスレイ	文学と芸術	150

著者	書名	価格
矢島清文	日光東照宮	220
高階秀爾・中山公男	ルーヴル美術館	200
臼井喜之介	吉井勇のうた	200
三木淳	写真・メキシコ	180
横田正知	牧水のうた	200
加太こうじ	落語 大衆芸術への招待	160
郡司正勝	新訂かぶき入門	180
ハックスレイ	社会と文化	140
重森三玲	茶室と庭	280
並河亮	薔薇と人生	180

趣味・生活（娯楽・スポーツ・生活科学・実用）

著者	書名	価格
江戸川乱歩	探偵小説の「謎」	100
深田久弥	四季の山登り	100
渡辺公平	旅・ロマンと郷愁	140
渡辺公平	山登り・準備と技術	120
今野円輔	怪談 民俗学の立場から	120
三井高陽	切手 収集と鑑賞	100
三井高陽	切手の鑑賞（乗物篇）	100
戸伏太兵	剣豪 虚構と真実	120
三井高陽	切手の鑑賞（人物篇）	100
庄司浅水	世界の奇談	120
関豊治	スキー 準備と技術	120
三井高陽	日本の切手	100
織田幹雄	オリンピック	110
渡辺公平	高原旅行	140
山名正太郎	帝王 栄光と人間	100
松田修	日本の花	140
渡辺公平	写真・山 雲表の魅力	140
庄司浅水	世界の秘話	120
吉家光夫	すまいの設計	140
栗林一路	写真・スキースクール	140
伊藤逸平	現代の漫画	130
松田修	野の花・山の花	160
栗林一路	写真・登山の手帖	160
更科源蔵	改訂北海道の旅	180
中島河太郎	推理小説ノート	100
服部龍太郎	世界名演奏家事典	140
交通新聞編	味覚旅行	180
松田修	花ごよみ	260
片方善治	洋酒入門	200
富永次郎	日本の菓子	220
桜井省告	住居相談	240
山本偦	山旅のガイド	240
吉野三郎	手紙の作法	220
藤井常男	車窓より見た日本の植物	220
原田種夫	九州の旅	240
大竹新助	伊豆・箱根の旅	220
草野心平他	東北の旅	240
平井忠夫	南近畿の旅	220
中村由信	瀬戸内海の旅	220
庄司浅水	海の奇談	160
産経新聞社編	東京風土図（1）	240
産経新聞社編	東京風土図（II）	240
木村弓子	美しい装い	250

一九六二年新刊

九月より三月現在まで記載しました。なお既刊三六〇点の解説目録ご希望のかたはお近くの書店か直接小社にお申し下されば進呈します。

著者	書名	価格
庄司浅水	海の奇談	160
産経新聞社編	東京風土図（1）	240
加藤正世	虫の世界	200
荻原井泉水	奥の細道風景	180
G・シュミット 中村二柄訳	近代絵画の見方	180
蜷川譲	ロシア文学の旅	200
産経新聞社編	東京風土図（II）	240
井上宗和	日本の城	200
島崎敏樹	心の眼に映る世界	150
木村弓子	美しい装い	150
関泰祐	人生について ゲーテのことば	140
古田紹欽	宗教とはなにか	120
吉村忠典	古代ローマ散歩	180
松田修	路傍の草花	180
矢島清文	日光東照宮	220
高階秀爾 中山公男	ルーヴル美術館	200
中村由信	瀬戸内海の旅	220
三上操	海外旅行ABC	240
大熊規矩男	タバコ この不思議なたのしみ	200
臼井喜之介	吉井勇のうた	220
歎異抄研究会	歎異抄入門	140
今野圓輔	現代の迷信	200
三木淳	写真・メキシコ	180
秋山英夫訳	希望と幸福 ヒルティのことば	120
横田正知	牧水のうた	200
文庫編集部編	教養人の手帖	200
井上誠	コーヒー入門	200
加太こうじ	落語 大衆芸術への招待	160
郡司正勝	新訂かぶき入門	180
産経新聞社編	東京風土図（III）	180
産経新聞社編	東京風土図（IV）	220
ハックスレイ	文学と芸術	150
ハックスレイ	社会と文化	140
重森三玲	茶室と庭 茶の造形入門	280
並河亮	薔薇と人生	180
武田静澄	日本伝説の旅（上）	240
武田静澄	日本伝説の旅（下）	220
本明寛	処世術 心理学による人生案内	160
日経新聞社編	街道今昔（上） 趣味の宿場めぐり	260
日経新聞社編	街道今昔（下） 〃	260
禰津義範	ペンフレンド入門	160

R